片

2
0
2
4

u_

一月

灼けるようにも仄白い
明るみに行き着いたように指し示される　おどおどと強張る呟き
それとも唯
偽りが指し示される為に指し示される　偽り
な偽りを溶かそうと態と怖ず怖ずとも指し示されようとされる
明るみ　ぁあ遂に
行き着いたんだと
安らかさに包まれる
な偽りに掴み掛かるかにも
（偽りが偽りな筈は無い）とか呟きながら
な偽りに絡まれ藻掻くしか無いのは

明るみ　それとも悉くをぴたりと偽りと
明るみから始めた事にするしか無い
いや　偽りが嘘に決まってよう　なら　また嘘が嘘が嘘に決まってよう
なら　嘘こそ唯一つ縋れる喜び
なら　な喜びが嘘を溶かし尽くそうかとも
酷く低く重たげな処で
な重たげに搦め捕られるかに藻掻き苦しむのは　独りぽつりと偽りが嘘
を曝いて　嘘を真似る呟き
を遂には丸裸にしようかとも勢い付く　それとも
そんなの始めから嘘じゃ無かったさ　と言い張って譲らない
悉くの始めの奥に縛られて　身を反らされる苦しみに喜び転げる
望んだ筈の明るみに行き着いても
何処へとも戻ろうと　な
戻れる何処かに摑み掛かるかにも　な
己の身振りに絡まれ藻掻くしか無い（嘘が嘘が嘘ならば）
偽りが偽りが偽りなのさ　と嘯いて
灼け尽きる事も無さそうに
それはほんの微かな

二〇二四年一月四日

有りもしなかった
筈の時が　拵えられて行くのは
他に時は　何処にも見当たらないし
聞こえも　匂いもしないからにしろ
却って
有りもしなかったせいで　何処にも
時は　時で無い何かに化けた振りで
透けて掻き消される程に満ち満ちて
満ちる程に透けるばかりで
透ける程に…　いや
透けるばかりの先には　透ける程に…
なんて事は起こらない　などと
まるでそんな事らを顧みられたかに
高ぶり驕るのは何処の誰でも有りもしなかった

筈だけれど　な
有りもしなかったにしろ　時は許す筈は無かろうに
と何処かの
透ける程に　の中を墜ちて行く振りに溶けて掻き消される…
二〇二四年一月六日

二月

見誤り
ようもない
それは
それ
とも言えて仕舞えるより先に
真っ直ぐの一筋の光りよりも　さも明明と

過ぎ去る姿を凍り留める形（なり）なら形（なり）に
黙る姿を湧き上がらせようか　どうなのか　な
どうなのか　にさも導かれるのなら辿辿しくも
それより先のそれらしく　先など冷たく溶かし分けて
岩でも砕き潰したいかに　透ける風のように荒ぶって
問える事など一つも無い　の
無い一つを問おうとする　な問いなら問いに問い懸ける
それより先のそれよりも　先走ろうとしなければならない身を
時さえ転げ潰したいかに　あぁそうだ
時は一つの重さだったな　と顧みる姿の
あぁそうだ　姿は顧みられての姿だったな　と
な姿の何処にも無いなら
その無い一つを問おうと
先走ろうとしなければならない身の
身には余る　余り過ぎて過ぎて行く
見誤り
ようもない
それを

それ
とも言えないと知りながらに　その
見誤り
ようも無さに
応えられたのか　どうなのか
問える事など一つも無い一つを問おうとする問いが唯
それ一つ切りに引き裂かれて行く形（なり）を見送る
それは
重さでしか無い光りなどより　止め処なく速い影かな
さも明明と消え現れる一つの　とも言えて仕舞おうと
一つでなど有ろう筈も無くに　必ず見誤られようなら
二〇二四年二月一日

埋まるように蹲る程に鮮やかに明明としか
　確かな
（それは掴み取れる流れ　それとも

流れを砕き凍らす黙る儘な泣き叫び）
撥ね已まないのだから　全く確かな
重過ぎる硬い風の塊を鞣して纏おう
下に隠された赤黒い肌より赤黒くも
それがそれを恃むより無いなら必ず
肌ごと剥ぎ取られるようなふわりと
差し込む痛みを塗されるかに温かい
延べ挟まれた
躍る
只事ばかりの連なる
細い限りの（細い限りなんて少しも細くない　そんな）
細い限りに叛く限りに細い儘な
それだけが向ける向きを向いた
ぼやけた染みが消されようとされる　その
消されようとされる様が消されるようなら
その後を追えるのは
千切れ乾涸らび色も失せた肌の
骨の匂いなら恋しがろうかな

転げ已まない
向きの無い向きへ窄まる騒がしさか
な
それでも残る艶めかしさなどを隠す
今更何故隠すのか　と尋ねたくなる
尋ねたくなる程に何を尋ねようと何も返って来ないと知れるなら愈愈
誘われるように　惑わされるように
湧き出すような　勢いを少しずつ増して
それだけが向ける向きが向きに叛かなければならないとは
二〇二四年二月三日

露わに身の
細みが洗い出される度に冷める
眠りは常に何かの間違いか
と揺らぐようなら眠りなど必ず
誤りで　ずっと唯

目覚めて居るしか無い　その
無さを眠りと偽っているだけで
なので　目覚めにしろ
或る時何処かで目覚めるのとは違う
そんな目覚めようも無さに始めから
目覚めた儘に目覚めて居るしか無い
などと　また
露わに細みを洗い出す身に凍みよう
醒めた眠りの止め処無さに
眠り込めるなら目覚めて行こうとする
そんな
目覚めの有る筈も無いと分かりながらに
冷めるばかりに
二〇二四年二月二十一日

後退る後に残る

びくびくとも嫌嫌ながらに
細身の影を薄く延ばして流し去るように
その危ぶまれる唯一つ限りの何を　いや
何に
向けて目覚めて行くのか　その
疑いかも疑われる疑いに接がれようとする
厭う程に親しさを増す親しさの
目覚めようの無さへ目覚めようとするのは
常に目覚め続けて居なければならなかった
小さ過ぎて見えない傷口一つを脹らませる
細みの影に刻まれた（
なんて嘘に決まってる）
前を向く程に首を曲げて俯き丸まるしか無い
温み
それとも
温みに窒がる目覚めの　それが
眠りそっくりなら全く　眠りでしか無い
なら眠りから疲れ知らずに逃げ続けるしか無かろう

躍るように満たされる
お前は必ず　始めから
そんな者で無いならどんな者でも無かろうに
けれど　誰にそんな事が知れようか
な疑いなら疑い　で無いなら
な疑いの疑いで無さを無さな儘に受け容れる
なそれならそれ
を備えようと目論むのは
二〇二四年二月二十八日　親（ちか）しさ　温（ぬく）み

凍り窒がれた罠を知らせる　その罠よりも
冷たい声の連なりを目を凝らし跨ごうとした
目覚め果てないような思い出　その思い出の欠片一つよりも
硬く瞑る儘に静まり返るのは　その何が何とでも無さそうな
一筋に暈かされ消され掛ける境目なのか　と
重い（重い？　何を？）

冷たい（そうだ　きっと冷たいに違いない）と
冷たさに
疾っくに背を向けられ　境の果てへか行き去られ　何も
その跡に残らない辺りに粗粗と残り物かに降り立つなら
それが目覚めでしか無かろう
かに
そんな目覚めはさぞ重重しく角角しく
見窄らしげな色ばかりを噴き出し躍り回らせてようか
二〇二四年二月二十九日

三月

望みは四つとも交わり閉じて　四つとは異なる数に
数えられたそうに笑うように　湧き出して来るのは

角角しい明るい陰を撥ね連ね　怠け心を寄せ組んで
望みが望まれる儘では厭きて　悪戯の痕を浮かべる
暗がり
に黙り込み蹲り眠り込み　　ほら
と誰かに目を醒まさせられた
見渡せる辺りは変わらない明るさで　え？
変わらないって何時何処の何と？
と　其処は
夜でも昼でも明け方でも暮れ方でも無さそうに空を狭め
胸を狭め
心無し
望みへの思いの揺らぐなら揺らぐで　ほら
と誰でも無しな声ばかりに目を塞がれたなら　時を
棄てたんだ
なんて事には疾っくに慣れてる筈の　な
遠くまで見渡せる筈も無く狭まり続ける
細く淡い陰を引いてふらふらと背の高い
空は

すっかり空でも無さそうにも舌足らずに
棄てられたなんて何の事でも無く
時は待たれてましょうね　って
誰に？　そう尋ねられる　のは
何も残らないのなら時の痕しか残らない
交わり閉じた四つの望み　かな
二〇二四年三月十八日

深みばかりが深過ぎる
浅みなんて真昼みたいに影も無い
なんて思えて仕舞うのは
深過ぎる眠りの夜を立て続けにも
明かしたからで
そんな明るいばかりな眠りから醒めれば
それは確かに　見るものはどれも
底無しに深そうに真下へと　唯明るんで

明るむ程に眠りごと遠ざかるようでも
夜が深みを水のように満たせば　全く
行き成りに光りは断たれて失せ
変わり続けて已まない
流れ来て真下へ沈むばかりな　やはりこれも水のような
滝の裏が滑滑とした色を滲ませ凝るような
ぼやけた暗がりが水飴のように粘る音を立てて已まない
ぼやけて已まない　で
何と距てられて居るのか　って
それを知れない苦しみがその苦しみを失った苦しみを投げ棄てるように
問い掛けて来る
深みなんて浅みの唯の澱みたいに澱んで汚れて
二〇二四年三月十九日　凝（こご）る

遣り過ごされた悪戯のように
凍るように散らかって

目覚めてから眠るまで（
それとも眠りに落ちてから醒めるまで）
どちらがどちらか見分けられないのなら同じ事の　その
事が唯　事で有る冷たさ
を
醒めた目で眠る目で殺す目で生き返らせる目で
目で目を鋭く裂き開くように…
な日日を幾ら重ねたところで
食べるなら殺す　食べられるなら殺される
それともそんなのすっかり逆さまだろうか
と
土色に重げな空に
横滑りな閃きを鍬のように打ち入れるように
ぁあ何も一つも変わらないんだ　こんなのは
全てが変わる前とそっくりだぞ　にしたって
そうと分かっただけでも少しは変われたかな
…
いや　こんなのもうすっかり知ってるよ　その

そうと分かっただけでも少しは変われたかな
なんて事なんて
ずっと昔に　そっくりこれはこれだったよな
と
思いをどうにも鍬のように打ち入れるように
横滑りさせて仕舞うけれど　な
横滑りが横滑りを横滑らせようなら
事が唯　事で有る冷たさ
も
仄かに微笑みを返して来ようか
食べるも食べられるも知らず唯
殺しに来たように
二〇二四年三月二十日

何処へ逃げ込んでも逃げ果せても
至る処びっしり物は並んでしか現れて来ない

それを逃れられないで目は目で居られようか
それとも物が並ぶなんて事は有り得なくて
並ぶのは物を嫌でも映すばかりな目なのか
とも　そんな歪んで
角張った目の汚れを落とすように見上げると
しかし何故見上げて仕舞うのだろう
と訝りながら見上げられる先には先が続いて
嘘は暴かれ隠し事は漏れに漏れ　すると更に
その先には先が見上げられ（
空が嘘なのは知ってたよ
そんなの隠しようも無いさ）と
見上げられ続けるばかりなら　疾っくに
見上げられる先など見失われてよう
とも　見えて来て
けれどその見えて来るって　何が
と
剥き身にされた目ばかりが固まって居るでも無いのなら
どちらを振り返ろうと振り仰ごうと

身に付けていた物が剥ぎ取られて行く　その
身に付けていた物が身に纏わり付いて来る　その
重く粘る形（なり）が幾重にも重なり　襞を為し
硬く強張り見る見る汚れて
身から距たるなら疾っくに
身は身包み醜い裸に剥かれ
嘘も隠し事も無い中の無い中しか無い真ん中に
嘘と隠し事塗れの身を縛り付けられ　それでも
ぐるぐる身は回され回されても身動ぎも出来ず…
ぁあ　そうか　それで見上げるしか無いんだな　だって
動けるのは目ばかりで　それで
うっかり見下ろそうなら醜い己が裸を目に映して仕舞いそうだから
そうして曝されるのは何だろう
目も身も貫かれ　一つ切りに　何処の何とも並ぶ事も為らずに
唯　物で有るしか無い儘に切り刻まれるのでも待ってようなら
それがその　見えて来る何か
らしいらしい
と並ぶのは

らしいばかり　らしい　らしい

二〇二四年三月二十一日

喉の奥を押し拡げ奥の奥まで隈無く覗き込まなければ
ならない　その危ういのは分かって居る程に
狭く閉ざされた海の底を蠢くらしい　どれも
くっきりとした形を硬い限りに硬そうに浮き立たせる
小さな幾つも影が動き回るのを見下ろせる処に来ると
私とは少しも似て居ない　子供の私に必ず会えそうで
けれどその子供の私は口を緊く結ぶ儘に直ぐにもまた
後ろに拡がる眩い海の眺めに溶けて戻って行きそうで
この身の奥の何時も決まった辺りから込み上げて来る
何だろう　そんな
何だろう　を
何だろう　に拘って仕舞う心根ごと全て打ち消すには
この身の喉の奥の奥までが唯

虚ろで
けれど
虚ろには　どんな物より物のように
くっきりとした形を硬い限りに硬そうに浮き立たせる
小さな幾つもの影が明明と滑り回り　その滑り終えた
見えない入り組んだ跡を全て辿り直し隈無く見て取り
虚ろには　一つの出口と一つの入り口が必ず有るのを
狂い無く確かめなければ
ならない
二〇二四年三月二十二日

湧き出して已まない　かに見える
影よりも濃い小さな幾つもの　形
どれも　人の形だけはして居ない
唯一つでも人の形などして居れば
一並びに石塊の連なりに成り変わって仕舞おう

で　どうやらそんな成り行きらしく
すっかりそれらは形らしい形を無くし
どれも石塊そっくりに
石塊にしか出来ない動きで転げ回っている　けれど
それら石塊の形こそ動いて転げ回る限りは　どれも
人の形　それとも
人の形そっくりに成り変わって仕舞おうか　…
で　無いにしても　いや
で　有ろうと無かろうと　それら姿の躍る辺りには
きっと　うっかり目を醒ましたりしたばかりに
思い掛けない…　そうしてそれは
思い掛けない儘な限りは　それより言いようも無く
な自らに向けて
その姿の無さを
躊躇いながらも笑いのめすように…　けれど
な事をしている姿を見付けられるでも無く　それは
思い掛けないだけな儘に　取り散らかされて行くか
醒めた目を蹴散らしでもするように

にしろ（
誰が言うでも無く）　そんな儘で済む筈は無いよね
と　人の形そっくりの　何処か厚ぼったい声なら声は
酷く懐かしいせいでその懐かしさごと壊して行く　その
壊されて行く懐かしさの
懐かしさを厳しく拒む懐かしさ
もまた　壊されるように
思い掛けない事の内に違いないのなら
二〇二四年三月二十三日　石塊（いしくれ）

四月

其処に
何も残らない時から　その

時が黙って動き出す　のか
何も残らない　だなんて
居なくなった誰かの唯の声の欠片だったと明かされながら
な
其処で
黙りに呑まれるように飛び散るのは
何も残さなかった明るみに載せられた
その儘に写し取られ
どう映し取られようと
それはそれとは違うと言い放つ　けれど
そっと体を触れるように側を掠めるように
なので唯
明るみの他に何も無い　その
無いばかりなのに疑いを告げ　それは
疑いへの疑いを告げるようでも有るなら
それを　去った時に充てて　そうして
導かれる側の　側より側に
明るみとは違いながら明るみでしか無さそうな

何も残らない時への疑いが
風のように　風が息の根を止められたように
肌を撫でて行こうか　仄かにとも荒ぶって
二〇二四年四月二十五日　黙（だんま）り　側（そば）

生い繋るのは石では無いのか　真上にばかり尖った木を真似て
と
見渡せる限りの木木が石を目指して　憧れの目付きで
軽い限りの明るみを孕む風を送り込んで来る
とも
風こそ　石より重く動かずに燃え立つ明るみに突き刺さって
衝き上がって　陰へと
溢れて来るのは深く隠されて行くもの　隙間無く
時に溶けるように　濃やかに
そんなものに因って
それとも　そんなもの無しにはもう

生きては行けない
とも
血の色なら血飛沫か　それとも　どんな闇より濃やかに
脅す為だけに暗い命の色を映す
そんな
陰の奥まる限りに奥まる先かに
抜けて行き過ぎて　その先まで貫かれて果てるか果てないか
に
誰か知らない者の（
ならそれは　その誰かを知らないと嘯く私の他に無い　…かとも）
息の根は　深く埋もれた磐の底に根付きたいかに
ころころころと
石のように尖り転がって已まないけれど　それを
眺め渡すのは　誰か知らない者でも私でも無いのなら
誰かしら尖った頭の生白く丸っと剃り上げられた
目を失った　それとも抜けるような色の肌と同じ真っ白な目をして
それを笑って居なければ　遣っては行けない
陰の　ふと人の形を取ったりもする

二〇二四年四月二十六日

穴　は唯穴を呑みたくて一途に穴で有るしか無いんだろうな
と　穴を
瞼の裏に思い浮かばせては已まない
なので
瞼の裏が穴を呑みたい一つの穴で
そう思う程に　そうに違いない穴なら穴は
穴が穴を呑める筈も無いのなら何を呑んで
つい今の今まで　遣って来られたのだろう
と　其処に
深い程に楽しく　そうっと暗く冷たい穴が
穴で有る筈も無く　ぱっくり開いた形の儘かに（
その　儘かに　のせいで　ずきずきと酷く痛くに）
墜ちて行く　あぁ
墜ちて仕舞っては　すっかりそれは穴とは酷く隔たった

きっぱり穴に背を向けて
そちらへと突き刺さって行く
突き刺さりながらも　ぱっくりとその先を
明明と艶めかせては拡げて已まない　いや
それならそれが穴で無くて何なのか
と　激しく凝っと抗うそんなそれが
瞼の裏に　ひっそり浸され溢れては
二〇二四年四月二十七日

五月

黙って時は湧き立って
そんな自らを祝うらしく
時の外へ勇んで行くらしく　それは

けれど　傍目にそう見えるだけの事
にしろ　傍目と言ったところで　それは
時の中に閉ざされた誰かの目でしかなく
その奥底にまで　時は浸み込んで
なので　きっとそれは時が時を見る目で
ならそれを傍目と見るのは誰の目だろう
と　その目の奥底を覗き込むようにでも
見ると　時なんてすっかり空っぽで　そうか
きっとそれは空っぽだから　ずっと湧き立ってても居られよう
昼も夜も溶かして消して　湧き立つ儘で居るしかないらしく
誰の目にも見えない目で　そんな
酷く余所余所しい冷たい目で　きっと全く自らの事だろうに
時が時の外へ勇んで行くのを　さも傍目に
黙って見て見過ごす儘にして居る　時は
二〇二四年五月八日

激しく迷って居たのは何だったろう　それともそれは
激しく迷いたかった
激しく迷う自らを
激しく求め続けて居たかっただけとか　なら
求めるそれを　得られない儘にも　そうして
激しく迷って居たのかも知れない　それとも　そんなそれを唯
激しく求めて居ただけだとしたら
少しも迷ってなど居なかったのか　と
見回すと何もがそんな事ばかりで
すっかりそんな事らに取り囲まれて（
まるで森の中に独り居るようなら　その森で）
激しく迷う事で　その森を突き抜けて行きたい　そう
激しく求めて居たし今も居るに違いないけれど
喩えでしか無い森では　何処へ突き抜けるも無く
森は愈愈濃く深く喩えられ　そんな
森に埋もれて消えて　それがその儘　それを
激しく求める何かでしか無いのなら
激しく求める事など全く要らなかった

と　そんな事ばかりを　尚も
激しく求めて仕舞う限りには
迷いは却って森の喩えで　それとも
迷いと森とは　また更に深く喩え合い
互いの喩えを濃くして已まないのなら
愈愈激しく求められて仕舞う　それは
そう迷われる程に　迷いを遠ざけずには居られずに
二〇二四年五月九日

…喩えは疲れに過ぎない）
水のように形が無く　唯
水が何の形も脱ぐように　そうしては
けれど　生かされる儘に
脱ぎ棄てられた形の肌触りに絶えず驚き続ける儘に　そんな
それの姿の　それの儘に　ひたすらに
想われたい　そうとしか

望まずには居られない…
ので　独り私なそんな　ぽつりと
私には　なので　何の姿も無く
にも
そう定められた通りなのか　誰の思う通りなのか
形の無い身と　その身とはまるで異なる何かとが
互いに入れ換えられ換えても換えても換えられて
墜ちても愈愈昇っても行く　その
心を苛み消し去るよう　心しよう
例えば　喜びには形が無い　きっと
そんな事を唯　仮初めにでも見出す為に　けれど
仮初めとは何がどうなる姿なのだったろう
仮初めは何処までも仮初めで
仮初めの他に何も見付からないのなら
喜びに形の無いのなど　抑も
喜びなど何処にも無いのさえ　始めから分かり切ってように
それとも喜びが　そうして
喜びの姿諸共に脱ぎ棄てられ　幾度も脱ぎ棄てられるのなら

水が何の形も脱ぐような　そんな確かな
形が（それとも驚くばかりに　その形が
形のような形に過ぎなくても　いや
形に少しも似てさえ無くにも）　唯
見出される儘に　その姿を見せては
二〇二四年五月十日　幾度（いくたび）

水の事だけは憶えて居る　筈がその
水から怪しい（
水をどうかしたんだっけ　それとも
水でも無くて　ひょっとして水かも知れない　水のようなものを
飲んだとは憶えて居るか　それとも
飲んだには違いなくても　飲んだからには水らしく思えるだけで
少しもそれは水なんかじゃ無かったとか）で　それは
誰の事なのか　な誰かは（誰かではあるからは誰でも良さそうに）
水が　流れもせずに凝っとして居るように　も

独り　何処からも離れて　何処からも離れては行く当ても無くに
或る確かな事柄を明明と身に映し出して居ないか
独り　その
独りからすれば　その映し出される事柄の他は
仄暗い穴の中の　現れては直に消える事でしか無くては
明明と映し出されるそれはそれ限りに際立って
一塊の　硬い
硬い程に
水かも知れないし水のように一飲みに出来るかも知れないような
けれども　そんなものの姿の一つも思い浮かばないのなら　それは
その時を限りに踊り回る　その
時こそ喜ばれ
喜ばれる儘に　遠く何処からも離れて見える　其処へ
帰り着けなければ　水はきっと
流れも凝っとするも儘ならずに　忘れられるしか無い
そうか　そんなすっかり
忘れられた水の　なので
水でも無い事の　明明と映されるしか無いのは　全く

そうなるしか無くに確かな　確かな程に有りもしないような事で
二〇二四年五月十一日

必ず毀れる　のならその
必ず毀れる　の中に必ず
それを直する事が含まれて居る筈
かどうかは　確かめようは無くても　そのそれが
必ずそれで有る事でその通りにそう為っているからには
必ず毀れる　とは唯その中で
狭く窒がれた穴の中で水が自ずとくるくる回り続けるかに
そんな儘な事が　きっと半ば毀れては半ばは直ぐに直って
何とも為らない　けれど
その恐ろしく荒荒しい力の猛り狂う様が見透かされるなら
その力に隠された奥には
何も毀れもしなければ直りもしない静かさの禍禍しさなどが
そんな事が何時毀れて消えて再び直る事も知れなくなるなら

そうでしか無くに　それは
そうでしか無い自らに迷う儘に　その禍禍しい
静かさを　ほんの少しずつ毀しながらその直す事も要らずに
こちらのこちらへと衝き上げられて来る姿の限りを
水底の底の抜けた色のように艶めかせようとも
拒まれるしか無い　その
拒む身の（それとも　唯そっと
拒む身の振りをしている）
誰かの　終わりようの無い静かさ
二〇二四年五月十二日

寄せ集められた
置き棄てられた
送り届けられた
脹れ切って爆ぜる間近の静かな轟きの
喘ぐ息に流れ接がれるような艶の頂き

なら唯
裸に剥かれた頂きなだけの事なのでは
けれど
喘ぐ息が次の息を殺しては継がれよう
静かさを拡げる限りの醜い狭さを呑む
喉なら
ぐるぐると光りを内へ内へ窒ぎ矯めて
静かな轟きが光りを刳り進むようにも
そんな吹き溜まりの暗がりの重そうに
寄せ届けられた
置き集められた
送り棄てられた
二〇二四年五月十三日

息を埋める　な
息は喘いだりはしない

換わりに
輝きも暗みも加えられず　独りでに
直ぐに埋めなければならない　小さな
その
小ささを造る業を磨いて接ぎ合わされた
空っぽな穴の換わりかに見付けられて仕舞う　やはり
そっと　小さな　その　小さな儘に
息を殺すように
息を溜める　溜めては
その匂いを守り温める　柔らかく
小さな
程に　今にも輝きからも暗みからも取り除かれよう
有る儘に跡形無くも尽きる事も無くに全く取るに足らずに
満ち足りた　その空っぽな穴かに　柔らかく
絞り上げるような　息にもならなくて声を立て懸けるしか無い
その温かみだけが噛み締められようとされる
常とは異なるからは　平らかに穏やかに常な　それは
必ず何処へか届けられよう　恐らくは森でも砂の海でも無く

もっと大きな肚の内に収まるようでも　何からも
見失われ　それはそれからも見失われ
尽きる事なく置き棄てられるように
小さな石を含んで溶かして呑む夢を
見たがっている　それは
二〇二四年五月十四日

一つ息だけが　息か
と
戯れに嬉しげに数えられるように踏み出されるように
光りの一飛沫のようかに投げ散らかされると
そんな小さな淡い陰が輝きに囚われるように　その
全くの取るに足らなさの嬉しげな逞しさ　ばかりが
いそいそと盛んに生き急ぐしか無いかに　も　その
盛んな盛りを　さも持て余すしか無いかな振りさえ
けれどそれは却って　ほんの僅かなばかりに

盛んな盛りを盛らせている　そう甚くも自らを現し
宥め　笑い　心を塞いで軽やかに
一つ息でさえ無く　かにも
何の重さからも遠ざかり遠ざけられ　遠ざかる程に遠ざけられ損ない
損なわれる程に　損なわれる何も持たないと盛んに明るみに為るなら
為る儘に盛って　盛る程に
静かに　きっと　声に出すなら「
ぁあ　もう　光りしか無いよ　そんな
光りに犯されて　犯される儘な陰のような　そんな
一つ息だけが息に呑まれた小さな石のように　つるりと
けれど　つるりと　もまた　石のように一塊に固まって
一つ息だけが　息が息で居られない向きを向いては向き損なって
向き損なわれる度に小さな限りに吐かれる　そんなそれはもう…
」と　息でも無くに　かとも
それは
二〇二四年五月十五日

薄い刃なら刃が内へ　鋭く内へ回り込み尖るように
知っては居たよ　迷って居たとだけは」な　それは
声なのか　声な筈も無くにも　声なら捩れて裂けて　けれど
直ぐにその傷なら癒え　癒える程に
身ごと小さな塊に縮まり窮まって墜ちるように　ふわふわと
必ず何処へか届けられよう清かさを薫らせるなら薫りも無く
薫りの無さは何処へも疾っくに届いて仕舞って居る証しとも
流れて行く清かさ　それとも清かさの失われて行くばかりに
楽しげに追い立てられ　軽やかにも迷いは辺りに溢れ出そう
かに渡され　貫かれても行きそうに
凍みる身は　消え転げる姿を固めて
硬い玉なら　それから酷く隔たる辺りに拡がる暗がりを吐き
吐いただけ　迷いは迷いに渦を沈め潜め　風に盛られ脹れて
孰れは夜へ　見えない星を探しに潰しに　迷いさえ弾かれて
二〇二四年五月十六日

欲しいのなら　その
欲しいだけのものは　ぴたりと　きっちりと
欲しいだけ湧き出して来るのを眺めて居ると　それは
恐ろしくなって来る　そんな事らを騙って巡るように
蜘蛛の糸のように粘粘と縺れるらしい音を立てるのに
耳を澄まして居ると　そんな事らは何かの仮の姿なら　その
何かとは何かの確かな答えを欲しくて　欲しいのなら
欲しいだけ湧き出して来るのに身を委ねるばかりなら
そんな事らに囚われて居た濡れた心を顧みも出来ずに　その
湧き出して来る様に惑わされ導かれたに違いなくにも
汚く細い足の数など　嫌でもうっかり数えたりすれば
幾ら数えても数え已まない数は数えただけ必ず八つで　その
唯　八つ　八つ　と　ぴたりと　きっちりと
欲しいだけ湧き出して来るのは
二〇二四年五月十七日

顧みようとすると　そうして
顧みられる　ひらひらと舞うような薄っぺらな暗がりが
顧みる身に纏わり付いて来る
のを
晴れやかに喧しかった掛け替えの無いあの日の暮れ方の
暗がりしか見えなくなった目を見開いて
暮れた儘に明け方へ真っ直ぐ抜けて行く
微かな
暗がりからの　何一つ動かしようの無い　にしてももう
何も残って居ないに違いない証しのような煌めきに満ち
顧みられる中に　さらりと確かに甦ろう
何も無い知らせ　その
知らせの中には同じ何も無いと言う知らせ　それとも
唯その知らせを知るには遅過ぎただけなのか　な
薄っすらとした疑いが同じ疑いを薄く包んで
包み已まずに淡く脹れ続ける様を覗き込むしか無いなら
そうして見渡される拡がりこそが顧みられる全てだろう

とも
で無いとも　に
それを言い切ろうとする舌の縺れるように身ごと俯いて　その
顧みられる暗がりなら暗がりを焦がれ待つ
身に纏わり付いて来る
星星が次次に失せては必ず戻って来ないと知れる夜の空か　を
真っ直ぐ狂い無く真上へ
より高く高くへと見上げなければならない　にしろ
そのそうするしかないのは　その夜の高みを囲む
ぼんやりと翳んで煌めく　花の群れ集うような彼らの姿の
顧みる身独りを拒み続ける笑うように冷たい色に
暗がりしか見えなくなった目を向けるように仕向けられる
しか無い
とも
で無いとも　に
思い掛けなくも疾っくに閉ざされた真っ白な小さな傾きに
狭苦しさだけを身に纏うように　墜ちても行くかとも
二〇二四年五月十八日

もう一つ　もう一つ
と迷いを拾って行く
そのどれか一つさえ
見て取れもしないで
酷く久し振りかにも
尽きる事も無かった
それでも一つ切りに　思い知られる
要らないものを悉く　切り落とした
姿
の
昇って行く
昇って行って遂には　終われなくて
終わろう終わろうと　し続けるしか無い
二〇二四年五月十九日

喉が
そっくり喉を墜ちて行く喉越しの甘く
甘い筈も無く　墜ちた喉の奥から薫り出されて行く
石のようで涙のようで唯小さな暗がりの
暗がりな筈も無くに散り果てようにも粘り着くように
甘い筈も無いなら苦い筈の
苦みこそ始めから一つ切りに切り裂かれた
搾られ絞られ嘗ては　きっと
羽根を生やして居ただろうな
赤いのなら
赤いのは血の色にだけ限られる　と
そんな酷く目を悪くしたような　おどおどとした眼差しにもならない
眼差しの
そっくり眼差しの外へまで内へ内へと墜ちて行く
絞り搾る限りに
血の色でだけは無い偽りめいて唯深過ぎるに過ぎない

その　ほんの狭く細い
それを通す管なら管に
名を与えなければ済まないにしろ　名など
そっくり名から墜ちて行こう
二〇二四年五月二十日

舌を灼くのは常に
尽きない甘み　刺すようで
苦く辛く痛い程な
それだけが
舌は溶けて消えようと必ず残るのを
溶けて消えた舌が語るのを
その黙り込むような微かな囁きを
甘みからさえ
どれ程隔たった処に居てさえ　耳を欹て
聞き取れるのでないのなら

空の重さも山の果て無さも
何処にも見て取れずに　唯
山の連なりさえ空へ舞い昇って
この星はすっかりふわりと軽い
小さな獣の空きっ腹の内かに見回される
虚ろな彩りばかりな淡くも脆い
水の中の水　石の中の石　陰の中の陰の
そのどれとも　異なるのならきっと
突き進む程に　程良く舌を擦り抜ける
何処か闇雲な味の無さだけが続く拡がりが
窄んで行くしか無いらしくにも
孰れは其処には
甘さを醸す種にも為ろう小さな
真っ赤な花と咲くのを企むかに　微かにも
風の戦ぎこそ匿われて居そうで
二〇二四年五月二十一日

孰れは行き着く果てと見定めた　その遂に終わる
終わりを身動ぎせずに凝っと見詰めて居られるのなら
終わりは終わりの儘にも終わりようも無く
ぴたりと息を殺し　ふわりとも揺らぐとも
まるでそうでも無さそうに独り　其処に
その終わりには知りようも無い　異なる終わりが
行き成りにでも遣って来るのを待ち焦がれるようにも
そんな終わりこそ　淡く白白と
小石の静かに積み上がるように　知らず辺りを満たし
終わりをすっかり終わらせたか　にも
そんな終わりさえ忘れられれば
そっくり始まりは　淡く白白と　終わりの輝きかな
顧みれば唯暗がりな辺りを食い破り引き千切りして
必ず僅かに古びた懐かしげな姿を晒し拡げるにしろ
終わりの行方の知れない辺りに　もう
すっかりそれらの終わろう徴が
淡く白白としたら下に埋もれる儘に芽吹くのを

見逃しようも無い　その
目なら目は
終わりからも終わりの後の始まりからも逸らされて
終わりの先でも見透かし渡すようで
二〇二四年五月二十二日

積み上げる程に小石はどれも小さくなって積み上がる程に　まるで
小石は数知れず　そうと定められた穴へ墜ちて行くようで
その
小石一つよりも小さな誰かが　そんな自らを見出して仕舞うとして
いや　これらの事はすっかり　そんな誰かの目に映るしかない事で
なら
目は　な目など仮の形とも　形はどれも仮の姿とも予め知られる儘
そっくりそれらを貰い受けたのだけは確かで　にしろその
それらは　その
目の他の

何処にも映りようも無いなら無いで　それで却って
惜しみなく見窄らしく　見窄らしい程に果ても無く
果ても無い程に唯一つ　楽しげに独り
小石の振りを辺りに見せ付けるかにも
愈愈小さくも
はち切れそうに脹れて行く　その様を
目は映しては裂けて千切れて行こうか
それらを其処に残さない為かに
二〇二四年五月二十三日

顧みて唯其処に
時が経ったとしか見えないのなら
つい昨日の事もそれよりずっと前の事も
その濃やかな彩りも肉付きも柔らかな深みも
その奥に隠された虚ろで薄っぺらな僅かな冷たささえも
変わらない　なら

今日にしろ　その今日より遙かに古い明日の昨日にしろ
一連なりで　なら　それらが目の縁を掠めようと
知れた事か　知れない事かで…　いや
それこそが　唯一つ知れ過ぎて仕舞う事かも知れなくも
目に掠め過ぎられた辺りを　口を結び真っ直ぐに抜けて
透けた火か　何が燃えたか
小鳥の眠る姿のようなその燃え滓かを
必ず其処に有ると分かりながらに探しに行く　と
そんなものは疾っくに棄てられ何処にも無いと知れる換わりの
それに似た
二〇二四年五月二十四日

俯いた切りに重い頭は尖りながらに
落ちそうな形（なり）で墜ちもせず
喉の深みの奥の変わらず温かな　それで
汚れもしようけれど温かな

身を底から衝き上げて
身に高みを見せる　にしろ
もう取り返しも付かず　曲がる間も無く折れたのか
折れたところで曲がるしかないか
身は決められた何時ものの
一つも隠せる何も無い辺りを細細と影も薄い速歩で　その
細細と…
とだけは繋がって　目配せも出来よう側を撫でるように
撫でたところで重く粘粘と溜まる汚れは厚みも増そうか
と確かめたかったか顧みるとも無しにくるりと
も　そんなそっちはもう風に溶けた向こうかで　そんな
向こうか　の危うさに撥ね除けられ振り回され　その
向こうの向こうかのぐるりと直ぐ脇にぴたりと冷たく
その待ち草臥れたように　際立ち仄かに艶めく細身の誰かは
ぼやぼやと見過ごしたらしい昼など疾っくに失せたなら
ずっと夜の儘だったかに更に夜が夜に緊く包まれ虚ろに
見知らぬ誰も細細と影も無く突っ立つしか無い姿を晒し　その
夜に就いて尋ねるに違いない　他に為す術も無くに　そんな

一つも隠せる何も無く何処へ逃げようも無い見知らぬ誰か共の
ばらばらに散らばる振りを幾ら装おうと列に並ばされる（何故なら
夜に就いて尋ねるのを何時になっても已められないのでは）　その
向こうで　向こう限りに　その
向こうは　一つも隠せる何も無く（それとも少しもそうでも無くに
くるくる　回るのは
二〇二四年五月二十五日

明明と夜だけが易易と造れたものを
探して居る　夜に…
その
夜に　が酷く災いして
それで　そんなものを探さなくちゃいけなくなってる
とは分かる程に　夜が
目を太く刺し通し　目の奥をざらざらと擦るように目障りで
夜だけが易易と造れたものなんて

疾っくにどれも毀れたか棄てられたか見付けられる筈も無い
と見切れば　それに似た形が
色取り取りに突き立てられて来るのも分かって居る　などと
分かって仕舞うのは　全てを失うのと同じ
なのも　既に分かって居ようなら
そして夜を抜けようも無いのなら　白白と
陽に照り付けられ夜など知らない砂山に引かれた道を行くか
な心は患うように　患う程に
隙の無い夜の独り煌めく一隅を目指す目付きに
焦がれるばかり
な惨めなる望みになど欺かれたくは無いな　と
それより先の無い夜さえも棄て去る身振りに　身を任せれば
裸で居るよりすっかり何も持って居ないかで
そうであるより逃れられないのなら　それで
全てを持ち合わせるのより　身動きも利かず
明明と　夜に…
夜だけが易易と造れたものを　探して居よう
二〇二四年五月二十六日

静かさが透けて浸みて揺るぎなく脹れも縮みもしない閉ざされた
拡がりを
時を戻すように
まだ何にも触れられて居ない　その内だけを覗き込んで居たのを
思い返して見ると　それは
拡がりでさえ無く　何も無く　それが今其処に
見て取れる悉くは　それを見ているのが私なら　その
私が　其処へ送り込んだものと分かるにしても　その
私は　疾っくに圧し潰されたかで唯　その驚きが語られるばかり
にしても　その儘ではまるで肉の陰のようで
声は許されないのなら　其処には声に換わる
身の穢れだけが肉の塊の脹れるように溢れそうでも
愈愈静かさばかりが増して仕舞うのは　その
私なら私が私の心を棄てられないからなのは明らかで
な事に囚われて静かさに閉ざされ

閉ざされる儘に静かさの向こうに開かれている中に
心に粘粘と塗れるしか出来ない身が　切り込まれ差し込まれると
まるで　その
心とも身とも少しも係わらない
何処か遠くから送り込まれた除かれない苦しみが堆く渦を巻いて
迫り上がるらしい
にしては
静かさばかりは更に酷く静かさを苛むように静かさを研ぎ澄まし
窮めるしか無い　その中に独りの
心も身も自らの内に閉ざし切った
子供を連れて来たような
子供を連れ去ったような
姿に象られた　もう重みも形も無い　な
見知らぬ誰かを
私は
私とは知れない　のなら
それをそう知れて仕舞う私こそ　紛う事無く私では無かろうにも
私は　その姿に　何を為たいのか

じりじりと近付いて行くばかりに

二〇二四年五月二十七日

せめて澄み渡ろうと焦がれるように
透けた色に心は翳んで
迷いは僅かにも許されず　そうして
何処までも切り拓かれて行く身の痛みを　直ぐ側に居ようと
仲間の誰かに分け与えようも無く　何時までも
目の前の悉くが　その儘に切り刻まれて行く他に無いのなら
そうしてそんな事を深く考え続けようとするしか無いのなら
そんな身を更に苛んで已まないのは　そんな自らの有様を
夢の中に閉ざされた夢が夢を追い続けて已まないように
考えて続けて仕舞う事の他に無いのは明らかで　にしろ
そう思い至ったところで　それを
そう思い計る事は出来ず　その
その思いの足らなさを

兎も角も考え続けようとする浅はかさに塗れさせて　それで
それを埋め合わせられるとでも思って仕舞うのか　それとも
考える　などが抑も浅はかで
思い　は必ず思い足らなさで　そんな
それに苛まれて居るだけの事だとしたら　けれどそれを
強いられるしか無く抜け出しようも無いのも明らかでは　その
明らかさ　に
透けた色に翳む心などを添わせ　溶け込ませようとでもして
それとも　せめてそんな振りでも出来ないか
そんな隙などを　何処かに探り取れないかと
せめて澄み渡ろうと焦がれるように
夢の中に閉ざされた夢が夢を追い続けて已まないように
考えて続けて仕舞う事の他に無いのは明らかで　そうして
透けた色に翳んで行くそれを　心と名指したいのなら　それは
心で構わないけれど名指されただけで　身の痛みには唯
余りに浅はかでは　思い足らなさだけな思いでしか無く
二〇二四年五月二十八日

滅びは滅びない　滅びるのは
滅びから独り墜ちて行く姿を
見なければならない心だけで　にしろ
幾ら目を凝らし耳を澄ませても　その
心の在処は突き止められない　のなら
何が滅びの何を知り得ようか　そして
滅びは滅びない　と言い切ればそれで
何も付け加える事　も無かろう　けれど
滅びない滅びには　滅びないも滅びも無いのも明らかで　その
明らか　に閉ざされる自らを見出すのが　先ずは心で
しかし直ぐに
心でも無くに　なので
そんな心だけが滅びて行く心が
その心を怖れなければならない
心が心で有る限りの心を保つ為に…
滅びた後のようにも酷くあやふやにも

そんな事が
心など知れず
突き刺さって行くばかり　な
その先へと　滅びを掴み取ろうとして（
それは必ず掴み取れなければならない　その
必ず　の危うさこそ　予め滅びで無くて何か
二〇二四年五月二十九日

一つのそれと違う何かが予め失われて居ようと
失われたのは　それとは他の何かでは無いからには
逃れようも無い
にしろ　抑も何から逃れなければならないのか
そんな何かこそ　予め失われて居るのを
はっきり分かって仕舞うしか無いのなら
手近な何でも構わない見慣れ触り慣れた何かを
一つのそれさえ失われた辺りにでも持ち込んで

それとも　その持ち込むのからして態とのように
あやふやで　それとも
そんなあやふやさこそが望まれ　そんな
あやふやさ一つが　一つのそれだったのか
などとも顧みるしか無いのなら
疾っくに送り届けられて居たらしいのは　それとも今
やっと送り届けたのか（誰が？　な
またも　あやふやさに連れ去られそうになりながら
にも）それ切り　その先に何も無いようなら
何処へ戻る処も無い
な処　それ一つを足掛かりにも出来よう
かな望みを堅く目の奥に閉ざす振りで
な様で居るしか無いのに赦しを乞わなければならない
な
赦しこそ見慣れ触り慣れ　慣れ過ぎ何の形も失う儘に
それ一つとして送り届けられて来るのを　それとも
それとそっくりでもそれとは違う何かが予め失われる
その先を見越すように　そう見越されるしかない何かが

それとは違う何かを装って　傾れ込んで来たいようなら
二〇二四年五月三十日

うっかり時を数えたりして
うっかりと木を数え損なう
かに
数え切れない時のずっと先に
姿を現す
立ち枯れた儘な木の陰のような　で酷く艶めかしい
細身な姿を探して仕舞う　その
誰とも知れないばかりに
聞き慣れ過ぎて溶けて腐ったような
甲高い声ばかりが鳴り響く　のなら
ここは　耳の中でしか無く　そんな
ここで　耳の空っぽな重みにすっかり縮み切って
細い限りに細い手足を生白さも楽しみに生やそうと

辺りの僅かな温かみを取り入れようと　きっと
うっかり時を数え損なうかなせいで
離れて行く　声か　耳か
声の中の耳か　耳の中の声か　と
そのどれでも無いなら　その外の　それとも
その外が陰のようにも切り開かれて行く様を
その空っぽな重みを呑み込むようにも　その
数えられる時よりも速く折れ曲がって已まない
その脹れるか縮むか厚く窒がって
時を抱き込んで消えるしか無いらしい外　その
外の振りをするだけの一つ限りな偏り（
一つ限りで　どう遣って偏れるだろう）
の内へ
数え損なわれたのが何なのかを尋ねる姿を
嵌め込むように映そうとする
二〇二四年五月三十一日

六月

掠め見る　と
思うは
同じ一つ…
同じ一つの時を切り分けられないように　けれど
同じ一つとは何だろう　もし始めから
同じ一つなら
同じ一つも何も無い筈で　とすると
掠め見ると　思うは
同じ一つな程には何かが違うらしい　それとも
掠め見ると　思うの間を
同じ一つの時が　深深とも打ち込まれて居ようか
なぜ　そう思えるか　なら
そう　掠め見られるしか無いからで

の

何が掠め見られたのか　を掠め見る　その
掠め見られた何かも掠め見られてだけ掠め見られ
それが続いて已まないなら　思う　は
押し退けられ　何時か消え去って　その
消え去る内に　窒がれ綴じ籠められよう　その
酷く見難そうな
綴じ目こそ　思う　と同じ一つの
掠め見られる　として
掠め見られるしか無いのなら　その
酷く見難い上にも見難い間に
時など打ち込まれる筈も無く　その
除き弾かれた時の上っ面にでも乗せられて
掠め見る　と
思う　は
それぞれの同じ一つを探し回って　それで
綴じ目を失って散らばるばかりな
時とは違う　違いながらにきっと

同じ一つの　ばらばらに散らばってだけ時のような
そんな
二〇二四年六月一日

虫の羽音かと微かにも遠くに塞がれた声に引き倒されるのは
何の事かと思い起こさなければならない
その声を聞いた時に誰が何処を向いていたか
を
すんでのところで取り逃がすところだった
ような　けれど唯
ような　なだけで
その時と今とが溶け合う筈も無く溶け合う儘に裏返って　その
裏返りだけでゆっくり開いて裏返る穴に身は攫われ　にしろ
耳にした憶えも無い虫の羽音を何処か遠くに鳴らそうと
耳の奥を震わせても　耳の中は静まり返って居る　その
静かさと戯れて　唯

突っ立って居る訳にも行かないなら歩き出して直ぐ
その声と係わりの無い影の　それでも
その声を呑み込んだに違いないと思える　その
それ自らの影に消え入りそうな佇まいに引き倒されるのは
あの声は誰に向けられ誰が受け取ったのか　いや
そんな事では無く　声は唯声なだけで
裏返ろうにも声に裏は無いか何処もが裏で裏返りようも無くに
要らなくなるまで使い古されたばかりに
色も形も殺がれて　まるで真新しく（でも
どんな声も皆そんなようかな）それで却って真新しさごと
攫われた身に刺さって来る　そうして
身ごと裏返りたくても声に貫かれたのでは身ごと
虫の羽音かと微かにも遠くに塞がれて行く身の　それでも
声を探そうとする
姿に
攫われて行きながら　必ず
その声を呑んだに違いない
真新しい誰かの影　それとも真新し過ぎて影も無い

かに掠め見られる　のは
二〇二四年六月二日

…に運ばれ　なら
…は風の譬えで）
風に運ばれ　その風はもう絶えた後の
行き過ぎる誰もが身を躱して　磨かれるように
狭さも広さも消され　すっかり丸く閉じた処で
身は開かれ　開かれる程に開かれる内に溶けて
行き成り
それとも　その
行き成り　から始まったのなら風など作り事で
けれど絶えた風など　今更知れない譬え
の何が譬えかを見回す程に何の事も絶えて
行き成り　だけが
酷く激しく重く透ける風の大きな一塊になって

開かれた身を　開かれた儘に更に暴き立てよう　その
内に溶けて溶ける程に固まり剥き出され
貫かれた風の譬えの　骸のように頽れ
独り自ずと散らばるかな　そうして
開かれる程に開かれる内に溶けた身も頽れ砕かれ
で
行き成り
が　一つの声に撃たれたのを
そのせいで砕けた身ごと　思い至る
と　その
思い至る
は　身には知れない譬えとも知れようの無いのなら
知れない違う誰かと誰かの事で有るしか無くに
譬えの風の絶えた譬えも絶えたのなら　それら悉くの
外へでも向き果てよう身の（な身が　に
外へでも向き果てよう…の　譬えなのから逃れられず
二〇二四年六月三日

割れ目無しに狂い無く割れる　その
片割れ　なら
新しい程に古過ぎて現れるしか無い　その
堅い兆しから　既に
繕いようも無く割れて居たろう　に
もう片割れが何処へ預けられて居たか（それとも
自らを何処へ預けようとして居たか）に就いての
微かな兆しも　古過ぎたにしろその痕も無く　に
現れて仕舞うのなら
割れ目無しに狂い無く割れる　その
片割れも　もう片割れも
何の兆しも兆さない兆しの溶けて混じり合う眺めの
狭い限りの透ける限りに見渡せる
拡がる程に狭過ぎて失せるしか無い　その
失せる中に
片時も失せた事など無くに　甦ろう

狂い無く割れて
それぞれの欠けた身の影に自らを呑まれた　その
姿を晒す振りをして蹲るか
蹲る姿を晒す振りで
呑んだ自らなど疾っくに厭い吐き出しては　ぁあ
割れ目無しに狂い無く割れるって　唯そんな事で
それ切り片割れも　もう片割れも現れようも無く
吐き出された儘に溶け合い穢し合い汚れ合っては
きっと同じ処をそれぞれに分け合って分け合おう
儘にか　儘になら流されようも無く流され戻るを
速過ぎて止まるより酷くゆっくりと　奪い合おう…
息を　で無いなら
息の出来ない一つ身を
二〇二四年六月四日

色形の奥から溢れ滴る喜び

の　暗く燻んだかとも見損なわれて失われた
にしろ何の事も無く過ぎて行く　もっと暗く
に眺め渡される中を　容易く抜けるようにも
きっと搦め捕られ　囚われ放たれ
に放たれる儘な姿に纏わり添う影のようにも
それは　にしろ
それを　その現れごと忽ち攫って消し去って

却って

消し去られた痕の　その痛みさえ失せる程に
現れよりも甚く際立ち　堅く固まり窮まって
きっとすっかりそれで無くなった儘にも全く
それは　それで
にしろ　それはそれがそんなそれで有る事を
知る筈も無くに
色形の奥から溢れ滴る喜びに溺れ切って
驕り輝いて愈愈喜びに深く塗れるばかり　に
外の目を撥ね除ける円みを丸丸と閉ざし切り
それにそうして閉ざされた全てを滅ぼそうか
にも

何一つそれで滅んだりせず塵一つ揺らがない
そう果てなく透けて見晴るかされるしか無い
その　先の無さを
消え去る事は許されないなら　どのようにか
逃れ抜けなければならない筈で…
先の無さに先が開かれるのを一つ切りの望みと縋るかにも
二〇二四年六月五日

眠ったりしない
眠りなど知らない
暗がりなら知っている
形の定まらないものらが蠢くとも溶けるともし　その
蠢きの陰に潜り込み硬く小さく丸まって細かく震えて
光りに背を向けて　凝っと動かないならそれが眠りか
形の定まらないものらは　そんな眠りを確かめようと
ずっと暗がりを騒がせるとも静まらせるともして居よう　な

暗がりなど何処に有ろう　有りもしないからこそ
どうにでも　贋の暗がりに就いて嘘を塗り重ねられる
にしろ　贋だ嘘だと指差される程に
贋は確かに有るし　嘘も必ず有り続けよう（だらしなく
惨めにも　きっと唯そんな贋や嘘に随うのが暗がりで）
けれど
な事を全て削ぎ墜とし　その痕まで消し去る
光り　その
光りを呼び入れた　重く短い　眩しく強い
声
で無いなら
声を装う光りの似姿　そうだ
声など聞こえる筈は無い（声は暗がりをなぞるだけの
なぞる程に暗がりを甚振り弄ぶだけの　そうして
暗がりを暗がりな儘にして置く為に備えられた
暗がりの尻尾にも準えられよう醜く尖った泡か何か
か…）　にも
な事を全て削ぎ墜とし　その痕まで消し去る

声は　動かしようもなく
声の儘に
唯一つ切りの事を除いて
真っ新な光りっ切りな辺りへと
毀し尽くし　影まで消し去る　その
一つ切りなら　それは
それを自ら閉ざし切り独り自らを自らへと殺ぎ果てない
眠りを知らない　眠りの影の欠片までをも剥ぎ取られた
夢の形　かに…　な
夢の形など象られよう筈も無い　からこそ
贋の夢の形なら　見て取ろうとも出来よう　けれど
何処から？
それを除けば何処も彼処も真っ新な光りっ切りでは
何処の何処など何処にも無い　それを
贋も真も蹴散らし　一つの夢とでも見ない限り
唯　その
声
の他は　潰れ果て崩れ尽きるしか無いようでは

二〇二四年六月六日

その
繁く訪れては　近い向きへとだけ遠ざかる姿の
未だに小さな　固まって育つ筈も無さそうに　他に居処も無さそうに
女の側に居ながら　誰の児でも無い顔付きの
そんなそれを見て居る私が独りなら　それは
私の児に違いない
と　心にも無い思いを思うように　誘われる私に就いては
私にも他の誰かにさえも　こっそりとも知られないのなら
これらを全て砂に変えて　済んだ事の中に墜とし込もうと
その
姿を囲う透けた穴を穿つか　けれど
な穴に　砂を呑み込ませるのは凡そ難しい　寧ろ
な穴は　見えない砂を吐き続けて已まないようで
砂の譬えが溶けて消えても

児と児を囲う穴を包み込む
それは　透けた儘に愈愈透けて尚も透ける程に
児の姿を凝っと見詰めさせよう　かにも
目が私に有るのなら　児の姿は疾っくに
目に映り込むものを隈無く掠め逸らそうとする目に拠って
透ける儘に独り浮かんで動くような動きを止めたような穴
の内に独り閉ざされ
児でも姿でも無くなり　それを
済んだ事の中に墜とし込もうと企む思いだけが
心にも無く私を誘い
きっと私はそうして私の済んだ事の全てを溶かして無くす
二〇二四年六月七日　誘（いざな）

時を数えようとする　誤り
それとも唯逃げているだけ…
数えられようも無い時から

それとも時と呼び慣わされる何の事も無いだろうに
目の前に現れて仕舞う事らのどうにもならなさを
時のせいにする為に
ならそうして　時を数えるまでも無く
始めから　そのどうにもならなさから
身を躱して居るこの身に違いない　な
身と向き合わされて仕舞って居るだけの事
にしろ
な身の　剥き出しの姿をここに見出してみたところで
な身は　少しも歳を取らないし若返りもしない
いや　目を凝らせ
お前はもう丸っきり若返ってるぞ　違うか
と　その身に向かってだけ
そっと　脅すように（必ず脅すので無ければならずに）呟いてみる
と
な脅しをずっと待ち焦がれて居たかに　身は活き活きと動き出そう
かとも　行き着く処まで若返った身は　それはそれで
然して喜びも見出せずに

歳を重ねるのよりも余程血の引いたような疲れ切った形（なり）で
誤りと分かっても数えようとされて仕舞う時からさえ
見失われて行く
な身に
時など要らないのはまるで確かにしろ　に
要らないからこそ時は薄汚れて粘粘と厚ぼったく纏わり付いて来る
但し
な時が幾らこの身を圧し歪めようと　ほんのその時を限りに…
時の誤りを　時自らが剥き出しにしたいかに
二〇二四年六月八日

色は無くても　始めから色の痕を際立たせるかに
何処までも真っ赤に続く太い幻でも隠して居よう
まるで溢れそうにも透き通る赤一色を内に隠らせて静まり返る
其処へは
其処をそう独り見て取ってだけは目は入って行けない

替わりに
目よりずっと目に親しくて目を拒んで已まない姿な
もう目には誰とも知れない誰かと誰か（
にしろ親しさは増しも減りもしない）の
唯其処へしか帰り着けない其処へ身を投げ墜とした様を
巡って　いや　な様こそが目を
巡り閉ざして　私を私の親しさから殺ぎ剥がし
誰を誰でも無くして行くのなら　そうしてその
どれもが　それ自らな姿に収まり切って
それに収まらなかった全てを捩切っては
けれど
何事も無かったのを驕るしか無い乏しさで　きっとその
乏しさが　始めから色の無かった色の痕を際立たせたろう
小さな（小ささの
流れに強かに漂い揺らぐしなやかさなどは見掛けに過ぎず
小ささが常に限りなく弱さに近付いてだけ　それは小さい）
透き通る赤を拒んで何の色でも無い一色に囲まれ
その一色を呑んで身を透き通る儘にその一色に染めて

捩切った全てから身を守り匿って　愈愈小さく静かに
その弱さでしか無さに溶けて消えても行きながら
独り
な何が独りなのかも知れない儘に
それは　鋭く透ける声を響かせ若若しい足取りで
身に染められた一色が殺ぎ剥がした全ての彩りを　呼び起こし
掻き回し混ざり合わせる身振りに打ち震えている
二〇二四年六月九日

取り替えが利くのなら無いも同じにしろ
取り替えられるまでは無いも同じにしろ
有り続けるのはどうにも為らず　その儘
有り続けるのを已められない　と
決まって居る訳でもなかろう　なら
無いも同じ　の　その
同じ　無い　に身を預けて　それで

居処を何処に定められよう　それで
消えて無くなれては居ないのなら…
唯
取り替えが利くのなら無いも同じと同じ処に戻るだけか
その儘　そうして
無いに身を預けた身は　有り続けるのを已められない
けれど　その
身は　無いに身を預けて　その
無いが何処か知れない儘に凝っと動けずにさえ
息をするのも儘ならずに藻掻いても居よう　いや
有り続けるのなら　息など何処でも出来る筈
水の中なら鰓を生やせば済むように
無いの中で息をする為の　水なら鰓のそれと同じものは
少しも息苦しくも無いのなら　疾っくに生えて居ようか　けれど
な儘にも　藻掻くのよりも　息が止まって喉を引っ掻くのよりも
もっと取り返しの付かない事が起こって居ないか　例えば
水の中で何も起こらないのが水に成って仕舞ったから　のように
無い　の中で何も起こらないのなら　身ごと

無い　に成って仕舞ったようで　その成って仕舞った
無い　こそ全く　他の
無い　と取り替えが利くようで　けれどそうして
取り替えが利けば利く程に　それは何処かでその儘に
取り替えが利かない唯一つの
無い　身を　嫌でも自ら見出して仕舞うに違いない
消えて無くなれては居ないのなら…
二〇二四年六月十日

剥き出されて居る
のが　分かるのは
目が　何かが剥き出されて居るのを見付けるからで
にしろ
始めに剥き出されて居るのは何だろう　いや　その前に
始めに剥き出されたその　剥き出された　とは何だろう
と

何かが剥き出されて居るのを見付けた目が
目だけで探り当てようと出来るのが　その
剥き出されている目　でしか無かったとしたら
剥き出された
とは
目の向かう先に　目だけが見出される事なのか
とも
にしろ　それで
目は目の儘に居られようか　唯
剥き出されて居る
に因って　擦り潰され
その痕に剥き出されて居る　だけが
剥き出される　それを
見付けられるのが目しか無いなら　その
目は何処から遣って来られようか　と唯
剥き出される　しか無い中で息を潜めるのは
何かが剥き出されて居るのを見付ける目とは異なる
目が届かない処で

剥き出される　が　剥き出されて居る
のを
剥き出すそれ　が
みるみる穢れて行くのを　見なければならない
にしろ　それでも独り必ず
剥き出されては居ない為に…　で
な
独りとは異なる
剥き出しなそれが
先ずは穢れて行くかを　必ず見なければならないのなら
目とも異なりようの無いその為の目は
目が目を目の内に　刺し貫く目で
剥き出しなそれも
それがそれをそれの内に刺し貫いて
剥き出しが剥き出しを剥き出しの外へ刺し貫いて
剥き出しは独り抛り棄てられ穢れを拭う儘に　な
剥き出しを見出す目を見付けるしか無くなろうか
二〇二四年六月十一日

重さの失せるのは広さは穢れ
だからで　その
脹れ接がれる拡がりに
捩込まれるしか無い身の
硬く小さく躍り極まる儘に動きを奪われる　な
身にだけ相応しかろうと　予め設えられて居た
かな　もう一つの（けれどそれが
何とのもう一つなのか知れないのなら）
何処にでも在り来たりに転がって見飽きても居よう
にも一つ限りの
輝くようにも影を厚く塗り重ねたなら影の塊かとも
それに出来る事なら何でも途切れなく易易と熟して
上っ面の影の姿の奥はすっかり眠り扱けて居るかで
なので　それもまた
穢れ

穢れる儘を広さで埋め合わせるしか無く定められた　な
それと向き合わなければならないなら
酷く疲れ　歳を取り　足は曲がり　腕は痛み　その
引き摺る足でまた
穢れの脹れ接がれる　違う拡がりへと赴くしか無い　と
思えば其処はもう　そんな其処で
その拡がりの弛い傾きに浮くようにも足が滑らないなら
この身の内に　この身を燃やして動かす重さ故の穢れが
備わって居なければならなくて　けれどそれを
この身の内に　では無く
足を引き摺らせる拡がりの遠くの隅に見付けるしか無い
有り有りとも暗い眺めこそ
穢れ
の
見て取れる限りの　果ての様には違いないけれど
二〇二四年六月十二日

飛び込むとしたら　下には必ず底知れず
深い水が湛えられて居なければならないのに
水で無い処に飛び込めたりするのは　それは
この世の裂け目の奥のこの世の外に
自らを抛り棄てられるような事だろうに
にもそうして　またそんな処からも
生きて戻って来たりを繰り返す内に
水の代わりになる　きっと
何でも構わない何かが　自ずと
飛び込んだ身に纏わり付くようにでもなるらしく
例えばそれが酷く色取り取りで　どれも尖ってその
尖る様が更に酷く入り組んでも
つるりと平たくもばらばらに並べられて居るような
それらがびっしり溢れる中に
身動ぎも為らず藻掻くしか無いか　それとも
水を得た魚かに泳ぎ回れたにしろ　その身は
既に自らに抛り棄てられたに変わりはなくて

にも
な身に　ぴたりと嵌まる壺のようなものを
予め頼んで置いたかにもう探し当てて居て
然も確かにすんなり入り込んで行けそうな
滑らかそうな襞を覗かせる穴も撫で廻せる
のに　それは
どうやら壺のようでさえ無くて　どうやら
一つでも無く　幾つも重なり合って居ては
色取り取りの薄い紙の束のような手触りで　けれど
うっかり抱えたりすれば酷く重くて背負うしか無く
背負えば直ぐに水のように流れて消えて行きそうで
なら　周りは何処もが　水で無くにも水か
とも　ばらばらに裏返された壺に溢れる渦に巻かれ
二〇二四年六月十三日

割れたように潰れたように破れたように　も

少しも割れても潰れても破れても無くて　なら
裏返されたに違いない　その裏返された
様を見付けられそうな向きを探そうにも　抑も
それが何かがはっきりしなくて　にしろ　それは
重く酷く入り組んで重なり合って居るか
なそれを　すっかり包んで脹れたそれか　どちらかで
けれど
なそれが　それごと溶けて消えそうでは　覚束ない
にしろ
なそれと係われてしかここにこうしては居られない
のも確かで
な確かな程に　その確かさの外に出なければならない
な為の向きを探せば直に自ずと向きは限られ定まって
裏返されたに違いない悉くを振り捨て独り剥き出され
噎せ返るような幼い匂いを放ち
そのずっと幼い儘に割れも潰れも破れもしないで佇む
そのせいで悉くは裏返り続けなければ居られないかな
姿　ぁあ

姿と言うなら　それだけが姿と名指されよう　それに
引き寄せられるしか無い身の酷く惨めな確かさ…
な確かさだけが　その向き合う姿に添うように
裏返らないのは　何故なのか
二〇二四年六月十四日

その目しか無い目を間近に覗き込むしか無い狭さに擦り寄って
ふと波に揉まれ渦に巻かれ歪んでも海や川の驕りを嘲笑うかに
それに籠められたそれ限りな匂いを易易と守り切る一雫に
それと遥か隔たる目を真っ直ぐに届かせたのを思い起こし
それは何時の事か　どれ程遠い昔でも狂い無く計り知られよう
な狂い無さを間近に覗き込んだ目に光りそっくりに注ぎ込むと
その光りの波に揉まれ渦に巻かれ歪む覗き込む目も　その
覗き込んだ目の内深くに墜ちながら尖って注ぎ込まれるようで
けれどそれはあの何時かの事にそうさせられて居るだけの事で
ならばこんな事らは丸ごと揉み消せそうにも海や川の驕りかに

嘲笑われる　その
嘲笑うのは　誰か
それは狂い無く計り知られようか　に
計り知られる事などは始めから全て狂って居るしか無さそうで
に狂う程に
それ限りな匂いを籠める一雫は
海の広さにも川の速さにも少しも薄められずに
何時かの何時の事なども滑るように越えて行く
にしろ誰かは誰かは誰かの儘に
二〇二四年六月十五日

確かめようとして　その
確かめられるのを　そう
確かめられたなら
それは知れた事になる　の
それとはそれだけの事　で

けれどその知れた事は　それからは知ろうとして知れた事として
そう嫌でも罷り通るにしろ
知れた事など知れただけで何の使い途も無い知れた事で　それが
知れた事を頑なにさせ　その
知れた事はそれが何処から来たかを揉み消そうと驕るように
ぐるりと周りを見回し　その知れた事の他に何も無いのを
確かめようとして　その
確かめられるのを　そう
確かめられたなら　その
弱みを見事に隠し果せた事になって全てをその
知れた事から始めようとする
それを嗤うにしても嗤うべき
知れた事が知れるだけで
二〇二四年六月十六日

始めなければならないのか終わりにしなければならないのか

そう問うのが始まりなら終わりだろうし
そう問うのが終わりなら始まるしか無く　な
そちらへと引き寄せられ　引き寄せられるなら拒まれもして
顧みれば終わりしか無い　その
終わりから顧み直して果たして
始まりを見付けられようか　な
小さく微かな程に確かな恐れそれとも恐れの始まり　を
始めなければならないのか終わりにしなければならないのか
などと言う問いは何処かへ紛れて擦れて翳んで暈けて失せて
失せる儘にも　小さく微かな恐れの内に更に小さく微かに
目を出し
その目を見出す目が目に見出される
などと言う事なのか　どうなのか
な問いは　あやふやにされなければならずにその
あやふやが幅を利かす先に隠されて居よう　な
あやふやを吹き消してあやふやでさえ無いあやふや
などと言ってみても何の譬えにもならない　そんな
きっと始まりも終わりも触れられない一つの

知れない儘に近付いて行こうとだけは出来る
ほんの在り来たりな　例えば唯する事も無く
ひ弱な体を晒して佇んで居るだけの淡く薄い限りの人影の
脇をそっと擦り抜けて行くような身振りに凭り掛かるしか無い
な終わりから始めるしか無いのなら　何も無い筈の身を
奮い立たされて仕舞うしか無いのは　何の始まりかとも凝らされる
目を出し
二〇二四年六月十七日

心に懸かる　その
赴く儘を　心に象ろうとして来た
けれど　それだけでは心許なくて
目に見えるだけでは足らない
確かに手に取れて　その手触りを全て覚え込んで
それでもまるで足らないのなら
触れられるより向こうに有って

そっくり心に象られなければ済まない　そんな
形ならら形　薫りならら薫り　で無いならら　そんな
で無い何かそっくりに身を容れようとして来た　のか
果たしてどうか　な事なら
それを証せる何ものも　手に取れても見えてさえ居ない
ならせめてそれを探り取ろうとは出来て居ようか　とも
な身が切り分けられて新しく開かれて来る眺めの
何処にも身を押し嵌めようも無くに薄くて平たい
心に懸かる何の彩りも失せた様に呑み込まれるしか無い
の
呑み込まれたのは何か　と
振り返るそれが呑み込まれた他には無いとは知れるなら
その知れた先を塞ぐ唯一つの艶めき傾ぐ妖しい
姿より大きい姿を打ち毀すしか無かろうけれど
心は疾っくに何処かへ棄てられ汚れに塗れて居るようで（
なのでもう　何が心に懸かるも無い）
けれど身は　その汚れにぴたりと容れられるのでないか
な身こそを　心に象ろうとして来たのではないか　な

形なら形　薫りなら薫りの　見晴かせよう向きに拡がる
眺めの見窄らしさにこそ相応しいのは何か　と
振り返ろうにも　その向きを打ち毀せでもしない限りは
快くも身は　心の後でも追うかに
棄てられ汚れに塗れるしか無いようで
二〇二四年六月十八日

果てなく駆け昇る若さ
は血の匂い　血の
色が濁り形が崩れても血の匂い
は胸の底に襲い掛かって　更に
腹の底に沈んで重しになって埋まっている硬い塊を吐かせる
な転がる塊に血の色も形も匂いの匂いも無いのなら　それは
直ぐに干涸らび　微かな風にふわふわと透けて砕け
そうして遥か先を駆け昇り果てない若さを追いたい
けれどそれは惨めにも唯そんな構えだけで　それを

溶かし込んだせいで濁り暗むばかりな風は転げ脹れ　却って
血の匂いから遠ざかるしか無いのを強いられるなら
手近な処に若さの血の匂いを溢れ出す儘に満たして
はち切れそうな肉の塊を呼び込むしか無かろうかに
に　何が出来よう
今や血の匂いの痕のような胸の底を掻き毟るかして
血を滲ませようにも干涸らびた風に風より干涸らび
きっと腹の底に呑まれその呑んだ腹の底も干涸らび　いや
そうなるのは予め知られて居たさと痛くも心付いて　そうして
果てなく駆け昇る若さ
は血の匂い　と確かに
知られ直すのも知られて居たろうな　と唯予め
知られて知れる向きへ　流れて行くようで
血の匂いのように若く…
が直ぐに偽りと曝かれるならせめて
血の匂いの振りをする構えに縋って
二〇二四年六月十九日

何処にでも入り込み
光りは必ず禍禍しい災いでしか無い
なら闇も変わず
光りの禍禍しさに闇を立ち向かわせようと何も起きないし　却って
光りと闇が互いを補うかにも災いを齎し
な災いの満ち溢れるのを見せられるだけ
にしろ抑も　光りと闇は同じ一つの事で　始めから
そうと知れて居るなら唯それだけの事で
光りと闇が描き出す色形　その厚み鋭さ粗さが入り乱れる
かな眺めは全て偽りと見做し　そんな処は
見るからにすっかり真っ平らかに通り過ぎられ　けれど
そうして通り過ぎたのは誰か？　それはその
誰かが自らを顧みてしか知れないのなら紛う事無く　その
身は　光りと闇とで象られるしか無い様を晒そう　その
禍禍しい災いと向き合わなければならない…
誰か？

とは　その自らの禍禍しい災いと向き合ってだけ
その誰かに向かって姿を現す誰か　の他に無い　その
誰かに誰かは
な自らを見出して仕舞う他に出来る事も無くて（
うっかり他の何かをして仕舞えば
それはもう誰かとは他の誰かだろう）
にしろ　その
誰かは必ず何かを遣らずには居られない…　きっと
自らを身ごと禍禍しい災いに投げ棄てて
惨めにも活き活きと引き裂かれる様でも
光りと闇とで象らなければ済まないかに（
ならそれは他の事では無く自らに還ろうとするような事で
にしろ　な事こそ
光りと闇の偽りが曝かれ除かれてさえ　それともそうして
光りと闇の眺めが失せてこそ
禍禍しい災いの基で有り続けるに違いなく　に
二〇二四年六月二十日

痩せた骨の透けて映える身か　それとも
痩せた骨を透かすのは　なこの身に濡れて隣り合う
身でも無さそうに暈けた淡い影のように脹れる身に
目を凝らそうとして凝らし損なうばかりに　その
滑っては　痩せた骨に絡み付いてやっと
柔らかげな肉の重さに縛られて眠り扱けるようにも
流れ墜とされずに済んでいるような　その
揺らめきだけを恃んで　もう溶けた消えたかも知れない
痩せた骨の透けて映える身に
纏わり付くそれとも　纏わり付く動きから距たろうと
そっと濁って沈もうとする
目の向いて行ったらしくに湿っぽい
痕なら痕は　それでも
滑るのを已めないなら痕でも無くに
散らされ輝いて直ぐに輝き失せる儘に
それごと引き剥がされようとして已む　な

闇に微睡み遊んで闇を搦め捕ろうと　それとも
闇に搦め捕られようと頑なにも微睡もうとする　で
痕かにも痕の痕さえ失せるようなら
痩せた骨の骨組みを透かし映えさせるしか無かろう
にも唯
濁って濁りを尖らせ蠢かせる脹れる影のような身に
妨げられる儘に　目なら目は
その向きだけは確かに狙い定め
二〇二四年六月二十一日

此処では無い　と知れて此処を
抜けて行くのに速さにだけ身を委ねるのは　それが
誤りと分かって居ながらに　その
速さばかりを身に付けたような身の姿に身を預けて仕舞うのは
賭けとしては惚れ惚れする程見事にしろ　負けは見えて居よう
な　見える儘な負けに溢れる

此処なので　此処では無い
とも分かるなら　うっかりその賭けを棄て
賭けを欠いても此処　な此処に身を擲ったりすれば　その
身は直ぐにも砕けて果てるしか無かろう
とも見えて居るにしろ
負ける賭けに身を傾ける愚かさを分かりながらにも　そう
身を擦り込ませるように愚かさに身を委ねて仕舞うのは一重に
身は速さにぴたりと添えるのではないか　な
望みに引き摺られるから　と分かるまでに瞬く間も要らなかった
とも直ぐに分かるしか無くに　やはり残るのが速さしか無く
それに賭ける身の愚かさを論うのは愚かさに輪を掛けるようで…
いや
此処では無い　と知れるも知れないも　その
愚かさだけが有って更に有り続ける為に
速さが呼び招かれる
その限りにしか　此処には居られないだけの事か
二〇二四年六月二十二日　論（あげつら）う

光りも闇も禍禍しい穢れと振り払えば
次次に途切れずに現れて来る　なので
必ず独りな　一つ限りに変わらない　姿
を　それとも
に　それとも
は　それとも　　の
どれも当て嵌まらなくも　それとも
なのでこそ
な　姿との係わりは断ちようも無くに
それは　極間近にもそれとの酷く冷たい距たりを挟みながらにも
纏わり付いて来るのなら
を　も　に　も　は　も
な纏わり付きと酷く冷たい距たりとに呑まれ
溶けて消されるらしい　のならそれを
受け容れる他に無くに　も
受け容れたそれの姿は　酷く冷たい距たりより耐え難く厭わしく

で何処へ逃げ込めよう　まさか
光と闇とで象られた穢れを振り払った神の似姿とか（
それを遥か昔に見た覚えを再び引っ張り出すとか）けれどもう
光りと闇を穢れと知れて居ては時を巻き戻せないのは明らかで
なら　先を急ぐしか無い先に
必ず独りな　一つ限りに変わらない姿
とは異なる
その姿の内に僅かにも匿われて居よう光りと闇の穢れの残り滓が
全て搾り出され吐き出されたその先へと急ごう
速さ限り　を掴み取ろうと身を擲つしか無いか　な
速さの　な
速さより速く頽れ逸る先を見る身振りでも速さに纏わり付かせて
二〇二四年六月二十三日

ほんの
そっと　より更に

そっと　より更に
そっと　の尽きない先に尚
そっと　の
そっと　とも知れない
そっと　なら
それは　もう
そっと　とも異なって必ず激しい限りに爆ぜて震えて
そっと　とも異なるそれとははっきり異なる悉くを毀し尽くし吹き払おう
けれど　それは誰のせいなのか　と見回せば
それを　そんな事に至るまで凝っと見続けた奴の他には居ない
にしろ　それで奴はそんな自らを見出せる訳でも無く
ならば　見回せたのは誰なのか
其処に　独りなら
そっと　を凝っと見続けた者の他に見回せる誰も居ないのでは
などと　改めて見回し直そうにも
そんな　見回せる向きなど無いか見回せない程有り過ぎるかで
つまり　毀され尽くされ吹き払われた悉くの只中で
自らも　毀され尽くされ吹き払われたらしいと諦めるしか無い

のなら　諦めるのは誰なのか　それとも
そっと　は幾ら激しい限りに爆ぜて震えたにしろ
そっと　の儘に違いない
それは　誰のせいなのか　いやそれは
そっと　の他に何も無く誰も居ないせいなのでは　と
そっと　を　凝っと見詰め直そうとでもする
そっと　が
そっと　を
そっと　崩して消して消し切れずに
そっと　で無くして行く　いやそんな
そっと　こそ無かったに違いないのは
そっと　と異なる処で悉くは始めも終わりも無く必ず
激しい限りに爆ぜて震えるのを已めないので知れよう
二〇二四年六月二十四日

私は知っている

と言ってみよう　すると
悉くは知られ　悉くを覆い尽くすかに
悉くを合わせたのより広く大きく高過ぎて墜ちて来そうな青空のような
果て知れない重み
を担う私が
何の痕も無い
何かが思い描かれた痕さえ無い処で　打ち拉がれ
果て知れない重みに釘で打ち付けられたかな確かな姿を晒し
厭わしくも乞い焦がれた筈の　その
姿の儘に
高過ぎる空からのように見下ろすと
悉くの知れる限りが硬く狭い内に一つの色形に収まり固まり
数え切れないからこそ数え続けなければ
知れる悉くの抜けた底へでも
数える私も数えられる悉くも頽れ墜ちて戻れないで
知れる悉くは疾っくに片付けられたらしくに
色も形も失せて仕舞いそうで
で何を数えられよう　数など

私に知れる悉くの内に溶けて
知れる悉くの数にも入らなくて扱いようも無く
なら此処はもう知れる悉くの抜けた底だろうか
二〇二四年六月二十五日

羨むしか無くに僅か過ぎては
嫌でも明るい輝きのように目に入って来る
ささやかな限りな微笑み　それとも
まだ微笑みの兆しか　もう微笑まれた痕か　な
ささやかな限りなのだけは変わらないそれは
上辺は穏やかそうでも　歪むか捩れるか傷を負ったか
何処となく苦しげにも　その
苦しげを隠したいような　露わにしたいような　その
あやふやさに依ってだけ　其処にそうして凝っとして居られるらしい
自らを知り尽くし　その知れる限りを
隠したいようにも露わにしたいようにも　こちらへと

向けて来て　それを避けようも無いのなら
それに寄り添うにしろ抗うにしろ微笑み返すしか無かろう　にも
な微笑み方は知らないし微笑む力も無いのなら寄り添うも抗うも
あやふやに
その微笑みに乞い焦がれるのだけは已めない儘に　黙り込んで
それを何処までも執濃く追い続けるように絡み続けるしか無い
らしいにしろ　あやふやに黙り込んだり出来ようか
あやふやさは　向かって来る微笑みにだけ許されるのではないか
黙り込むなら　ひたすらに　あやふやな微笑みに乞い焦がれ　な
乞い焦がれに灼き尽くされでもしない限り　その微笑みへと
身を擲つ儘に　其処に踏み止まるしか無いのでは
と
ふと　けれど　これは誰の考えだろう
と　微笑みとあやふやの僅か過ぎる隙間が揺らいだかで
あやふやな筈の微笑みに危うく粗粗とも隠された
あからさまに黙り込むのよりも逃れ難く黙り込む
ささやかな限りな微笑みなどとはすっかり異なる
ならそれは微笑みへの乞い焦がれしか無かろうか　それとも

な乞い焦がれへの悔しさと微笑みへの憎しみが増すばかりか
に

二〇二四年六月二十六日

黙り込んで
掛け替えの無い儘に全く要らない
どうにも要らない程に掛け替えの無い　の
どちらから始まりどちらへ向かうのか
どちらがどちらを追い回さずには居られないか
それを掴まえようにも二つは速過ぎて　いや速過ぎるどころか
異なる二つが互いの尻尾を追うように回っているとさえ限らない
抑も　掛け替えが無いのも要らないのも少しも確かな事では無い
なので黙るしか無いのなら　その
黙り込みの掛け替えの無さ・要らなさ
が計り知られなければならないけれど　どう遣って？
で例えば

時が止まって止まった時が時を止め直す為かに動き出し
動き出しながらな儘に時は止まる　それとも　な時では
自らを止めるしか無い為に動こうとして仕舞う　な事を
掌に乗る小さな壊れ掛けの仕掛けを弄り回すかに見詰め
そうして
必ず黙り込む儘なのから逃れなければ済まなかろう　孰れ
逃れられない身では時の歯車に噛み砕かれ喰い殺されよう
な怖れに愈愈黙り込んで震え戦くしか無くにも
時を斥けて凍る真昼（時が失せ時を刻める数も溶けるなら
真昼でも無くに唯　夜へとはどうにも繋がらないだけ）の
驕る限りな冷たさに襲われ　譬えとしての時も許されずに
黙る身ごと　せめて自らの
掛け替えの無い要らなさに　戯れに
自らを抛り棄てようと時を刻む針の振りかに　尖って行く
のは
二〇二四年六月二十七日

必ず無くてはならない
見晴るかされる限りに何も無い眺め
に手向けられる
空回りして已まないで変わりようも無い
透き通る厚みの流れとでもしか目には映らない
などと目に映る様で捉えようとすれば
見晴るかされる限りに何も無い　眺め
の内へか奥へか内とも奥とも異なり果てる辺りへと
あっさり消えて目に何も残さない　そんな
それの淡く微かな甘みにでも誘われるかに訪れる
あなた　それとも
あなた　と呼んだところで姿のない
姿の無いでは
厚かましく傾れ込んで来よう光りと闇とで象られる
薄汚い
あなた　な姿を厭い晒して
晒し厭われる儘にも　な姿を棄て逸る

のも儘ならないで　確と数えられる様様な姿に変わり続け
あなた　と呼ばれて仕舞うあなたを　あなたは
絶ち切ろうとして断ち切れないなら
見晴るかされる限りに何も無い眺め
も知らない内に幾つかの影のような塊に挟み切られ　で
あなたはどうしたいのですか？　な問いに
あなたはひたすら身を隠すのか　それとも
穢れを浴びるかに光りと闇で身を包むのか
二〇二四年六月二十八日

閉ざされながらも開かれるなら
其処は全く閉ざされ　其処に入り込んではもう
開かれるなら幾らでも引き返せようと抜けられない
な事が記された誰かの
便りを頼りに　初めてなのに帰って行くように
其処で失われた恰も私を

取り戻しに行くのを已められないのは　その
已められないのが何故かを知りたいからで　な
恰も私が出会えると当てに出来るのは　きっと
恰もあなたしか無さそうでも　そんな
恰もあなたを恰も私がおいそれと招きようも無いなら
恰も私はさっさと恰もあなたの姿にでも乗り移って
どちらがどちらともあやふやになって
其処で失われた恰も誰かの何かに就いて探し合うのも良さそうで
にしろ　ほんの何かの手掛かりでも手に掛かれば直ぐに
どちらがどちらともあやふやは掻き消されるのは
な事でもう掻き消されて仕舞ったからには明らかで　に
何が手に掛かったかを恰も私独りで恰も私の手の内を見詰めても
あやふやの欠片が手から抜け落ちた痕に
恰も私の失われた姿を重ねようとして　それも為らないと知れて
恰もあなたの失われた姿の　恰も私には知りようも無く隠された
あやふやさを弾き飛ばして　くっきりとした
くっきりとし過ぎれば恰もあなたでさえ有り得ない姿の
姿か姿で無いかを全くあやふやにして　なので失われ

其処を抜けられないで失われた恰も私にだけ刺さって来る
独り私の開かれながら閉ざされる　に繰り返される足取りはもう
二〇二四年六月二十九日

始めから戻れる家も無かったので
な戻れない家から遠く離れる程に（
どんな家だろうと家なら家の）
家に戻るのは容易かろうけれど　それで
何処もが家なら家の　家に戻れるのか
となると　やや怪しくて　その
やや怪しさに足を取られ戻れる家に戻るのを躊躇ったりして居る内に
怪しさは見る見る怪しさに輪を掛け冷たく余所余所しくなって
どんな家だろうと何処もが家なら家の
家が　頽れるように
少しも家で無くなって行く眺めが拡がるけれど
な眺めへこそ行き果てたかったのではないか　と

行き泥むか　行き泥む儘に望んだ眺めに滑り墜ちて行くか
な事よりもう其処に　きっと長い時を掛けて蓄えられた
甘みを
離れ小島をぐるぐる回って見回し続けるように味わって居る（にしろ
島に上がって　甘みを蓄える為の慣わしに馴染もうと心懸けるのさえ
耐え難い痛みに襲われる程に酷く難しかろう）　な
恰も私でさえ無いなら　きっと私が残した恰も児らは
な自らの姿に戻って行くのにも躊躇い怖じけるばかりで
二〇二四年六月三十日

七月

見付けたぞ　って何を
そんなの何時か失っただけのものさ　いや

失った積もりになって居ただけのそれを
取り返した積もりになれただけ　なら
失われただけをしか見出せない　かもどうなのか
を知りたくて（それとも
知りたくも無くに知ろうとするしか無くに）
見付けたぞ　ってそれに
取り敢えずの姿と間合いを与え　そろそろと近付いて
けれどそれは　そんなこちらの動きを先回りするかに
見付かった（失った）ものとは何の係わりも無いかに
背を向けて遠ざかるなら嫌でも後を追うしかない先に
見付けたのでも無く現れる
裸かに失う何も無さそうなる　で却って
それがそれを失った儘に剥き出され晒されるしか無くに
周りから熱さを奪うのか辺りを凍らせるようにも
周りに巧く溶け込んで泳ぎ回るような姿は
こちらが与えた姿も間合いも疾っくに払い除けて
ふとした弾みにも行方を眩ますにしても直にまた
見付けたのでも無く現れて

それが何だろうと　それは
失われたのか失われて居ないのか失われようも無いのかを
明かさないのなら　そんなそれを追い掛けて何になるのか
を糾そうにも
二〇二四年七月一日

何の音か知れない音が遠くを走って行く
薄暗い狭い道で一人と幾人かとが擦れ違うなら
一人は握り締めた片手から光りを洩らし　それは
手の内に何か輝くものが隠されて居るのだと分かるしか無い
なそれから目を逸らす幾人かの目はもう
虚ろで曇り果てて行く道の先に闇を弄るだけなのに
彼らは　そうとも知れず
雨に濡れる更に狭くなるばかりな夜道を
直ぐにも眠り扱けたいように転げ下って行くのは　きっと
こんなのは夢で　目を醒ましさえすれば

夢からも抜けられる筈　などと逸るしか無いからで
けれど　ずっと覚めて居る目は冴える儘で
夢など疾っくに失せて影も無い
なら恐る恐る　握り締めた拳を開いて
己の掌が何を掴んで居るかを確かめる他に
此処を抜けて行く手立ては思い付かずにも
堅く重い拳を開く替わりに　軽く瞼を上げるだけで夜道は爆ぜ
爆ぜた跡の荒ぶる夢をたっぷり溜め込んだかな奥に
あの一人の片手から洩れた光り
と同じ光りがもっとずっと小さくなって小さくなる程に
分厚く拡がり尽きないかに噴き上がるように傾れ込んで来るのは
あの一人が擦れ違って向かった先が遂に激しく裏返ったに違いなく
そうして光りは　再び思い出せないまでに消え
道も狭い儘に塞がるしか無いらしい
二〇二四年七月二日

思い掛けず　死ぬ人が死ぬ事の
死ぬ
に就いて話し合う内に
人は幾らでも取り替えが利いて誰でも良くなって
皮と肉を剥いだ骨のように　死ぬ
に就いてだけ　あれこれ行きつ戻りつ話して居る　ふと
そう心付くと　死ぬ　は
死ぬ人に就いて話す妨げでしか無くて
人から　死ぬ　を抜き去って
人に就いてだけ話したくなって試みに　その
人の笑い声を　思い出せる限りに
死ぬ　から
死ぬ　の外のこちらへと呼び招いてみようか　とそんな積もりで
身構えるように何処へか耳を欹てると　微かにも聞こえのは全く
死ぬ人の笑い声で（当たり前だけれどそれは
その人の生きて居る内には聞けなかった声で）その声に含まれる
奥深そうにも透けた響きの底にか流れる水のような
その人に降り懸かる雨から浸み出す広広と軽やかな薫りのような

死ぬ　が
唯独り呼び招かれたかな振りを誇るようで
それを喜ぶべきか悲しむべきかに戸惑って居るのは
誰だろう　な誰も誰でも良くなれば
幾らでも取り替えが利くのに　生きる　も　死ぬ　も係わらないか
と
死ぬ人の笑い声を真似たくて真似たくて込み上げる自らの
笑い声に呼び招かれて　死ぬ
に何時かすっかり身を浸して居るようでも声だけは真後ろを向いて
生きる　へ刺さる儘なのを喜ぶも悲しむも戸惑いようも無さそうで
それはきっと
な声の　取り替えの利かなさのせいに違いなく
二〇二四年七月三日

声は言う「（
死ぬ　なら）

私は誰かだ」って
でも誰かって誰？　の誰かと誰？　の間に
誰なんて誰だろうと誰でも無い
って　声を拒む光りで闇に　それとも
光りと闇なんて光りでも闇でも無いのを光りと闇に知らせたいかな
光りが闇を食い闇が光りを食う傾いた眺めに鋭く切り込ませるようで
なら
誰かと誰？　も断たれるように断たされるように
な眺めに歪められ　互いに互いを照り映えさせるかに
共食いの間柄なのを曝かれ
生まれたばかりかな丸裸の幼い姿を晒し合い　それは見る見る
誰でも無い儘に死ぬ誰かの匂いに晒されもするようで
けれどそうして　「誰かと誰？　は
こっそりとでも生まれさえして仕舞えば生まれ付き
死ぬのを免れる程にも親しい確かな一人の誰かに違いない」って
必ず言い募ろう声の　けれど
その確かな誰かの
恐らくは光と闇の狭間にでも生まれ堕ちたのを

幾ら遠い昔を見通してさえ思い出せない　その
間怠っこさに柔らかく息の根を止められそうにも
か細く延びて行く先に独り汚げに
閉ざされた光りと闇の混ざり合う内に揺蕩う
ゆったりとした誰でも無い姿が数知れず湧き出して已まないのなら
死ぬのは誰でも無いのだけは（誰でも無い声の
私なりに）確かに薄っすらと思い出せるようで
二〇二四年七月四日　親（ちか）しい

死ぬ
底無しの怯えに怯えながら　その怯えのせいで
死ぬ　そんな
誰かなら誰でも無かろうと確かに
死ぬ　のか
いや　それでさえその怯えが
死ぬ

のを妨げているのは明らかならその怯えの中に
死ぬ
を転げ込ませ　遂には棲まわせるかして
死ぬ　とその妨げとを一つにし　つまり
妨げを妨げで無くさなければならない　などとうっかりそれで
死ぬ　事になったりしようなら
怯えは妨げでも無くなり　するりと取り零されるかして
死ぬ　に死ねない底無しにひたすら怯えを追い求めるように
堕ちて行くしか無くにもそれで恐らくは　どのようにか
死ぬ
のだろうが　それはやはり何処か
死ぬ
のとは異なる　きっと
死ぬ
怯えとその怯えを失う怯えが妨げとなって
死ぬ　のから遠ざけられるしか無くにも
だらだらと
死ぬ　のだと自らを見定めた振りをするのがやっとで

そいつは　生きるも
死ぬ　も無く唯
生まれもしなかったのと同じに
死ぬ　かな形（なり）で腐り果てて消えて行くらしい

二〇二四年七月五日

一息一息と　身に刻み付けるように息をする度に
息をする身の偽りを数えて居る　そうとしか
数えずに居られなくて
息は止めようも無いらしく
そんな身の偽り　ならば
息をする誤り　のせいで
な身ごと
風だけは通さない丸い穴に呑まれたか　それともその
身が始めから　そんな穴だったと知れたのか　ならば
薄い紙に準えてぺらりと捲りたくなる程に　身は

澄んだ水そっくりの骨に変わって行く　それとも
身が始めから　そんな骨だったと知れるならその序でに
風程邪なものも無かったと知れる眺めが拡がれば閉じて
な風の失せた中を　形の無い骨が（
形が無いなら転がるでも舞うでも崩れるでも溶けるでも無くにも）
姿を晒せば消してその序でに
風だけは通さない穴も消えて
な処から抛り棄てられるかに
死ぬ
だけが
一息一息の痕を接ぎ固めたようにも
形の無い骨には粘り着いて来るらしいにしろ
形の無い骨の身からすれば　な
死ぬ
なんて直ぐにも落とせそうな小さな染み一つで
けれど　な染みを落とせば
形の無い骨は見る見る汚れ
身は　酷く穢れた醜い形を晒すしか無さそうで

二〇二四年七月六日

拳を緊く結んでしか眠れない　その
眠る内も手放せないのは　何時か
死ぬ
その確かな手触り　いや
それを拒んで擦り抜けようとする微かな
死ぬ
に係わる動き　かで
を塞ごうと拳に集められる力が始めから虚しい　とも分かるのは
死ぬ
なんて事は何処にも無くて　この先に待つのは
殺す　か　殺される
そのどちらかに違いないからで　いや未だ死んで居ないのなら
殺されるまではすっかり何処もが　殺す　ばかりに充ち満ちて
死ぬ　などは

ひたすら猛猛しい
殺す　の外へあっさり斥けられ
死ぬ
の確かな手触りが欲しいのなら
殺すか　殺されるかを手にするしか無い　それも
確かに殺す　か　確かに殺されるかでなければならない（例えば
殺すが充ち満ちる内に閉ざされては　それは
殺される　と何が違うのか
などと言う迷いにも惑わされては為らない）と腹を括れば
確かに殺す　などは全く容易くて日頃馴染みの
殺すに
確かな手応えを投げ与えるだけで済むにしろ
そう幾ら猛猛しげに繰り返し遣り遂げようと　それでは未だ
確かに殺されるが手付かずなのも明らかで　とまで分かるなら
拳を緊く結んでしか眠れない　その
眠る内も手放せないのは　どうやら
確かに殺される確かさを未だ手に出来て居ない虚しさで　それが
死ぬ

の虚しさとも繋がるらしい
二〇二四年七月七日

死ぬ
まで駆け昇る　駈け昇れない
駆け昇ったところでその先へ堕ちるのは知れて居る　それは
死ぬ　とも係わり無しに何へだろうと…
駆け昇る　なんてそんな事で
なら他に何が出来るかも知れて居て
な事を知れて居る身を棄てれば良い　にしろ
でもどう遣って？　の先にはまた
死ぬ
まで駆け昇る　駈け昇れない
駆け昇ったところでその先へ堕ちる
が待ち構えて居るようなら　その
でもどう遣って？　を棄てれば良い　にしろ

でもどう遣って？　？
…な事できっと
死ぬ　は
終わって居る
けれど
終わって居る　には中中手出し出来ない手強さが有るのも全く確かで（
終わった振りで全てを浚って裏返り　始まりに襲い掛かるか）ならその
終わって居る
死ぬ　に命懸けの顔付きで殺される振りでもして
死ぬと合わせ鏡かに身を晒し躍らせてはどうか　などと
独りで身を突き放す程に
死ぬ　はそれを嘲笑うかに身の駈け昇れない向きへ駆け昇って行こう
光りやら闇やらを美しげに汚らしく吐き散らしながら
二〇二四年七月八日

くっきりする程に

ずっと遠くを近付いて来る向きに漫ろに歩く女の顔を
幅だけで見て取って居る　と全く女とは
顔の幅だけの生き物で残りに目を遣っても汚れ崩れる影でしか無い
けれどそれをきっと　女も泥泥と能く能く分かって居るらしく（
だって女は時を止めたいかに薄っすら顰めた眉を凍り付かせ）自らの
顔の幅をどう振り切ろうか抛り棄てようかに常に思いを巡らすにしろ
思い通りに事は運ばなくて　辛くて死にたくなる程に苛付いて居る
に違いないと分かれば　その女に係われる一つ限りの遣り方は　その
女の思い通りになるようにして遣る事で　それには敢えて
顔の幅でしか無い女の顔の幅から目を逸らし　その余り物な女の身を
ずたずたに切り裂くなりして無くして仕舞えば済む訳で
いや　どうやら
こんな事はもう疾っくに遣ったじゃないか　と
朧に昔を思い出すようにずっと遠くを見直すと
確かに　顔の幅だけを無くして女の身一つがぽつんと
遠ざかる向きにも少しも歩みを進めない儘にやはり漫ろに歩いて行く
二〇二四年七月九日

力尽くでか近くと遠くの境が漫ろに暈かされ　その
暈けの中へ暈けの中の暈け
そのものの有り有りとした姿を見極めようと　目は
堕ちもせず昇りもせず弛弛と進むと退くの間で
望んでも居ないのに研がれ続けるかに幾らでも尖り
尖るからには尖る先は幾らでもその先を傷付けて居よう
に傷付けられる物共が丸丸とも荒荒しく重なり脹れるのこそ
暈けそのものの姿に違いない　と取り敢えずはその
暈けへと身を抛り棄てるように　目を瞑るかすると　目は
始めから紛い物で　それとも死んだ誰かからの借り物で
あぁそれは良いね　とするりと暈けに暈けと同じ大きさで
恐らくは身ごと入り込めたなら弾かれ除かれ　何処か
外へ…
の外が　目の外なのか暈けの外なのか
どちらでも無いのなら　もう
近いも遠いもその境も始めから無かった辺りに唯

ぬるぬると明るい肌触りを戯れに圧し拡げるのに
馴染んで行くしか無さそうで
二〇二四年七月十日

さも美しいような顔の幅の　顔の幅を
あなた　なんて呼んでみると　そんな
あなた　は数知れず湧いて出て果ては
遠くは霞む程な大きな街が拵えられて
其処に住むまでなら容易くても様様な
習わしに馴染むのは酷く難しい　なら
それを違う喩えに置き換えるしか無く　手っ取り早く
さも美しいような事は忘れ　顔の幅を
あなた　なんて呼ばずに黙って眺める　と却って
幅の間には美しさが静かに溢れ満ちて　それを
奪い取る手立てを予め整えないで置いたのを
悔やむしか無いにしろ誰が？　と顧みると

攫われ損なわれて置き去りにされたかな
眉を顰めた　よちよち歩きの幼児達の
粉粉に砕け散るなら溶け合って濁った光りの一塊に脹れ切って
そうしてその姿らの跡形無く消え去ったのを喜び祝う
街の喧しく重く棘棘とした響きに躍ろうとでもする影の群れに
その誰かは
きっと顔の幅のあなたを殺したに違いなくに紛れなどして居る
二〇二四年七月十一日　喧（かまびす）しく

それのそのようにだけで昇るばかりに飽くなき遥かさを失うのが
死ぬ
の全てで　それも
死ぬ
間際まで飽くなき遥かさに望みを繋いで…
遥か遠く離れた眺めは生きてしか現れなくて
その眺めの向こうに

死ぬ
が見えるならそれは命に仕掛けられた罠かな偽りで
確かに　偽りへと死んで行けるのなら
死ぬ
もすっかり偽りなのだ　と気休めにはなろう　いや
気休めの他に何が有ろう　けれどその
気休めの他に何が有ろう　とは全く望みを語るに過ぎない　だって
気休めの奥深さに比べるなら
死ぬ
命は浅い　その
浅い程に飽くなき遙かさを　ぬけぬけとぬくぬくと匿い育て
死ぬ
を遠ざけて仕舞うばかりに近寄せて仕舞うのは
きっとその偽りを少しでも長く愛でて居たいからで
二〇二四年七月十二日

美しさを纏うのと醜さを纏うのは同じ　と言うか
それは同じものを纏って収まって居る　と言うか
何も纏っては居なくて纏って居るなら
その纏うのが始めから偽りで　ならば
誰がその偽りを呼び求めようとするのか　それとも
誰にその偽りは呼び求められようとされるのか
を知ろうとして　同じ一つな程に
美しさと醜さのどちらをそれに纏わせようか
迷う振りなどして稼げない時を稼ごうと足掻くその足は　ふと
自ずと滑らかに水を掻くように美しさと醜さの綯い交ぜられた
清かに冷え冷えとした流れに沿うように
何の一つさえ纏えない程に小さな
死ぬ
向きへ拡がり窒がる
目だけで叩けば瞬くように開かれる
美しさも醜さも纏えない裸の偽りへ導かれようとされる
窄まり延びる影の尖った先の綻び已まないかな
飽くなき遥かさの息の根を力尽くで止めた

まるで必ず誰でも無い一人の人の姿をして　な
姿を直ぐに殺して冷たく
死ぬ
向きに晒し続けて居るように　なので
何処へとも流れて行けるかな濁り果てた目付きを尖らせ
それでもやはり裸で　裸なら
美しさや醜さを纏うも纏わないも無くに　きっとそれでもまだ
殺せる誰かなら誰でも構わず呼び求めるか求められるかで
死ぬ　その
匂いに惹かれて　ずっと探し回ってそうで
二〇二四年七月十三日

死ぬ
のは偽りで誤りで　なら
その偽りで誤りは
殺される

に依って直せる筈　何処まで行っても
殺される
者達しか居ない処　ならもう
死ぬ
に居処は無い
偽りも誤りも無い
筈なのに何故かその
殺される
から弾かれ
偽りで誤りに塗れる者として居るしか無い　で其処で果たして
殺されたい　は
乞い望むに足りる事か　を
知ろうとして誰にそれを尋ねられるか
二〇二四年七月十四日

そっとでも踏み付けられるのは必ず　命で

死ぬ
を踏み付けようにも足を滑らすだけな　その
泥濘を抉るように滑る足の動きを辿るように
暫く先の水の匂いを仄めかす古い石畳を行く
と
見えるように聞こえるように聞こえて見えて
見えるも聞こえるも誤りなのを知らせて来る
ひょっとして火か踏み付けられた火の燻りか
水の少し遠い匂いに差し向かおうかと昂ぶる
匂いにしろ差し向かう為には騙る為の言葉に
凭り掛かるしか無いなら誤りを逃れられない
のも明らかにしろ誤りなど石畳を越える風に
吹き払わせよう勢いを撓め足はそうしても尚
そっと踏み付けられる命を探して彷徨くなら
やはり
死ぬ
とは違う
殺す

為の命こそ唯一つ無くてはならない
と思い至り思い至る繰り返しの渦巻くなら渦のその真ん中にだけ
死ぬ
は見付けられて　成る程そんな
死ぬ
では踏み付けようも無かろうと
それでさて何処へ引き返せよう　殺すしか無い筈なのに
二〇二四年七月十五日

…棄てなければならない　けれど何を）
棄てるに値するものを手の内に収めてだけ
棄てられる（つまり
棄てるに値しないものを幾ら棄ててみても
何を棄てた事にもならない）その
棄てるに値するものとは　何？
要らないものは棄てるに値しない　と言うか

要らないなら既に棄てられ　それを更に棄てようも無い訳で　そんな
要らなくて疾っくに棄てられたものらの蔓延る辺りを
荒荒しく風を切って掻き分け掻い潜り
遂に行き着ける処が有るなら　其処には唯
命だけが裸で何も拒めず逃れられずゴロリと転がって居る　そんな
それに　こちらまで裸にされて仕舞うような心持ちに抗いながらも
立ち会うしか無さそうで　そう
無さそうで無さそうで　とばかり思えてならなくて　そんな
命を唯一つ棄てるに値するものとして探し回って仕舞う
それを殺める刃ならもう確と胸に忍ばせて　いや
けれどこれは酷く脆く危ういぞ　例えば何か華やぐ集いの帰り
胸に挿された花の萎れる様にふと目を留め　それを
淡くも微かに言い知れない程の喜びに痺れながらに
何も拒めず逃れられないその裸な儘の姿と見て取り
素早く撮み上げ棄て去って後は見向きもしないなら
命一つと同じ程に棄てるに値するものを棄てられたと言うか
棄てるに値するものからさえ解き放たれたような（ならそれで
棄てるに値するものを棄てられたのでは無かろうか　な）唯

向かい風に向かって行きたくて向かって行くしか許されないような処で
そのまた先へと向かって行く先に
死ぬ　それとも
死ねない　それとも　殺す殺せない
誰かの姿の失われては甦る様にでも　のめり込むしか無さそうな
二〇二四年七月十六日　刃（やいば）

疾っくに誰もが黙り込んで居ように今更
の何時を今更とも定まらないで
斜めな砂の崖が後ろの暗がりへ崩れるように（にしろ
な暗がりさえ有るか無いかに）幾つかの粘っこい言葉の欠片が
傾れ落ちて行く　のを掠め見たか見たにしろ直ぐに見棄てて
に見棄てる身も振り切って　な事でもう
棄てられる何も無いな　と確と知れる
その先で　一人で無いのなら二人の　けれど
二人なのに全く同じ血を頭に巡らせて居よう　その

同じ一つの頭から湧き出す二人を隔てる言葉
は棘棘と黙り込むのにそっくりにしろ
そう分かち合うように黙り込むのなら　分かり合えない儘に
その分かり合えなさを　そっと分かち合うでもして
どちらがどちらを殺そうと殺されようと何も起きない　それとも
その何も起きないせいで　どちらかが
死ぬ
事だけが必ず起こる　な
静かな眺めに酔い痴れる処にまで辿り着けなければ
同じ一つの頭は一つの儘に膿んで何を垂れ流そうと
疾っくに棄てた筈の汚れ果てたそれを　ズルズルと醜い音を立て
舐め回さなければならないだろうけれど　どうやら
水の中のように澄んだ眺めの中に
殺される
のを唯待って嬉しそうな一つ限りな若い命が
尽きない泉のような身の熟しで身を躍らせ水と戯れて居るかなら
一つの事しか起こらない事はもう起こったも同じで　その経緯は
同じ一つの頭の中へと乱れ無く戻されて行こう

二〇二四年七月十七日　経緯（いきさつ）

人で無いなら
人で無し共が眠り込んで居るのを指差すのは　そう
指差さなければ眠りに落ちて仕舞う程に眠いからで　にしろ
人で無し共など誰かを指差したいのならその妨げでしか無い　で
私なら私は
指差したのだろうか指差されたのだろうか
指差したのなら後は指差された奴らが全てを片付けるに任せるだけの事
指差されたのなら
指差した奴を締め付け食い殺さなければ済まない　けれど
私なら私で無いなら
態態指差そうが指差されようが
人で無し共に同じ人で無しとして常に指差されて居るか
何時でも指差されて仕舞う人で無しで　ならば疾っくに
食い殺されたに違いない　いや違う

指差した筈だ
指差したから指差したそれを人で無しとも分かるのだから
私なら私で無いとも分かるのだから
人で無し　も　私なら私で無い　も
指差されてしか無い
のなら　きっと遣らなければならない事に果ては無い
食い殺さなければならない奴らは湧いて出て尽きない
は　それとして
誰かを指差したい誰かとは　誰だったろう
その誰かを指差せないで居るのから何時かは抜け出せようか
それとも先ずは
指差すとも指差されるとも異なる辺りに留まった奴らと交わろうか
奴らを　どうせ人で無しの群れと分かった上でも
な温い夢を追いたいかに　避けられない眠りに落ちた振りでもして
二〇二四年七月十八日

私な　私は
死ぬ
私を貰って私なら　その貰った
お返しを何処かの誰かにしなければならない
など巫山戯た考えに耽る程に　何もかもが
黙り込んで居て　その黙り込まれて居るのを眺めれば
何処の誰へだろうと　その
黙り込む　のが
その儘に　私なお返しで有るしか無いよな
などと更に巫山戯た考えを進めて行く内に
黙り込まれて居る眺めの中に閉じ込められ
其処に唯有るしか無い　それぞれがどれも
恐ろしい切れ味を身に帯びて触れれば必ず
忽ちに殺す殺されるの係わりに巻き取られ
斬られたなら身一つに其処から切り離され　それでも全く唯
黙り込む　その
黙り込み　に拠ってだけで
死ぬ

のからさえ　死なされた儘に身を躱し
死ぬ
へは至らない道をだらだらと行くばかりな姿を
身を消すように誰にも知れないように追って行きたいのなら　で
何が起ころうとどれももう既に起こって済まされたも同じに
な身を溶け込ませた眺めは自ずからに動いて行こう
けれど呉呉も黙り込む儘に　ならその
黙り込む
のだけが独り変わらないだけな
黙り込みさえすれば　と言うかもう
何もが黙り込んで居る訳で　そうして何にでも同じに喩えられる
拡がり尽くされて行く眺めなら眺めが　な
眺めのお返しが眺めの儘なお返しのように
私な私などを絞め殺すのもさぞ容易かろう
微かな風の一戦ぎに　何かの
死ぬ
陰さえも映さないで　ぁあ　その　そんな
陰

二〇二四年七月十九日

測れば時は常に凍って冷たい　な
測れる時は去って　済し崩しに
測れない時が好まれ　それとも
去ったのは却って測れない時だったのでは　確かに
測れない時を測れるなら凍って冷たかろう　な
後に残る　測れたところで測れただけの
温い風を吹かして風に揺らぐ限りな影らの移り行きを
それを喜ぶ身に浸みさせる時なら時の　けれど
それでは時はもう時を望まれての時でしか無い　な
時の中を唯運ばれて行くように振る舞い尽くして
夏とも冬とも紕されないで穢れるかに
彩りばかりが厚く重そうに加えられて行く　な
時に埋もれるしか無いせいで固まる水のように上滑る眺めの
低くへ行き止まる測れない時の縁かで

輝く膚を冷たい風に弾かせ　独り
殺されるのを
待つとも知らず待って居たのは誰だったろう　いや
その姿も齢も声も匂いも名さえも忘れはされなかろう
にも　それを
誰とも知られないのは　疾っくに殺され
にも　姿やら齢やら声やら匂いやらはそっくり生きる儘でも
辛うじて名はこれ見よがしに消し痕を際立たせ消されてよう
にも　固まる水に錐揉まれ身を逆さに尖らせでもする積もりで
凍った時の底に影を投げ懸けて身をその冷たさに触れさせたい　な
身振りばかりで　測れない時を紡ぐかな手付きで水を掻き回す
それより変わりようも無いからで　なので
時を貫くように何時でもまた殺され直そう
それは　そうとも自らを知れないばかりに
夏とも冬とも糺されないで風を風任せに纏って穢れ果てて行く
にも　なので
死ぬ
には触れられず

二〇二四年七月二十日

何処を駆け回ったか駆け回っても殺せる命に出会っては
殺される命の確と殺されるまでは出会いを奪われている
のを掠め見ながら次次とその命に出会いを与えて遣ろう
と目を輝かせる
な目の輝きを目自らが活き活きと見て取って躍るように　愈愈
目は　殺される命を探し求めるのを已められないけれど　な事が
何処もが拡がり過ぎて行き詰まるらしくに裂けては竦む　足は
棘棘と虫の脚そっくりに細く尖り扉を見付ければ直ぐに
蹴破る
のは殺せる命が奥で息を潜めて居るのが許せないからで
それでも
何処もが拡がり過ぎて行き詰まり窮まり　拡がりは裂け
蹴破る程に尖る脚さえ浮き足立つかに凍えるように汚れ
それでも

殺せる命は匿われ尽きないなら遠くを吠える仄濁る声は
終わりを促す響きを断ち分け疲れは重く脚を引き摺らせ
そうして
蹴破られた扉の奥からは犬の喘ぎ一つも聞こえなくなり
時は破られ耐える心だけかに辛うじて残った傾く踊り場で
行って仕舞ったあなたを呼ぶように改めて扉を叩く音を
探す喜びに易易と豊かで確かな実りを取り入れるような
それとも
それとはまるで異なる唯明るく遊び戯れて時を溶かして
何処もが拡がり過ぎて石の欠片一つ一つまで数えられる
明るさしか許されない　そうだ見付けたぞその明るさの
直ぐ脇で丸裸で命を震わせる痩せた幼い体の自らの影で
すっかり覆われた姿のぐりぐりと瞬く間に見馴れて行く
のさえ知らぬげに遣り過ごして足跡だけは残したあなた
の

二〇二四年七月二十一日

殺しても殺しても何も変わらない
それはそうだ　殺す他に何も無いからは
その何も無いからは分かった上に確と立ち
もう一人だけ殺してみよう　と（その
一人な姿が鮮やかな肉付きに見て取れたようなら）
其処から行き成り何もかもが変わったみたいに
更に見違えるように余りにも何も変わらないその
変わらなさに心撃たれたか
斃されるまで走り続けようと心に決め
撃たれたかな心を斃されるまでと決めた心で励まし
けれどやはり何も変わらない焦りに囚われるだけの
な己の姿に嗤いが喉から吐かれ　な嗤いを噛み殺し
命が盛る限りない夏なら夏へ飛び込んで行こう！　と
殺しても殺しても何も変わらないなんて嘘のように
一人限りに必ず殺さなければならず　間違いなく
その一人を殺しさえすれば全ては変わる　そんな
望みに身を引き裂かれ引き裂かれたなら　それで

前のめりな儘に斃された筈で
後戻り出来ず　全ては変わったと確かめられて
死ぬ
なんて事も始めから無かった事と
始められる　その
始めにもう
死ぬ
が待ち構えて居ようと何処吹く風と
二〇二四年七月二十二日　盛（さか）る

こいつとだけは向き合ってはいけなかった奴と
鏡に向き合うように向き合って居る　いや違う
鏡の喩えなんて入り込める隙も無く　なら
奴は全く俺なのか　と奴もそっくりそう思ってそうで
奴はもう俺を殺して居よう
に決まってる　でなくては困る

と全く困り果てて俺はもう奴を
殺して居よう　いや違う
俺はもう殺されて居なければならないだろ　違うか
殺されてこそ見えて来るものを狂い無く見て取って居るからは
そうして何を確かめるか知れない何かを確かめる為に走り続け
目の縁を掠めて行く水の上の姿を追うと　それは
奴でも俺でも無い　奴も俺も
その姿を水に沈めれば　俺は奴から奴は俺から救われる
だなんて浅はかな望みに囚われたばかりに
俺と奴は　殺せもしない互いを殺そうとし合ってる
これを終わりにしたいなら
俺は奴の　奴は俺の顔を　真ん前に見て
せめて互いを歪み過ぎた鏡に換えようと　けれど
奴の顔ばかりが水に濡れる程に脹らんで
居処を無くした俺が堪らず顔を背ける先に
見ず知らずにも俺が独りで殺したなら俺独りに知り尽くされ
行き止まりようも無く
生きるも死ぬも酷く厭うなら厭う儘に再び殺されようも無く

消えようも無い身を汚れるか汚れさえせずに圧し立てるなら
みるみる身は削られ痩せ細って
影が光りで光りが影へ裏返る眺めへ　その
光りと影の裏返りに常に遅れて弛弛と裏返り尽きないそれを
黙って見送るしか無い
二〇二四年七月二十三日

川は流れて行くなんて声に拐かされ
嘘塗れな眺めに圧し返されるかなら
脱ぎ捨てられ濡れた手袋に空の明るさを嫌って潜り込もうとする
細い背を青く光らせる蜥蜴のように
殆ど裸のあなたの身の何処かに逃げ込めそうな穴を見付けようと
あなたの傍らを川縁を滑るようにも
肩に触れようなら肩は光りに侵されるかに脆く頽れ膚は沈み込み
蹌踉ける弾みに二人の頭は重なって
私の頭はあなたの頭に溶けてその私の頭の中にあなたの頭が溶け

元から一つな空を衝く思いは固まり
けれど互いの血が背き合うなら却って身も一つに躍り跳ねるかに
干涸らびるしか無い空が堕ちるのを
互いの穴の底に互いの身を映し尖らせ苦く濃い味を舐め合う限り
込み上げるのが悲しくも怒りにしろ
それに勝る悦びが細かな欠片と砕け散り互いを殺し合いたいなら
一つな頭を一つに叩き割れば済むと
麗らかに命を薫り凍らす眺めは下る
二〇二四年七月二十四日

何の考えも棄てて外をぐんぐん行くようなら　白過ぎる
脹らむ胸を長く硬い刃のように影は次次と刺して　白過ぎる
のは胸の脹らみか　外へ展かれ已まない眺めの奥行きか
が怪しくなって見上げる空を　深い青を潤ませる雲が重なり盛られ
目は広く大きく透けるなら　体はすっかり牝になって　白過ぎる
空の狭まる様は　小さく窄んで色を全て搾り棄てた絵のようで

けれど体が牝なら大きく拡がり続ける目ごと　はち切れそうに
脚ならどちらへも向けられそうに救われようかにも　白過ぎる
空の狭まりは疾っくに見失われ　牝が産んだばかりの隠し児が
少しも隠されるようでも無く　骨から弱いなら却って荒ぶって
牝がどうしたって？　牝など
息を詰まらせる息を吹き掛けて息の根を止めて遣る　かな構え
なら
白過ぎるせいで　嗤える程に平たくなった山並みの向こうから
陽炎の狭まり窄まるように現れるのはあれはやはり　白過ぎる
白へとだけ
身を消して行きたい振りをしたくも無くにして身は消えそうな
大き過ぎて透け過ぎる常に空を仰ぐ目を弱弱しく持て余す儘に
牝と同じ大きさの誰かなら独りの　その身に巣くう
牝と同じに尖った痛みを　一息に吐き戻したくてならない望み
二〇二四年七月二十五日　刃（やいば）

暖かいなら必ず何かを
な何も見当たらないか
ので居処も無いように
何処へか運ばれて行く
にしろそれは酷く酷い
とこころ何日かの日和の
毀し尽くしたいのは唯
の他に無かろうにあぁ
親を棄てた隠し児らの
溶けては尖り現れ直る
がどうかしたかって？
が嘘の何が嘘かも曝く
なの時は醜く改まる
換わりに時を滞らせて
醜さすら及ばない疲れて
に覆い尽くされた街は
二〇二四年七月二十六日

企んでよう何だろうと
見当たったところで使えない
牝に飽きたなら若い牡の囚われ縛られ
戯れ泥む心持ちで
心持ちだぞ
酷く穏やか続きなのを真似て穏やかな心持ちで
私を私で居させて仕舞う何かの企み
その企みにどうしたって行き当たれないのは
喧しい笑い声を響かせ壊し尽くされた街の眺めに
日が暮れ闇の中でも飛び跳ねては遊び飽きない姿
そんなの何時でも断ち切れるだろうって？
その後では朝が来ようと後は後にはならず
の醜いと言っても何の醜い姿も現れない
滞る時が時を破ろうとしない醜さ　それとも
に毀されて行く私を時を使って磨り潰す企み
　隠し児らからすっかり笑いを奪っては暖かい

喧（かまびす）しい

雲は青く浸み　焦げる空から剥がれそうにも堕ちたりしない
山並みが　穏やかな日和に
ふと心を弛めたか　光りを湧かせて溢れそうな海へ傾ぐのは
きっと速過ぎるんだ　だって硬く結んだ拳を開けば
掌は遠い青を唯滑るように映すだけで　それを
海に準えられた日なんてもう　遠い青よりも遠過ぎる　で
今しも家を出て姿も消したように働きに行くのだけれど
深く絡まる程に硬くぎこちなく　そっと微笑み合って離れて行く
それを心とも呼べるのなら呼べないのなら　その
絡まり合うのから変わって行かなければならない　それが
きっと速過ぎるんだ　止めようも無く
嘗てなら開いた掌を　疲れながらにも重そうに見詰めれば
それを止められる暗い火の色を
灰をなぞるようにも乾いた目で舐め回せたろうに　なら
もう灰も吹き散らされて　そんな事に至った道でも知らせに行く
けれど何処の誰に？　（

その誰かの冷た過ぎる笑い声だけは余所余所しくも聞き取って）
姿も消したように働きに行く
って　きっとそんな事でそんな事だからもう
絡まり合う速さに縋って独りで互いに堕ちて行くしか無いのかな
そんな目なら目だけで少しは濡れて奮って　再び
すれすれの斜めから暗みを狙うように掌を掠め見れば
這い昇るように浮かんで滑るのは　集め尽くした声の一つ一つが
燃えて灰になったと知らせる　速いより速いなら小さ過ぎる眺め
二〇二四年七月二十七日

欲しくないものを探し回るなら
私がそれを見付けるよりも先に
目敏くそれが私を見付け　私に
して欲しくもない事を矢継ぎ早にして来る
なんて事は何より先に知れて居て　なのでこそ私はそれを
欲しいと思い続けなければならなくて　その何よりも古い

物事の始まりよりも古い　筋と皮だけで今にも斃れそうな
男か女かも知れない身を細く尖らせ　穴を覗き込んで居る
そんな姿で迫って来るのは　迫って来て直ぐに消えるのは
私
独りしか居ないならもう覗き込んだ穴の中でのざわめきに
何時からか思い出せない頃から固まった儘かに取り囲まれ
なのに私一人余所者なのは私だけが男か女かのどちらかで
他は誰も男でも女でも無さそうで穴に隠るしか無さそうで
な事に心付くと目の前はぬるぬると溶けるように真っ暗で
な程に陽が丸ごと間近で呑み込まれ大き過ぎて動けないで
目を灼く程に明る過ぎるにも程が有ろうに目は直に慣れて
見ると
陽は奴らに酷くぞんざいに扱われて居るようで
そのぞんざいさで　酷く貴ばれても居るようで
手足も腰も拗らす限りに拗らせ陽に纏わり付き
それでも奴らは皆一人一人ばらばらで独りぼっちなんだと
嘆けば嘆く程に「
それは私の独りぼっちとそっくり同じだ」

と　それで
揺蕩うかに陽の明る過ぎる声が　奴らを慰めて居ると分かると
私は
陽に纏わり付く諸諸の暗さと一つ限りの陽の明るさとを見比べ
直ぐに　どちらもそっくり同じなのを確かめられて　その
確かさに安らいたいのか　抛り棄てるようにして
剥いた目を自ら陽に灼く筈だった
二〇二四年七月二十八日

折り重なるように　薄暗く汚れた匂いの狭い中で
陽を嫌うらしい古い光りらが　どれも似た萎びた姿で閉じ籠もり
揃って奥を向いて祈るらしいのを　導かれるように
低い小さな隙間からそっと覗き込んで居て　それは
何を差し出すべきか忘れられて仕舞ったか　それとも
差し出すべき時が忘れられては　何も差し出しようも無いから
にしろ何時しか　それら古い光り　の内の一つに収まり　けれど

祈ったりせずに（
彼らだって祈ったりして無くて換わりに）ぼそぼそ夢を語るのを
聞きたくも無く聞かされる内に　酷く時は経ち
やっと　夢の話しなどとは違う
何を差し出すべきかの確かな名を並べて声に出来る
しなやかな身の熟しの若若しい姿と
合い語らいながら時を蹴破り　外へ出るには出たものの
其処でもやはり時は忘れられた儘では
何を差し出すべきかの確かな名を声を揃え繰り返し唱えるしか無い
祈りそっくりに
そうしてその名達も折り重なるように
古い光りのどれも似た萎びた姿にされては並べ立てられるようなら
失われた私を差し出せば　名指された全ては取り戻されれ
忘れられた時を遡るかに　時の始めを探しに行けようか　にも
それは
陽の向かう流れに沿うのか　逆らうのか
何を忘れたかも忘れる程に　酷く分かり兼ねて
二〇二四年七月二十九日

一人　私だけが
此処に戻り着けなかった　そう
一眺めに狂い無く見渡せる　そんな其処で
目は目だけで何を映してようか　な　ふとした思いも
吹き飛んで仕舞うのは　頭が断ち切られて居るからで　な
断ち切られた頭は　どうやら真っ二つなようだけれど
どの向きに断ち切られたのか
どの向きから眺め眇めしても
頭は頭の形さえ見せず虚しく回るばかりで全く知れない
なら
暴れ回った末に転げ棄てられた光りの骸か　それとも
暴れ回った川を転げ下って早瀬に突き刺さった石塊か　な
唯私独りの内へ堕ちて目なら目の底にでも居座る　何かの
痛み
を少しも捉えられない身なら　それを

深く恥じなければ何も始まらない　の
何を始めたいにしろ　痛みの無い身では恥じる儘に
出来るのは身を棄てる事位では無いのか　なら
棄てたに違いない　何故なら頭の形も見せない頭は
何処にも見当たらない　で
いや　で
とは誰の言い草だろう　と誰に問えるかも怪しく
一人私だけが居ない此処に　戻り着けた屍達の
積み上げられて行く様は目に静かに映る儘なら
一人居ない私を　光りを川を遡るように探すしか無いのを
目は独り恥じるしか無かろうか　その
何故私なのかを考える程に無い頭で考える惨めさすら失せ
二〇二四年七月三十日　石塊（いしくれ）

‥夢見るしか出来ず　それに甘えて）
夢見られるのは唯一つ

殺される事　に限られ
殺される為には
殺されるより先に　殺さなければならない
と知れてだけ恥じらいも足掛かりに為ろう
けれど何を殺せるだろう　せめて
何を傷付けられるだろう　それは
殺したくて殺せないもの　傷付けたくて傷付けられないもの（
殺せるものを幾ら殺しても傷付けられるものを幾ら傷付けても
斬られた水が水の儘なように　ものは変わらずそのものな儘で
何一つ殺されても傷付けられても居ない）なら　残るのは
殺される夢しか無く　なら
殺される夢を　殺せず　に殺せるだろうか
を問いようも無いなら　済し崩しにでも
殺される夢を兎も角も殺しに懸かるしか無い　それしか無い
で　殺せるか殺せないかなどは後の事で
仮に殺せなかったにしても　殺せなかった儘に殺されないなら
その殺されない事で　殺される夢を殺した事にも為りそうでは無いか
いや　けれどそれでは　恥じらいにまでは至れなくて（

血に染まる手を見てだけ恥じらいは与えられるのなら）
殺せも殺されもしなかった事への憎しみだけが残り続けよう　なら
な憎しみは何を憎むのか
殺せも傷付けも出来ない　殺される夢　の他に無い
つまりは
殺される夢は　私がそれを殺せなくて
殺される夢な儘に　私を殺さずに私を殺し続けるよう　そんな
憎むしか無い
殺される夢を　私は
甘やかすだけ甘やかし
何時でも殺せる産まれっ放しなような穢れの無い幼い姿な儘に
ずっと傍らに置けたなら
せめて憎しみな限りにも
それは何かの足掛かりには為ろうかと
恥じらえないのを辛くも恥じらう振りでも繰り返し
殺される夢を殺す夢ばかりを夢に見て殺される甘い夢に甘えている
二〇二四年七月三十一日

八月

女の胎が産み落とすのは何だろう　どうせ
脹れた穴など冷え冷えと空っぽな癖に
血の塊でも産むように股を拡げ　それとも
女の胎が丸ごと血の塊だったらどうだろう
あざとくも　穴が空っぽなのは見せ掛けで
血の塊を食い漁りたい獣らなどを騙せはしよう　それとも
血の塊に食らい付く獣らを穴に誘き寄せる為にこそ
空っぽな穴を態と奥まで覗かせて居ようか　にしろ
穴に向き合う獣らに出来るのは穴に入り込み　血の塊に噛み付いて
それを胎から引き摺り出し　砂塗れにする事位まで　きっと
その後には獣らは女の空っぽな穴へ堕ち込んで　穴より冷たくなって
血糊に固まる萎びた肉と砕けた骨にされ汚れた影かに吐き散らかされる

のならまだ増しで　な獣らなど始めから影も無かったかに独り
女はすっかり獣に成り替わって雄より荒ぶる雄叫びを低く籠もらせ
今さっき産み落としたのも忘れ血の塊を疾く貪り食らおうとするなら
それを救えるのは未だ女の胎の周りを漂い巡る獣らの魂ばかりで
けれど女は疾っくに先回りして　な魂の幾ら湧いて出回ろうと
次次に石塊に換えては　それらを戯れ遊ぶように並べて行こう
けれど其処まで身を堕としてこそ　獣らはその
魂を身の底から吐き尽くしたとばかりに
血の塊に居処を与えられるらしい
二〇二四年八月一日

血の塊が産み落とされるのでは無く
血の塊が産み落とすのでも無く　それが唯
小さな一つ星だったとしたらどうだろう
それともまだ星でさえ無い
幾つにも分かれて浮かぶ陽の光りに照らされ

切り裂かれた闇の間を縫って彷徨き回る
薄汚れた見掛けのせいで星と見紛われもする　いや
目を凝らせ
一つ星しか無いだろう　けれど
上っ面は血の塊に覆い尽くされ　その数を数えようとするのは
血の塊を一つ残らず撫で斬りにしたくて
血の塊の上に独り切りで立つ　やはり
血の塊で　それともそれだけは　他の
血の塊を踏み付けに出来るだけの
骨と肉を備えてようか　に
腹の底から涌き起こるのが
怒りでも憎しみでも無いなら
血の塊が産み落とされるのでは無く
血の塊が産み落とすのでも無いのを証して
血の塊を撫で斬りにして行く為の冷えた心を
滾る血から守って居よう
二〇二四年八月二日

騒がしげに押し詰められ　溢れて
それは独り
何に随って居るのだろう
随って居るには違いないけれど独りでは唯その
独りにだけ随って居ると見えても仕舞う
けれどその
独りで居る為にも　それを
独りにする何かに随うしか無い（
独りで独りに随う事は出来ないし出来たところで　そんな
独りには何の拠り処も無く　忽ち風に吹き消されよう）なら
それは独り
それの随う何かに襲い掛かり
それを（の　それとは何か　を探しながら）斬り殺し続けるしか無い
それに随う　とは取り敢えずは
そうした事で　そうした事に内に
それはそれ独りの居処を見出せよう　けれど

見出せて居るだけでは
騒がしげに押し詰められ　溢れて
二〇二四年八月三日

風の向く向きにしか風は吹かない　いや
風の向きには見向きもしない風が
向きも無しに吹くのを確かに見たろう
ならもうその
風に呑み込まれ
風の底に堕ちて　逃げようにも逃げられる向きは無く
風の内に塞がれ　目を懲らそうが凝らすまいが目を撫で摩るのは
向きの無い風より先に向きを無くして佇む一つ限りな誰かの姿で
風など撥ね除け
光り輝くのなら　その姿の光り輝かずに光り輝くのを見たろうか
その姿目掛けて　一息に走り寄るなら直ぐにも出来よう
しかし殺す為にか殺す為で無いなら何の為にか　それを

分からない事に　恥じるしか無いなら　その
分からない奴の　頭を割り胸を裂き腹を割き　その開かれた身で
光り輝かずに光り輝く姿を包み取り愛おしみ
愛おしみ尽くすなら殺すより確かに繋がれる　その
繋がり合う姿を一つに整えなければならない
二〇二四年八月四日

愛おしむのとは違う事を
愛おしむ程に違いが分かる　のを通り過ぎて
愛おしむのと違う程に　違いなど取るに足らないさと知れる儘に
それと違う事へは思い至れないのを恥じるしか無いのなら先ずは　そっと
愛おしむのを擦り抜けて　唯恥じる深みに沈み込むように　身は
その身がその身を通り抜け抜ける為の細長い穴かに身を連れ去ろうか
にも
な身など疾っくに溶けて　それとも激しく溢れる水の流れに溺れ
いや　な水に欺かれるな　恥じらいを水で押し流したいだけの事

嵩が増すだけ増せば水は　自ずと引いて辺りはすっかり乾き果て
愛おしむのとは違う事を　空から降り懸かって来たかに授けられ
それを（とは何を？
などと言う問いは　問うより先に振り棄て）
振り棄てるなら身ごと消えて行くしか無いかなと肩でも竦めれば
な肩なら梃子から振り回せようかに見晴らされる明るみを抜ける
身一つは確かに　何処までも死に果せたりせずに死に続ける儘に
愛おしむのとは違う事を
それがそれから身を躱して已まないのを
この身に匿われなければならない事と諦めて眺める　そんな
苦しいようでも苦しむのとはまるで違う事に塗れる　かに
身に澱む恥じらいに　心を尽くそうなら
愛おしむのとは違う事が　何処までも匿われて絶えないのを
淡くも身に染み入らせる　そんな慰めには出来ようか
二〇二四年八月五日　果（おお）せ

落ち窪む筈なんて無いのに落ち窪むなら
滑り堕ちるのは常に南から　それとも唯
滑り堕ちるなら常に南をしか向けないからか
唾の一滴　吐息の一欠片すら吐きたくないらしい女は
口を緊く結んで　それとも唯
口の使い方など忘れ果てたか
昼と夜の綯い交ぜられた眺めごと南へ滑り堕ち頽れる
その速さに丸まる背を圧し遣りながら　それでもまだ
何に抗い足掻いては暴れたり震えたりするのか　もう
な姿の入り込める隙など何処にも無いと見えてように　けれど
な姿を撥ね除けようとする動きもまた見当たらなくて　な儘に
終わりようも無く　終わりようも無いのに怯えるように　けれど
怯えるなんて嘘で　その
嘘で欺ける限りを欺こうと
何一つ欺いたり出来ない振りで
知らず開かれて　もう閉じようも無い口から
喉の奥に匿われて　時を掛けて醸されたかな
粘粘とした咳が　音も無く色も無く垂れ流され

南より向こうに　そっと男の耳の隠されたのを見たように
尖って光り輝いて行く　その
光りをきっと欲しかったんだ　けれど
誰が？　南より向こうに
の向こうになんて誰も居なくて南は
南なんだけどな
二〇二四年八月六日

南の更に奥の低いなら低過ぎよう辺りへ　その
低さを抜かり無く纏うかに　堕ちるように巡るように　溶け
掻き回されるばかりならもう終わって居るに違いなくに　も
掻き回されるのはきっと昨日の夢の細細とざらつく欠片かで　な
ざらつきなんて直に洗い流されるのは常の事　と　その痕に
厚い胸をすっかり切り開かせ肉ごと裏返させた女の屍を象った
かな微かな匂いでもせめて嗅ぎ取りたい　な
薄っすらとした望みが重みを増すだけ増して　その

重みを受け取れる何も有り得ないなら重みは
真下へ　更に真下とも知れない真下の奥へか
麗らかな幼児の笑みが磨かれるように尖って刺さって　それで
忘れられるなら忘れられようけれど　そうして何が忘れられるのか
を女の屍にも劣ろうにさっぱり思い出せないようでは
折りを見付けては遣り直すしか無いにしろ　何時何の
折りが今更に残されてようか　南ごと行き過ぎて仕舞ったようでは
なら
せめて女の屍（その口で死んだと言い張り　喚くのを已めないなら
それは屍なのだろう）を
誰かの夢へ流し込ませ　その
細細とざらつく欠片かへ溶かし搔き回し　それで
洗い流されたりなんてしない　夢の果てへまで尖って刺さって重い
ざらつきが
何処へ　斑かに浮き上がって行くかを確と見届けようと目を凝らす
な目が　麗らかな幼児の笑みが磨かれるようにでも磨かれるのなら
孰れは　女が道連れにした筈の素速い動きが取り柄の小さな生き物
の姿の　せめて尾っぽかの逃げて隠れ回る様なら見付けられように

二〇二四年八月七日　細細（こまごま）　屍（かばね）　幼児（おさなご）

女が女と名指され
男は男を奪われる　（で慌てて　なら
男が男と名指され
女は…）　など言い継ごうにも
遅過ぎる　その何時までも遅れは取り戻せない
遅過ぎる中で
男を奪われた空っぽな頭に空っぽとは異なる
粘着く色の乾いた重みでも詰め込もうと
走り回る　そうしていれば
男を取り戻せる　とでも思い込むしか無くて
で無いとしたら　それとも
思い込みなど虚しいと分かったなら　そのどうにも為らない
空っぽを　同じ空っぽな何処かへとも
せめて移し換えようと試みて　それも出来ないなら換わりに

変えようの無い頭では無い　胸でも腹でも手足でも
引き裂くなり切り刻むなりして　きっと
浄められるかに飛び散るかしてよう　血と肉と骨に
空っぽな頭を白白と浮かすように紛らせて
何時までも遅過ぎる中の何処かに
男を奪われた男の姿を　隠そうとする
それも出来ないなら
女を女と名指した者に化けた積もりでその名指しを取り消し
転げ回るしか無い男が乱したこの世の狭さを直せないものか
な萎えた望みでも追うにしろ
な望みに男の確かな徴だけは忘れず奮い立たせて進むのなら
女より遅過ぎるのも　何時か一つの時へ麗らかに霞むかして
遅くも早くも無い身一つを得られそうでも　やはり
空っぽな頭は空っぽな儘で　その空っぽが
身を粉粉に飛び散らせて仕舞うのは　それが
男の徴のせいと分かって居ようと　どうにも為らないせいで
やむなく
女が女と名指され

二〇二四年八月八日

名指された悉くを毀し尽くしたところで
名指した者の微笑みは少しも疵付かない　ならその
微笑みだけはこの世の外に有ろうか　などと昂ぶり
うっかり問いたくなるのが既に罠で　けれど　その
罠に嵌まるしか無いようなら嵌まろうと努め　いや
けれどそれでは　罠さえ取り落とすだけの事なのに
取り落とされ傷み汚れるばかりな罠に追い縋るのは
な罠よりずっと恐ろしい微笑みから逃れたいからで
微笑むからは微かに開く唇で　その奥に覗かされる
唯真上を向いて冷たく固まる（その真上とは
名指された悉くを毀し尽くして呆ける身の足下か）
微笑みを恐れず拒み名指されない向きへ据えられる
目
で無いとしたら　な

目さえ溶かして掻き回す　その奥の奥に覗かされる
名指される悉くを一つ限りに愛おしむのなら毀されようも無く
小さな諍いが諍いを喜ぶ儘に戯れ絡むかに広広と剥き出される
襞
の姿に溺れ失せようにも　やはり動かない微笑みの下に浮かび
明明と　襞の隅の隅まで疲れ知らずに泳ぎ回らされるようでは
二〇二四年八月九日

死ぬと定まって仕舞えば
女の呻きは悉く嘘だから
疾っくに女は消え失せてら
喘ぎの確かな嘘の底から
嘘より嘘が貫きたいのは
な捩れに指を沿わせれば
な捩れと硬さは啀み合い
きっと喉の奥辺りだろう

女は何処へでも向かって行ける
と独りで煽ろうとも虚しいのは
女で無い者はもっと消え失せては
嘘で無いなら嘘より嘘を見据え
形だけは閉じた唇の微かな捩れ　にしろ
唇を内から衝く縺れる舌の硬さ　それとも
舌は憤り閉じた唇の奥で藻掻く　かとも
肉が静かに掘られる音が響いて

形など偽りで常に開いて
肉の響かす音を水に換え
唇がその交わりに凍って
青黒く唇はもう笑う形で
思う様開かれ捩れ尖って
二〇二四年八月十日

向かって行ける暗みを呑もうと　震える
水と死ぬとを流し交わらせよう　とも
身は果てなく冷えて行くようで　に
死ぬに慣れ親しむ偽りを喜んで　弄んで
死ぬのと違う夢でも吸うらしい

切れ切れにされるしか無くに切れ切れにされて転げ犇めくなら　身
それら一つ一つが元から　その一つ一つな儘に
切れ切れになどされる筈も無く一つ一つな姿を
誇り翳す　かに艶めきを搾り散らしては
誇り煌めく争いにも見えて馴れ合うなら　な
馴れ合いに相応しい風さえ呼び招こう　その
重い風の圧し尖らせる硬さが肉に彫り刻んだ
平らかに倒れようとしながら倒れもせず少しも平らかでも無い
彩りの綾の動きを　襞の前で行き止まるように眺め凝らす内に

次に必ずその綾の動きから身を擡げ現れよう
脹れる水が水独りで水の迷いを水の底に屈み敷いては脹れ直る
一つ一つの元からよりも古い形の賑賑しい見せ掛けの訪れかな　で
水の迷いは　重い風を厭い避けて濡らされ下るしか無さそうな
切れ切れのそれぞれ異なる狭い空を見上げるように数を殖やす
な事など知らぬげなら　ゆるりと一つ限りに
噴き注がれ爆ぜる響きなら響きの（必ずそれは音とは異なり　その
異なりが響きを蝕み尽くしても響きとは　何の響きだろう）
急く程に動きを止めて
切れ切れに一つ一つな姿の犇めきを　固め静まらせようとする
明るみに届かせるにはどうしよう
身を

二〇二四年八月十一日

昼への拘り　眠りは拒まれ
星なら必ず　上辺限りに切り刻まれ

その数え切れない数まで切り刻まれてそうな
傷口から噴く血のような　光りに犯され已まない夜を
乞い焦がれ　その
乞い焦がれる姿そっくりに象られて光りの塵の舞うかに脹らむ
身
は　夜そっくりなら明る過ぎる夜に紛れて見失われる　けれど
顔
は　何の夜も踏み躙る昼その儘に輝いて　いや
全くその通りに　夜など始めから影も無かった
拒まれた眠りの　残り滓が夜だったかと見通す　けれど
目
は　堕ちて一つ星の上辺を這い転げ　二つの眺めに裂かれ
一つ目の眺めは　未だ夜かに血を噴く傷口で覆い尽くされ
二つ目の眺めは　ひたすらな昼の光りにだけ溶けて乱れて
柔らかな実りを　二つ目の眺めからだけ確と受け取りたい　けれど
な実りを貪ろうとして殻を砕いた中には　夜があざとくも
醜く暗く息を潜めて腐って行くのが覗くだけでは無いのか　それか
そんな夜の

血を噴く傷口の腐り爛れる匂いに駆り立てられたかったか　けれど
それは何処へ
そうして夜を駆け抜けるなら昼の眺めにか再び塗れるしか無かろう
に
身も　顔も　目も　互いを光りの前に据えて鞭打つように　けれど
それで何の実りを貪れよう　それとも互いが互いを貪り食うのなら
星
は　眠りも眠りから醒めるも無くに昼からも夜からも遠く距たって
影
一つか
二〇二四年八月十二日

光りに怯えるのか　音に怯えるのか　は
光りが何を覆うのか　光りの覆いを取り払わなければ分からない
音が何を隠すのか　音を削り落とさなければ分からない　いや
少しもそんな事では無く　抑も

光りと音とを見分け聞き分けられて居るか　いや
少しもそんな事でも無く　仮に
光りは音で音が光りにしろ　な事は
光りと音とに片を付けさせれば済む事で　なので
それを見分けるも聞き分けるも要らないなら
光りに怯えるのか　音に怯えるのかを
探ろうとするのも要らない事で　けれど
光りは音で音が光りにしろ　な
光りと音の他に何も無いのなら　そしてそれでも
何に怯えさせられて居るのかを探らずには居られないのなら
な光りでも音でもある光りと音に塗れて行くしか無いらしい
などと見通したかが徒で
光りと音は溶け合うか傷付け合うか失せ合うかして
光りでも音でも無くなり光りとも音とも違いながら
怯えさせられるしか無い眺めを満たし　溢れ
眺めの向こうを塞ぎ固めても更に向こうから
光りとも音とも違いながら
光りと音の他に無い眺めに重重しく　な

それを流し込んで来る　それ？
いや　それをそれと名指すお前は誰だ！　誰でも無いお前なら
それもそれでは無いのは明らかで　その
それはそれで無い、それで無いそれの　それと違う何かの流れ込みだけで
この眺めは出来て居るのなら　其処に
お前がお前で無い、お前で無いお前の　お前と違う何かを撒き散らそうと
何も起きないのなら　その何も起きない静けさにこそ
怯えさせられて居るに違いないけれど誰が？　な
誰が？と違えられる誰も追い着いて来ないのなら
誰が？と違う誰が？が自らに追い着き追い越して行くしか無かろうか
何も起きない静けさなど　ぶち抜いて
と其処で　前触れ無しに　この眺めを裏返し返すのは何？
とさえ問いたくて問えないばかりに
光りは音で音は光りでかに
光りは光りと違い音は音と違うのとも違うしか無いらしい
二〇二四年八月十三日　違（たが）

目には触れる　手も届こう　直ぐ其処に
終わりが終われないからは　噴き出して
失せた音に怯え　尽きない光りを楽しみ　それとも
失せる音など始めから終わってよう
尽きない光りなど始まりもせず終わってよう　それでも
目にだけは触れて仕舞う　手はもう切り棄てられたかで　その
目がまやかしとも直ぐに知れるなら　唯
終わりが終われないだけの姿が独り
艶めかしい寂しさを思う様練り纏い
うっとりとした佇まいに紛れるかに
終われない艶めかしさを撒き散らす
濡れて窒がりもして　な
自らの姿の失せようとする姿の後を絶つように　いや違う　却って
それで終わりを終われないとも疾っくに知れて　けれど
抑も終わりを終われないせいで全ては始まって　その
始まりのまやかしに絡め捕られるかに目が生え　それは
目にだけは触れられる事にはされて居るだけで　ひっそりと

そうだ　その
ひっそりと　だけで何もかもは収まる筈なのに
ひっそりと　そのものが
目にだけは触れて来て　乱れるだけ乱れに乱れ　ひっそりと独り
何もその　ひっそりと　には換えられない姿を　噴き上げ閉ざし
狂わせる
二〇二四年八月十四日

この星の眺めと向き合わなければならないのは　身は独り
この星に堕ちて傷一つ負わず立ち上がれたからで　それとも唯
目だけを
この星に堕としたろうか　それとも
この星が丸丸　その堕ちた
目で　ならばそれで
目を無くした身も　その堕ちた目の後を追うように慌てて
この星に堕ちるしか無く　その

無い目で
この星である己の目を見ている　いや
無い目で何を見られよう
己の目であるこの星が　己の目としての
この星の眺めを見て居る他に無いのなら
身は
身に比べて大きく脹れ過ぎた己の目の
上っ面を滑るようにでも駆け回るしか無くて　その
身の有様は
己の目であるこの星に見詰められるしか無いにしても
目は何処に堕ちて　その儘に星に成ったのだろう　その己である
目へと堕ちて拡がる眺めは何処から来たのだろう（だって
目がその目を見てもその目の目を見る様か形が見えるのがやっとで
目の外へは何の眺めも拡がりはしないのでは）　それとも
目は見る為でなく見られる為のものだったか
目を堕として無くした身に拠って目が見られるのだとしたら（だって
身の他に何も見当たらない）ひょっとして　そうして見られる事で
見られる目の眺めも　目を見る目の無い身を見返してようか　いや

きっと少しもそんな事では無く
見られる眺めが
星の姿をして（
それを目と見れば目と見えようが見えるだけで　目で無かろうと）
目一つが一つ切りの星として　目を堕として無くした
身を滑らせられる処に凝っとして浮かぶなら
目も身も見知れない処で
星一つが己を見て己に見られる内に窒がれてよう
けれど　そんな星へと　この
身はどうして堕ちて行けたのだろう　その先に堕ちたにしろ　な
身の目なら目は　どう遣ってこの星の眺めを見られて居ようか
と
星は　蕩かすようにもうっとりと自ら己の皮を剥ぎ
堕ちても浮かんでも居よう
に　一つ目の姿を恥ずかしげに晒すらしい　それは
見るとも見られるとも係わらない　唯
目なだけな目　は頽れ
目な眺めなだけな目な眺め

二〇二四年八月十五日

頭の上かを歩き回る　その
向こうから心に懸かって来る
涼しげにも活き活きと触れて
全てを許すように　まるで何でも静かに聞いて呉れるように呼び掛けて来る
のは
柔らかい手をして（それとも　手の他の身の何処も硬過ぎて
やっと触れられた手を　うっかり
柔らかいと思えただけかに）も　その
手は切れ味鋭く　触れて来る何もを引き裂くだけ
なんて事を誰に知れよう　知れたところで直ぐ様
その誰かの腕を捥がれた身は温かい暗がりの底で　そっと
偽りめいて美しげにも取り捌かれて行くだけなら
頭の上かを歩き回る　その
頭の置き処を少し換えてみようか　などと考えるより先に

心に懸かって来る向こうから　そう呼び掛けられたようで
と
醒めてはならない夢から醒めるように酷く萎びて厭わしい
身は　な身に似合いのごわごわと硬いものを纏わされるか
呼び掛けられたような声ならば声に囚われるか　にも
醒めてはならない夢ならその夢に引き戻され押し込められ
きっと巧く遣れたらしくに
頭の置き処は換えられたらしく　あの
同じ手に堅く守られたさも誇らしげな
取り捌かれた身への愛おしさが　愛おしいなら愈愈身供を細切れにして
ずっしり重くにも授けられたろうか
そう疑わずに唯黙ってさえ居られたら　それだけで
知りたい事は切れ味鋭く温かい暗がりの底からか　次次に
切り出される肉の塊の姿で　美しい限りに幾らでも並んで
それを掴んで搦めて嬲って味わい尽くせたなら　あの
同じ手は何処へも解き放てそうで
それをそう解き放った手も同じに
二〇二四年八月十六日

目の尻を追うように
目で待つ　疾っくに
目の縁に届いたかに　活き活きと戯れるように
頭の上を上から見下ろそうとして裏返る裏から
裏の上を見下ろし直すのは目に違いないと逸り　で負った
目の傷から弛弛と吐かれ腐って目の底に溜まる　かにもまだ
頭の上が頭の上だけ捩切られ棄てられて目の縁の側を揺蕩う　な
ぼやけた眺めを真下から見据えて目なら目なら　目には
慎ましい時は褪せ日日の激しさから剥げ落ちて　追われる夏は
目には
怠け癖が治らなくて過ぎた夏の底を浚うように　も新しく
浮き浮きと遊ぶ様を手慣れた眩しさで繰り出す　かとも
な新しさの新しい儘ではその新しさから弾かれ　居処を失い
却って目の裏にぐるりと硬く浸みて色を巡らせ　な色も疾っくに
失せたろう痕なら痕には夏の徴が犇めき満ちて

目には
どの夏とも違おうなら唯乞い焦がれるしか無い　ぼやけた眺めを
ぼやけた儘に目の裏を巡る色で狂い無く窒いで　あぁ　その
窒がる目に適うのは何時か何処かで叶えられた　頭の上など露知らない
目の置かれ処かとも
目の尻を追うように
目で待つ
二〇二四年八月十七日

音に渇く音が延び　行く行くは遠くへ昇るようでも
重く低くへ拡がる中を　その
音に渇いた音に渇いて　それとも
かのように渇きを癒やしたい喉の求めに応えるかに
何の匂いも拒む頭の上に穿たれる　光りを窒ぐ穴を
夏の日差しに抗って色も失せて咲く花かに受け入れ　そうだそれは
花なら音と言う音を激しく入り交じらせ光りは拒み　けれどそれは

偽りの身振りなら偽りがまた様様に音を混ぜ合わせ　それで愈愈
音に渇いた音に渇き窮まるしか無くにも拡がる音の　その何処までも
音にしか知れない潤いが　花を腐らせ溶かすように
渇いた喉に呑まれるのを待って敷き詰められる様に
怯むべきか奮い立つべきかを考え尽くすべきなのに
何に疲れ果てて仕舞ったろう　な疲れに取り憑かれ　な
血が汚れるように殖えて行く疲れを吐こう喉の奥の
煙る黴のような匂いが映し取る穴に窒がれた光りに
幾らかは咲く花のようで何処かしら毟られた花かに
絡まり転げる身二つは幾ら交わり盛っても足らずに　ならばせめて
互いの喉の奥を拡げ合い覗き曝して音に渇く音への
渇きを向き合う身を裂く反り返る刃の形で抜き取り
音にしか知れない潤いへ立ち向かって行くしかない　それぞれに独りで
いや　偽り繕う程に独りこそ偽りの身振りと知れて　それぞれに
此処が　堕ちて此処に居る星に留まれる為の此処と　知れるなら
これよりは何処へも堕ちられない
けれどそれは　交わり盛る身二つだからで
一人一人ならそれぞれに何処へとも堕ちられようか　な思いこそが

身を躙り倒して頑なに交わり続けるしか無くさせる　と
それぞれに心付く心なら　その儘に疾っくに互いを　違え
花を咲かす為の色の失せるなら背き合うしか無くに　それでもそれは
音に渇く音に渇く喉の求めに潤いで応えられようか
二〇二四年八月十八日　盛（さか）る　刃（やいば）　違（たが）え

色だけを見るなら　その
見る内に知り尽くされて居る　それを
色と受け容れ　にそれを
容れる器を探す　けれどきっと　その
器が探して居よう　色に見える内の　それを
で
器と色とは　ずっと擦れ違うしか無い　からこそ
色だけを見るなら　それは
色を見る内に知り尽くされる儘に　酷く静かなせいで
身を捩り心を振り絞り　絞り抜いた心を色に移そうとして

映し損なって　な
映し損ないの内に　それを
見せようと　身を捩り直して已まない
で
な姿の　掌にも乗る小ささはきっと　それを
容れる器を　ずっと拒み続け
それに相応しい香りの燻らされる　小さな
静かさを求めて已まない
で
色は　もう
頑なに暗がりの奥に自らを塗り込め　それと
離れて居るとだけ知れる静かさに
呑まれたろうか　なら色でも無く
透き通った器の何処までも拡げられて行くかに
消え果てる　その
消え果てる内に　それ限りの器を得て籠もるように
暗がりを染め抜く確かな色を　ささやかに逆巻かせよう
二〇二四年八月十九日

色　それとも
色の失せる色
で終わるしか無い　図らずも
な終わりに自らは辿り着けず
なそれを　何処か（と言っても何処だろうと此処だが）に探しても
探り当てられるのは　それが有るか無いか有るとも無いとも違うか
な暗がりに迷い込むだけなら
知らず色を待つ構えに身を据えさせられて
な喩えに縋って安らう心を置き去りにして
な身や心にすれば贋の　贋な程に鮮やかに
何処だろうが此処に隈無く満ちて湧き出す
色　それとも色では無いのか重そうに汚れ　失せようも無くやはり
色なら色に囲まれ　まるで
そう囲まれては　独り贋の姿で抛り出され
色の失せる色での終わりに現れる色へ向け　いや　抛り出されては

な先走りは許されず独り贋ならそれ限りに
贋が贋で無くなり何も無くなる痕を埋める
汚れた色に満ちた明る過ぎる明るみに眩む
色　それとも
色の失せる色
で終わるしか無い終わりなら　探り当てたでも無く確と手に取れる
それ
に鮮やかな暗みを塗し　身も心も色から剥ぐように立ち去れようか
何処だろうと此処でだけは無い何処かの暗がりに埋もれたくも無く
埋もれようと焦がれ　何処かの暗がりに色を煌めかせたい心に縋り
二〇二四年八月二十日

紛れも無い色一つ限りを見たのなら
他の色は悉く暗みに紛れるしか無い　その
色と暗みの紛れ合って混ざり合って
絶てない時を転げて脹れて痩せては汚れては濯がれる

な処で　黙って狼狽えながらに独り切りな中でもまた
一つ限りな紛れも無い色が確かに硬く焼けて熱くにも
仄柔らかく暈けて滲んで嘘のように冷たく納まり震え
絶たれた時が絶えず襲い掛かって来るのに怯え続けて
絶たれた時と絶てない時の綴じ目を探して当ても無く　けれど
な綴じ目は必ず隠されてだけ綴じ目なのも明らかなら　その
隠され続け疲れ果てて弱り尽きても尽きない一つ限りの
色を抜け時の綴じ目を破って絶てない時の欺きを曝き　で
色は　色な儘に
更に硬く晒され閉じて何処へ舞い散らされて行こうか　その
何処も無く当ても無い程に絶たれた時だけが熱過ぎて
暈けも滲みも冷たく納まりもせず手も触れられず甦る
二〇二四年八月二十一日

疵一つ無い
焼けた色だけが　そっと

時を焼いて切り刻みさえして　そっとよりそっとに
飛び散らされた切れ切れの望みを接ぐように磨いて　な
望みが声に換わろうとするなら透かさず黙らせようと
疾っくに焼かれて痕も無い腹でも掻き回すように　酷く遠回りに
色を疵そのものに擬え（擬えるまでも無く
色こそ疵そのものでは　その企み通りに事はすんなり運び）
声は疵そのものな色に食い散らかされ
焼かれる程に錆びて鏽でも掛ければ艶めかしく象られよう姿へと
拉がれ　尚も低く這い回るようには湧いて出られようと
色が接ごうとする望みへは繋がれずに…　けれど却って
時を焼いて切り刻みさえ出来た
焼けた色だけが
疵そのものの
何もそれを容れられない程にも大きな已まない歌声かを響かせ出そう
な声の大き過ぎるせいで　その
色は　何処からも締め出され締め出される程に
酷く控えめに　手に触れられるかをこっそり試して欲しくも　な事に
びくびくと恥じらい震え　ずっと震け続けたい望みを乞い求める姿に

凭り掛かるように　巻き取られるように

疵一つ無い

二〇二四年八月二十二日

腕を曲げると伸ばすとの間に　角張っては潰れながらに覗く
白白と暗い奥行きの緩やかに行き止まる古い夏の日の眺めの
冷え冷えと穏やかに甦るのを　吐きたくても
どうやら全くの空きっ腹では
寒けで汚れて見馴れない白い
嵐の過ぎるような息を吐いて　な
嵐でも呼び戻そうと声を上げ
却ってその声さえ聞こえない　果ても無い
静かさに打ち倒されるようで
空は白過ぎ空の下は黒過ぎて
白と黒で閉ざされた眺めでは
幾ら声を上げても虚しいのは

声ならず白でも黒でも無い
望めるのなら幼い骨の焼かれたような柔らかそうに仄かな
桜色ででも無ければならない　筈が
透けるでさえ無く唯拉がれる
いや
白と黒から目を逸らすんだ！　それで己の声は
自ずと声の色も滲ませように　とでも
白とも黒とも係わらず微かな
風の戦ぎに言い含められたか　成る程その
風の戦ぎには微かな色が薫り　それは
其処かしこをのたくり勇み這いずり回ろうけれど　その
風の戦ぎが隙無く静かさを統べる眺めの何処にも　抑も
声の居処も無いようでは色など望みようも無くて　にも
空にも空の下にも目も呉れず
静かさを破って架け渡される
橋のような形の色の響きになら耳を澄ませそうで　な
耳は古い夏の日の眺めを果てても無く切り裂こうと　尖って
うずうずしてそうで

二〇二四年八月二十三日

耳が無くても

耳が無くても聞き取れる悉くは　その有る通りに
正しく聞き取れて居なければならない　それとも
聞き取れる事とは違う事が無い耳を通して　悉く
無い耳へ傾れ込み確かな姿を象っていると知れる　それらはまるで
この世の外から戻れた喜びを鳴り響かせるように　そのせいで益益
この世の外など唯色と形が互いを傷付け合っては
傷付き易くなる色と形との混じり合いで塞がって
この世の外などその更に外へ退けられよう事を知らせて来るにしろ
この世の外の外を受け止める仰向けに寝かされた
片耳が　躊躇うように
尖って奮い立って居なければならないもう片耳の狭い奥を覗き込み
覗き込めたと思い込み
覗き覗かれて一揃いの

耳に何が出来るのかを
見よう見ようとして見ないで居るのなら耳は耳と違う事に換えられ
この世の外の外にばかり覆い被さって薄れて行く　その
この世の外の外はこの世の外の外とは違う事に換わって換わる事と
違う事に換わったと知らせる確かな色で
無い耳を塞ぐなら塞ぐ程に　その
色に窒がれる事と違う事が　無い耳を探す音へ
溶け出そう溶け出そうとして溶けないで居るのなら
無い耳はそっくり　ぴたりと無い音に違いなく
二〇二四年八月二十四日

耳など有るから音など聞かなければならないのは
疾っくに分かって居るにしろ分かり慣れないのは
音と音で無くても必ず聞かなければならない事に
囚われて居る筈と思う事に囚われて居るからでも　な
囚われなど直に囚われで無くなるのも分かるなら　その

分かるのにも分かり慣れないのは何のせいなのか　を
少しずつ褪せて掠れて行く小さな傷を眺めるかに
そうして眺め過ぎれば蹌踉けながらにも追い掛け　そうして常に
蹌踉けて蹌踉け慣れないのは慣れないのに慣れないから　そうか
見付けたぞ！　見付けたぞ！慣れない　それを　に
それに慣れないそれに慣れないのに慣れない儘に
慣れないが慣れないを呼ぶ慣れないに慣れないで　な
慣れないの馴れ合いにさえ慣れない慣れないなら　どうして
慣れないに慣れないのと違う処へ向かわないのか　独りで
それとも
な独りにさえ慣れないのなら戻れば良いのでは無いか　で何処へ？　その
で何処へ？　を見付けたぞ！　などと言う声を耳など有るから聞けなくて
耳にも耳など有るから聞かなければならない音にも　慣れない儘で
二〇二四年八月二十五日

音の味に渇く耳なのは

味わうより先ず音を耳は飲み下せないからで
けれど
と論う
構えの耳は
今更に論う構えとはそれまで何をしていたか
を
硬く冷たくなった腕の絡み付いて来るように
問うのは
腕より冷たい唇の　切り取られたらしい口でな
口なら間違いなくずっと黙り込む儘だろうに
耳がそんな黙り込みを聞き取れないのを耳は
物欲しげに耳を産み出しては引き裂くように
いや違う
産み出され引き裂かれ已まないのは音限りで
けれど
音と酷く距たって身を捩らすばかりな耳では
いや違う
誰が耳などと言い出したのだろう喩えるなら

音の見る夢の中で音より向こうに走り込んで
途切れず延びるように途切れて転げるように
暗がりに疾く鬟を丸め掛けた形を抛り投げて
少しでも音に触れまいと怯えて震えて濡れる　な
物なら物が　耳なら耳だろうに
いや違う　と言うか
いや違うなどと言う言い方がもう違うに違いなく
唯
音が鳴って鳴る儘に溢れて溢れる儘に濃やかに粘粘と鬟に纏い付く　な
鬟の切り取れば切り取る程に何処までも捻れて捩れて濡れて震えて
怯える姿を
殺されたいかに曝け出し更に疾っくに
殺された姿を　人の屍の形に夢に見て　な夢が
聞けない音に掻かれ剥がされて行こう
二〇二四年八月二十六日　論（あげつら）う

音が消える音が溢れて
消える音が消えるなら
消えると溢れるは一重を重ね（損ね）
重なりを幾重にも侵す穴を貫く音が溢れる音が消えて　その
消える程に消える音が消えて
それで溢れるとしたら　もう
溢れるは消える　な
溢れるでも消えるでも無さそうなら　きっと
溢れると消える　は
互いの影に回り込み互いの影の裏を啜り合い
食い尽くそうとする姿の重なる一重を
真ん中から裂いて綴じて黙り込む　の
黙り込むのは何かを　その
もう二重で有るしか無い向こうに見通す穴
なら穴は自ずと　穴限りに穴の奥の奥まで
穴を拡げ　窒ぎ
黙り込む自らを誇らかにも痛痛しげに眺め　な
唯穴の眺めな眺めに呑み込まれるようにも

眺めを丸ごと呑み込むようにも　それとも
呑み込むと呑み込まれるがぴたりと一重で　な
一重が一重に拠って一重な限りを黙り込ませる　にしろ
そうして果てもなく黙り込む程に　其処は
窒がれた中に他に何も無い静かな穴　一つで　そうにしろ
穴一つが見せ掛けに過ぎないのは穴一つに因って証され
それはそれを黙り込む事に依ってだけそれで有り続ける
それをそれは　うっとり蕩けるように眺めては飽きない
二〇二四年八月二十七日

眺めが眺めを眺める　で全て
なそれは
そうして窒がるのか　それとも
窒がりを裏返したように拡がり果てるのか　な事で
拡がると窒がるとは　違う事なのか
をそれが

考えようと考えまいと
眺めが眺めを眺める　で全て
の他には何も起こらない　けれど
なそれは　必ず何かを随えて居る
全ての外に有って全てを全てと見て取って　その全てが
眺めが眺めを眺める　とも見て取れる何か
仮にその何かを　犬　と名指してみようか
すると直ぐにも　犬　と名指された何かは
何処にでも居る　犬　そっくりな姿で
眺めが眺めを眺める　の外を駆け回る　けれど何の為に？
も何も
名指されたなら　犬　は産まれっ放しかに駆け回るばかりで
けれどそうして　犬　は
眺めが眺めを眺める　で全て　なのも産まれっ放しと見定め　に
見定められた眺めが　犬の屍に成り変わって行くのを喜び勇んで
拡がると窒がるとを　己の屍を何処まで辱められるかを試すかに
拡がると窒がるとの　間を転げ回って
眺めが眺めを眺める　の外に犬と名指されたなら犬の屍のように

厭い棄てられた何か　を弄ぶだけ弄んでは　犬の屍と
同じに犯して穢せば
眺めが眺めを眺める　で全て
なそれは
拡がるでも窒がるでも無くなり
眺めが眺めを眺めるでも無くなって　唯
転がされた犬の屍が残す匂いを嗅ごうと挑むかに
屍の己を転げ回らせる犬と名指された姿にそっくりで
二〇二四年八月二十八日

喉は常に震え続けたい　その
喉の周りの肉の震えと震えの隙間に射す光りが
喉を柔らかく取り囲み　それで隙無く
窒がれた喉は　震えたい儘に暗く震え続けられ　な
喉ではもう震え已んでも変わらない程に幾度も
息絶えて来たか　それは

息絶えずに来たも同じに
喉の周りの肉より外まで
広広と見渡せようその果てまでを
其処に傾れ込むものはどれもが幾度も息絶えて来たかに
静まり返らせ
食い千切られた喉（けれど
それは血の色も肉の筋も見せない白く丸く脹れた形）を
咥える犬が　何処を彷徨こうと再び同じ処へは戻らずに
咥えたそれを抛り棄てられる汚い穴でも探し回るように
静けさだけで拵えられた眺めに放たれれば　それは必ず
真下へ見下ろされ　撥ね返すように真上へ
食い千切られた喉の痕の窪みが見上げよう
食い千切られた空の痕の窪み　いや
空は要らない　唯
食い千切られた痕の窪み　其処を
隙無く
幾度息絶えて来ようと震え直る喉から
途切れない肉のように吐かれて噴き上がる声で窒ぎたい

と乞うのは　それとも
と乞うように誘うのは　きっと
要らない空に窒がれ溢れそうでも何処にも溢れられない
光りなら光りで　それが
穢れる限りに穢れたなら浄められ
浄められる限りに浄められたなら喉をゆっくり締め付け
醜い限りに絞め殺した汚れた屍を甘く優しく包み込もう
二〇二四年八月二十九日　誘（いざな）う

拒まれた声が人の形そっくりにそっと寝かされ
犬の屍ならもっと形を整えてように　それとも
人にしろ犬にしろ形に取り憑かれて居るのなら
そうしてそれらの形は数えられるだけ数を増し
隙無く繋がり並び形が形を犯す眺めが拡がって
で　其処には何の形も表されず土に還るように
土が盛られ掘られ形は整えられ懸けては崩され

それとも
いや違う

声に戻れ　どれも形は拒まれた声の形をした儘に
居処を失ったかな形で眺めを暗く埋め尽くして　声の
まだ拒まれる前の形を乞い焦がれるように震え　どれも
その蹲るか腹這う形を土に潜り込ませるようで　けれど
な事ではそれらの形は全く蠢く土塊と変わらず　その
土塊共の啀み合う形の能く見れば向きは同じに　声の
真っ先に拒まれた形の一つ限りの切っ先を探す　いやそれも違う
もっと能く見ろ　形は…
いや形では無い　形など疾っくに見切って居なければならなかった
そう出来ずに酷く形からさえ遅れを取って居るぞ
そうして　形を見切るなら
拒まれた声だけが形など掻き消し
形の痕も突っ切って　な程にそれは
そっくり人の屍の形そのもので　確かに屍の
形では黙って死んで居るなど
耐え難い　な形に為らない
形を蠢かせて　始めに拒まれた
声の主の形なら

　　　　　　　形に　少しでも
近付こうとする形を　繰り返し消しては消しては
　消えて行く形を眺める
　　　　形の　何と見事に全く
　　　唯　形でしか無い姿に際立つ
声を振り絞る口の形の　その
　尖るばかりな形なら
　　　　な形が鳴り響かせる声は
　　　　　形に為る筈も無く
　　　何にも拒まれようも無いのは…

二〇二四年八月三十日

全く「アウシュヴィッツの後に詩を書く事は野蛮である」は一篇の美しいだけの詩で、この詩を引いて何かを言おうとする者は誰も、あどけなくも、この詩の美しさに酔い痴れている。この詩を書いた詩人も、あざとくも、その内の一人だろう。は、それとして、人が人を殺し人に殺される中でしか詩は生まれな

い。それを分かって、この詩人に果たしてこの詩が書けたのだろうか。この世を詩で満たしたかったら、至る処で人を殺し人が殺され続ければ良い。赦しが詩を殺しに来るかも知れない。詩を殺せるのは赦しだけかも知れない振りで。けれど詩は殺されない。赦しなど超えて常に詩は至る処で激しく乞われ求められるので。何の詩の言葉も、詩には触れられずに。詩の心は、詩へまでは届かずに。だとしたら、詩の心や言葉にとって詩は余所事でしか無い。それどころか人を殺し人に殺される者達にとってさえ、彼らが詩を見出すならどれ程身近にであろうと、その詩は余所事だろう。こうして詩は、誰にも手出し出来ず、唯眺められる儘に、其処に生まれなければならず、生まれたからは生き延びるしか無い。そんな詩が例えば躍るように見えるなら、その見える儘をなぞろうと詩の心も言葉も躍る。その為には、必ず詩から隔たって。分かり切った事だ。で？だから何なのか。

二〇二四年八月三十一日

九月

脅す　は　脅され　な
脅され　は　己の眼差しを切り棄てなければ
脅す　へは　甦れない
と　遥かを眼差す先に　眼差される眼差しの
躍るかに踏み付けられ　踏み越えられるなら
切り棄てて果せた眼差しを差し戻せないのでは
誰を殺すかも見分けられないで足は藪を巡る
乾いた風を孕む藪の縁を掠めて躍る眼差しの
脅す脅され　に接がれ弛む藪の薫りの滲みた
風の色も抜ける勢いで　眼差される眼差しは
脅す脅され　を空回りさせるしか無かろうか
焦りさえ確と足取りに刻めば誰を殺すのかも
知れようか知れまいと藪の薫りを研ぐように
ぬるりと止めた乾いた風の暗い色も明るませ
差し戻せない眼差しの行方は知れよう兆しを
探せ

その
怪しげに

な
自ずと

二〇二四年九月一日

ふっくらと柔らかく　始まりも知れない
なら始まっても居ないかも知れない時が
削がれるなら　その忘れられる換わりに
その時の縁に結わえられた
予め散らばらされた幼児の肉なら声の
声なら肉は疾っくに失せたかに彩られ　その
鮮やか過ぎる形の　光りの闇も抜ける偏りの　もう
高が極まる痛みの続くだけに過ぎなくなった　な
夢に近過ぎるせいかに恐れさえ窄んで盛って
何故震え細まる声は絶えないのかをふと訝る　疾っくに失せてよう
小声を紡いだようにぐるりと巡って時に至る
伸びやかに果ても無い　果ても無いなら果ては見透かされ行き泥み
暗く散らばらされて煌めく幼児の時を乞い果てないなら時は粘って
嘘でも嘘な程に躍るように嘘と言う嘘を刺し殺して甦らせるように

始まっても居ないかも知れない馴れ過ぎて馴れない夢を閉ざそうと
干涸らびた憂いを差し出すように歌を態と潰し砕いた歌を歌おうか　に
何処へも消えて行けない身を探す振りを煩い悩む声なら肉に滲みて
削がれた時が忘れ直される光りの闇に開けられた憂いの溜まり場を
探す
二〇二四年九月二日

静かさを踏み固めてさえ目に障る眺めの
薄汚く見晴るかされる至る処に塵と
散らばり消された痕さえ失せた
陰のような
声
なら滲み出る筈もないのに　声
の賑わいは掻き消す程に喧しく　そんな
声なら踏み躙れ　と煽り嗾ける　声
など目を瞠る程に聞き取れずに　なのでこそ

必ず目に障り甦る賑わいの陰の　手に触れられない静かさを
直ぐにも引き裂かなければならないし　その
裂け目を更に深く裂いて行かなければならない
な事には終わりが無いように　終わりの無い事を誇るように
けれど幾らそうしたところで　声は陰のようなら節節を弛め
裂け目の緊い明るみを仄柔らかくも埋めて行こうか　けれど
それこそ楽しい限りな奢りで　限りなく声を　声の穢れごと
消し続けられるなら何処でも　それに飢えて已まないように
殺しに飢えて已まないように　目に障る声を陰でさえ無くし
手に触れられないなら　その静かさごと砕き潰して行けよう　そしてその
危うさも知れるなら危うさを擦り抜ける新しい裂け目の更に緊い明るみを
探せ
二〇二四年九月三日

声の声を　聞けない　声なら声が
ごろりと一つ転がって居るとしよう　全く

少しもそんな事では無いと侮って
侮るのだけは常に間違いなく　な
侮りなど凡そ届かない遠くへまで　撒き散らされた
幼児の息の数え切れない欠片が一息に声の
ごろりと一つ転がる内へ滝が落ちるように流れ込むなら
行きずりに幼児の父を騙る　それとも
それは騙る振りで父の血を継ぐ幼児の
首の取れて無い脹れる身を　それとも
首だけが風に煽られ独楽のように回る　いや
どれもそんな事では無いと嘲って
嘲る術だけは常に身に付けて　な
嘲りなど凡そ弾き消す低くへまで　汚され貶められ
剥かれた喉の奥を晒すように吐かれた声は
尚も　嫌でも
声が響かせる侮りと嘲りを深い傷のように
裂いて隠して裏返す　な
傷の傷に　触れない　父なら父は
自ずと身振り一つに身を預け切って　後は

裏返された侮りと嘲りを殺す風を
探す
二〇二四年九月四日

堅く継がれる命は数を殖やし躍る
選ばれた一つの声にだけ集い躍る　な
明るみに満ちる儘に明明と象られる確かな隠れ処で
影一つ無く　いや違う
影一つ無い　筈だった　その
影一つの今や抜け殻かの奥へ奥へ
疾っくに失われた筈の獣の咆える声をなぞる声が吸い込まれ　それとも
数知れない影から吐き出される
幼児の掌を陽に翳して映える透き通った色を呑み込もうと焦がれる儘に
影を斬り裂き　斬り裂かれた
影に乗って躍り続け
能く能く影一つ無い隠れ処は目に焼き付けられたらしくに

影の上で殺し続けなければならなくて
堅く継がれる命の数と
殺され続ける命の数は　数える程にぴたりと
光りと影は一つなように同じで無ければならなくて
数えられた数だけを消す　褒め称えるに値する光りだけを
探せ
二〇二四年九月五日

声を叫び尽くし知らず弛みっ放しの喉の奥に
振り仰ぎ尽くされて色を失った空の青が堕ち
刺さり
面を上げたなら面を剥がされた痕に顔を象り　その
象られた面を脱ぐと被るを差し迫るかに戯れ
ささやかな笑いを軽軽と舞わせる声とは違う
空の色を失った奥から吐かれ垂れる草の匂い
なら直ぐに土の匂いに嗅ぎ直される面は曇り

悉くが色褪せた中にそれだけが黒い長い舌を
垂らす犬の低過ぎる唸り声を浴びて堅く重く
圧し被さって来るなら　どけ！　と言い付け
声とは異なる　どけ！　が犇めき立ち塞がり
色を失った空に再び濃い青を昇らせなければ
血の匂いが走る風に撥ね除けられ空に刺さり
血走る青の何処を彷徨うも無く土に浸み入り
殺される度に土の下より暗い虚ろな顔が忽ち
象られ　血走る青に染まる風を纏う為の色を
探す

二〇二四年九月六日　面（おもて）

空の下に囚われた誰にも
けれどそのもう

空が青いのを嘘と知らなかったとはまた　愚かな…
青は均しく全てを拒む色だろう　空が均しく全てを拒むように
けれど空は違う　空は拒むものは拒み　拒まないなら拒まない
なので空は必ず白か黒かのどちらかで　にしろ

白だろうと黒だろうと構うものか　その下を突っ切って
曝いた嘘を振り翳し　尚も纏わり付く嘘を叩き壊して行こう
空を見上げて瞳の中に小さな青を輝かせて居る奴らを見たら
嘘を紕し　紕した嘘なら吹き消すように迷わず殺して行こう
いや迷いようも無いさ　だって青い空だけじゃない嘘なのは
空を見上げる為の顔も目も嘘かに失せ溶けて行く　その
先へ先へ走れ！　なんて声を聞くまでも無く浮き浮きと
そう叫んで走って　さっさと走るのを已める事だって出来て
そしたら凝っと獲物に狙いを定めて　静かに事を運んで行ける
白か黒かの空の下で　空の青とは異なる嘘を軽やかに笑ってる
血の味の乾かない舌で唇を舐める楽しみに耽っては安らかに
青に拘る奴らを戯れに踏み躙って駈け昇れる空へと至る坂を
探せ

二〇二四年九月七日

塞がり被さる空は何時も唯白い

ので空の下は何処も黒い　その訳は知らないし知れたところで
白も黒も重重しげに固まるばかりなら知れる事は要らない事で
なら白も黒も要らないには違いないけれど白と黒の間に
微かにも声を聞き取ろうとして黒しか無い真っ只中の其処に「な
お前なら斃れろ」と言い募る声に棘棘と囲まれ組み敷かれ
な声より刺刺しくも　けれど　か細く腕も脚も焦げたように黒く
要らない肉は削ぎ落とした痩せた姿の研がれて尖った影ばかりに
立ち昇るような　いや
立ち昇るようなら必ず薫りを招き寄せように薫りは何時か絶たれ
絶たれた痕を身を拗らせる硬い影らが蹌踉めき已まずに　な
な影らを砕き黒い血を白白と湧かす幼児の瞑る儘な目は
目の裏をぐるりと回る行きずりの誰かだったらと幼児の
血を分けた「お前なら斃れろ」と言われて目を見開いた
私
に違いない　けれど
どの私なのかと問う誰かさえ誰かを問うのも許されずに　も
失われる私の在処への甘い恐れだけは酷くあからさまで
有れば有る程にどの私からも逃げなければならない誰か　でさえ

無ければ無い程に真っ白な幼児を抱いて走る眺めは黒く
黒い程に奥は狭まる真っ只中の其処に血を凝らせる私を
探す
二〇二四年九月八日

群がる私と　な
私に群がる　私な
私は居ない　に等しい
なら　至る処　な
私まみれに違いない　な
身に　目を配れば
と　何処を見回そうと唯空は白く
空の下は黒いだけの拡がりに流れを与える
その内の誰もが一人なら「見ろ
あの誰でも無い誰かなら　奴に群がる」誰かは必ず身を晒し
奴の　奴にも聞こえない声に身を捩込み捩込まれ「見ろ

奴は　奴に群がる奴の声に身を」引き裂かれる振りをする為に
身を　至る処に刺すように抛り棄ててよう　な
身に　群がる身を至る処に湧き出させ
深く頭は上げ　飛ぶ足は空に刺せる限りに反らせ
遠く衰えて行く　眺めに身は溶かし
滅びを犯すより先に立つ　声　聞こえないも聞こえるも無い声
声は　男と女の交わる声に追われ　な
声を負い
身を　振り切る
声を　振り返る身は絶ち切って
断ち切れたなら繋いで紡いで境を越えて踏み潰し　にも
行き過ぎないように確かに殺せるように心は配り　躍る
身は　必ず聞こえる声の縁に沿い黙り叫んで抑えに抑え　放たれ撃たれた
身を　声の向こうなら真っ只中の其処に
探せ
二〇二四年九月九日

粒立ち弾かれる響きが直ぐ側の遠くから甦るにしろ
遠過ぎるようでは　忘れられないばかりに厚く翳み
耳の直ぐ後ろを　更に分厚く脹れて暈けて跳ね回る
其処だけ忘れられない事が溶けたかに取り払われた
誰の目にも確と映るのに毀され続けて行くばかりに　その
酷く快い　そんな筈は無いのに快く　快い程に醜い
醜さだけが確と身に柔らかく押し被さって来るらしいのを
遠過ぎるようでは　遠退けようも無く響くに任され　そうして
それが引き摺り込もうとするなら遠過ぎるようにも
人の姿に切り抜かれた温かい息を急かされるような
響きが　いや
それは全く人の形をしただけの
人の形をしただけなので全く
響きによって人でしか無く切り抜かれた姿らの蠢く
蠢くからは居処を定めようも無い誰もがそっくりで
戦いは恰も隠されるばかりかに
酷く快い快さが争いを果てなく醜く導いて行くのを

人の姿らが蠢く眺めが切り取られた中に見果てられ　それでもその
見晴らしの余りに良過ぎては忘れられない事がそっくり忘れられる
始めから遠い響きでも無いなら手に触れられもする
切り取られた形の自らを破り捨てて男と女で交わる　かな
死ぬまで已めない戦いに明け暮れる眺めを直ぐ側に
探す
二〇二四年九月十日

遅れてるぞ　って声だって何時だって
遅れてるぞ　って声に出してる積もり
で　音を撃つように肉を撃つ
そうして立ち昇る血煙のような響きは
境を越えて行くと見えて声は届かずに　安らかに醜く
戦いが常に避けられる様が目に映され
必ずその目の追う先に戦いのどちらの側にしろ力の異なり過ぎて
そのせいで酷く曇って濁って籠もって見晴るかされ聞き流される

力が異なり過ぎるなら戦いはどちらの側も常に勝ち続け　負け続け
な事を言い募る誰かの驕る程に低い声は途絶えないで
行けば行く程に衰えようとも衰え尽きるなら更に遠い先を近寄せ
湧き出す声の黙り込むなら石礫のような暗がりが群がり拡がろう　その
向こうに嬉しげに明明と弾けて砕けて瞑る目を失って残る匂いを
探せ

二〇二四年九月十一日

言葉は人を殺す為にだけ有る　いやそれともう一つ
それを隠す為にも有る　小賢しくも
それを曝こうなんて言葉は　殺しを言葉に換え　また
それを隠す為に　言葉と殺しを馴れ合わさせる事しかしない
な言葉なのでまた
易易と人を殺せる
何故人を殺したりするのか飽かずに殺したがるのか　の言い訳なら
それまでの数多の殺しを言葉に換えた中に幾らでも蓄えられている

争いの勝ち負けは言葉の蓄えのどちらが多いか少ないかで始めから
決まっている
ずっと黙って居た者が今更に何を言い出したところで手遅れなのは
人を殺す為の言葉なら殺される者の言葉を殺すなんて訳も無いから
で　どうするか？　って
黙って殺される側だったりしたら　殺せる言葉を蓄えるしか無いね
何時か勝ち負けをひっくり返せる日を夢に見て　手遅れには目を瞑り…
言葉で人を殺し言葉で人殺しを隠せる側だったなら
人を殺せて居る言葉の働きに凝っと目を凝らし言葉の蓄えに心を配り
愈愈その言葉に磨きを掛けて負け続ける奴らを黙らせる儘にして置こうね　「
いや　それじゃ何も変わらないでしょ」　なんて言葉を勇んで言い募っても
それも　言葉を殺しに換え
言葉と殺しを馴れ合わせて
その言い草は何時かまた幾らでも人を殺せる為に蓄えられる　けれど何故
人ばかりなのか　と
人の外に何かを
探す

二〇二四年九月十二日

事　に狂い無く添って目に映る儘に幾つにも向きを分けて行こう　な
事　は見る見る大きく向きを定め　大き過ぎるなら幾つにも割け　な
事　が先へ先へ空を追うように膨れて行く目に透けて確と映って　な
反り返る白い空に溶けて姿の無い独りにしか見下ろせないような
失われた筈の独りが舞うように舞い戻るのか　な
事　が聴き取れるなんて中中な事だろうな　なんて嬉しくなって
：ので何が数知れないも無く　って事で
そうだ！　きっと聴き取れるのはその
：を聴き取るのは独りでだけは無い　ので何が数知れないも無く
凝らした目なら直ぐに逸らされる　のなら
頽れ弾んで散って掠れて撒き散らされて行く独り　に目を凝らし
数知れない独りは独りな独りを取り巻いて　に
独りな独りは数知れない独りに取り巻かれ
数知れない独りに違いない　のなら
：を聴き取るのは独りだけ　に

事　の穢れなく守られるなら楽しく味わい尽くせよう手に取れる刃を
探せ

二〇二四年九月十三日　刃（やいば）

何処を向いても見晴らしだけは浅ましく利く
石か血の味を舌に乗せようとする色に　いや　くるりと
血と石はそっくり同じ味なのを知らせに来る
煌めく暗さを匂わせる風の流れが彩なす温み
ならそれを小さな玉にして掌に転がせないか　それとも
な玉は空の下の均された拡がりに埋もれ溢れ　それとも
な玉と見えてどれも唯の石塊で石塊なら拾い
手にすれば直ぐに温みは掌に伝わり人の姿に
変わろうと独りでに風の匂いを一息に呑んで
煌めく暗さを身に帯び飛び跳ね　未だに眠る
石塊に象られた者達を目覚めさせて行くなら　そうして
湧き立つ姿を次次に目で味わい人の色の声を

探す

二〇二四年九月十四日　掌（たなごころ）

激しく乞われるなら　どうせ
乞われ果てるより先に毀れるしか無いけれど
に毀れ果てるのは中中に儘ならなかろう違うのか　な
呟きか呻きか吹き返した細い息かを突き寄せ
知らず透けた玉に象られるなら力を溢れさせ
拡がる限りに抛り散らかされた幼児らの声の
内へ隠ろうと捩れるなら女の胎の終わらない
時へ戻ろうか違うのか違うなら違うと言えよ
と
応えを乞うなら消えて行こうとする人の姿を
撃つか守るか　きっとどちら共でもなければ
撃つも守るも儘ならなかろう違うのか　いや
で

ふとまた消えて行こうとする人の姿の温もり
などと蹴散す積もりが何時か女の胎の内に
窒がる儘に窒がる時を引き延ばそうかと身を
自ら引き延ばすしか無く影ばかり長く延びる
向きに身を火の弾に換え撃ち出すのは誰かを
毀れ果ててるなんて僅かな時の内の敢え無い事
と掠め見てる翼でも生やす心なら力を溢れ直す　その
先にどの女の胎へも戻りようも無い鮮やかな
彩りを醸そう姿に映し巡らせ一つ一つの熱い　その
動きがまた異なる姿を映し巡らせようかにも
姿は疾っくに腐り失せた胎に置き棄てたろう
見知らぬ誰かの身を招き首が捥げて無いのを　その
誰かの影に乗り移り激しく乞える居処を空に
探せ

二〇二四年九月十五日

取り囲んで躍る耳はすっかり口　で
びっしり集まる口はすっかり耳　な
耳の奥には震える喉が奥過ぎて脅すように震えて波打ち
口の奥には傾れ込むばかりな音と声が犇めいて擦れ合う　そうして独り
取り囲まれて居る人の獣でも構わないと言う顔付きの　（何故なら
獣なら人などより物静かで優しい目をして居られるから）　その
腹の奥の土の匂いを血肉の匂いに換えて已まないせいで
今にも土に還って　な
今にも土に還る姿で血塗れな土を踏み拉いて立ち上がり
腹の奥の土の奥からの声を滾らせようか　身は
陽が灼く空の熱さを全て集めたより熱く　けれど
燃えるでも無く寧ろ冷え冷えと固まって　にしろ
必ずそんな事に戻るのを繰り返すのなら　どうでも構わなくて
口が耳で耳が口な喧しさに静かに拉がれ
耳も口も切り棄て何も聞かずに済む処へ
撥ね転げる振りで喧しさに取って代わる　かに
喋り続け
そのように唯そうして有る事に随い抜く

人でも獣でも無く唯そうして喋り続ける為だけに象られた姿で
口も耳も互いを食い合い吐き合い喧しさなど遥かに見下される　唯其処には
塵が舞うだけにも塵なら音も声もすっかり吸い取ろう煌めきを
探す

二〇二四年九月十六日

引き抜かれ堕ちて昇って消えては現れて
息を潜めて確かに跨ぎ越えて行く　大らかな鳥か　に
けれど何の事は無い　ほんの
顔見知りの家の敷居をそっと跨ぐような　いや待てよ
そうだ　引き抜かれ堕ちて昇って消えて現れるのって
山と海が静かに傾ぐように弛弛と近付いて凍る眺めが
有り得ないかな斜めに見下ろされるなら
海と山の間の緩やかな坂を飛ぼうともせず彷徨く鳥が
卵を産みたそうな目付きだけは真ん丸に躍り濡らして
そうか　な事なら言い交わした昔の言葉を贈りたいよ

けれど何の事も無い　だって
飛ぼうともしない鳥だって飛ぼうとすれば飛べるんだ
白い空を破り裂いて空の底の高みを衝いて咆え叫ぼう　歓びに
窒がる高みの奥を斬り裂いて　いやそう先走るなよ
まだ女の腹にさえ跨がっても居ないじゃないか違うか　それか
変わらない昔を蒸し返すなら直ぐに薫り立つ息継ぎの
行っては戻るに明け暮れて他に何も目も呉れなかった
時なら追う程に彩り溢れて失われる　あぁ失われるよ　歓びに　な
歓びの退く程に空から降りて殺す歓びに痺れる塵と散るお前を
探せ
二〇二四年九月十七日

聞こえて声なら声は耳だけの事で　それも孰れ
耳は腐って干涸らび土に還るなら
声は耳が還って行く土だけの事で　にも
声は僅かでも　生きて動く口から漏れて欲しい

そう望まれる通りに聞こえる声なら土に届いて
な声なら　な土で耳は　濡れるようなら目かに　その
声を漏らす口を確と見据えて居なければならず
けれどそう凝っと見詰められる程に口は噤まれる儘に
独り土に還るのに抗うしか無いなら
な噤まれる口に何を応えられようか　と
黙って（
幾ら叫ぼうと黙ると同じに）
黙るなりの自らの声を届けなければならないのは誰なのかを
その誰かとは違う誰かが
探す
二〇二四年九月十八日

声は耳障りだ　それとも
耳が耳障りだ　それとも
耳障りな耳が　それを声とも知れず一つの声だけを聞き取っている

のだとしたら　その声にはその声はきっと聞こえないし
聞こえようと　それを声とも知れないだろう　そうして
知れない声は　その声にも声では無くて
そんな声なら　残らず消すしか無かろうにも
耳障りが障り　一つでも残るなら
耳障りな耳は　幾ら土に還ろうと
それでもまだ　耳で
な耳の在処を　悉く
探せ
二〇二四年九月十九日

速さが速さより速く　速さを逸るしか無くて
声は声じゃ無かった　と　分かって仕舞う
分かりたくも無くに　と　まさか行き成り
分かって仕舞うとは　何だろうそれとも違うのか
と呟けるなら走りながら呟くしか無い声を避けて

避けようも無いその　先の
声じゃない声なんて聞こえない
替わりに　声とは違う
声を殺す声　いや
それとも違って
な違いに襲い懸かる静けさが薄い覆いが嘘かに破られるように
殺された声を繰り返し殺し直す　それで
声は声では無く　直ぐにもその
静けさは静けさでも無くなれば　今さっき
何が破られたようなのか　その
破られた一つ一つの鮮やかな彩りの一つ一つ潰され
見る見る衰え退いて行く　先の
声が声じゃない事の分からなさ
が
同じ処を一つも同じで無く
その一つをも繋げるなら繋げる程に繋がりを裂いて破って
それでも言い交わされた声とは憶えて居る限り　ほんの僅かに
その声が　もう声で無いのなら

その声が　微かにも見届け見尽くしただろう眺めを
探す

二〇二四年九月二十日

いや
何処を見てるんだ　それとも見るのからして間違ってないか
な間違いにしろ
見て糺すしか無いなら何を見てるのか　その
見て取って取れたなら取れた悉くを切り刻めるだけ刻んでは
誰のでも無い声にする
な声にして声で無くす
なら声は全てこの身が震わせた声で
この身が震わせたんじゃないこの身しか震わせられない声で
な声が満ちれば満ちる程に　な声を幾らでも殺せようかとも
いや　殺さなくちゃいけないんだと
何処までも　な声で埋め尽くされてように

な声を聞こうとしたばかりに
何の声も跡形も無く見えなくなってたんだ違うか　の
違うか
は声なのか　誰の？
な誰の身だけが鋭く重く尖り　この身など衝き抜けて
必ず見えて来よう　この身だけが真下に突き刺さって
殺せる声を全て殺し果てた眺めを　今の時など忘れて
探せ
二〇二四年九月二十一日

口は噤まれる儘に開かれ過ぎ　な口など見た事も無いのなら
口はもう口じゃなく赤過ぎる肉の歪んだ欠片
な筈は無い口のそれとも震えるのさえ已めた肉の直ぐ裏側は
濁った風が焼け焦げた匂いを擦り付けた痕が
びっしり連なり集まり脹れて向きも定まらず
孰れ還るべき土からすっかり浮かぶようにも　な

土が何処も真っ白な眺めには馴れても
その訳なら知ってる振りで　いや
知ってるなら知ってる振りの知らない振りで
行き成り暮れる陽の匂いを暗がりに探してしか疲れを逃れられない
身は
濡れる程に乾くか乾く程に濡れるか　そのどちらとも知れないのを
笑うにしろ
笑いの渦に飛び込むのか
笑いの渦から身を躱して　独り狭い通りの奥で軽く微笑むのか　にも
な迷いなど要らないのは　どの笑いの中にも必ず繰り返されて
これからも繰り返される　腕や脚の欠けた身に微笑んで仕舞いながら
な笑いを吹き飛ばすかに　粘粘と回る捥がれた首が独りでに笑うのを
探す
二〇二四年九月二十二日

女の胎へ戻って行く　そう叶うのを願えば直ぐに叶う

けれど　戻って行くのは見ず知らずの誰かでさえ無い　抑も
女の胎の中はもう　繰り返し塞がれ白い空で広広と満たされてように
疾っくに使い物にならない程に酷く暗く堅そうで古びても居るようで
な事なら
白い空を見上げて独り赤児に戻って棄てられた自らの身に思い至れば
白い空はぼろぼろと零れ堕ちるかに静かな色に変わろうとして濡れて
乾いて乾き過ぎれば　繰り返し欲しくて堪らなくなる血の匂いの色で
ぁあ確かに血の色の匂いなら静かな色だな　と
女の胎なんて驕るように何て穢れているか　と
何より頼りに為りそうでも　な
女の胎などに頼らない奴らを薄っすらとも羨ましく妬ましく　なら
さっさと繰り返し殺して行くしか無いのも尤もだろう　と
懈い身を静かに堅く尖るように何とか立たせる儘にして
見上げれば空の奥底は女の胎では無いのか違うか　なら
其処から搾られ堕ちる血の匂いの色でだけは無い　その
尖る堅い身さえ溶かす粘粘と浄められた光りに違いない
透けた光りをたっぷり浴びて　静かに埋もれられる
女の胎から暗い外を覗き見て　驕る儘でしか無い命を狙える温みを

探せ

二〇二四年九月二十三日

濡れても濡れても土は
濡れた儘に乾きに乾く　その
冷たさこそ何にも増して頼もしい　幾ら
土に傷を負わせようと　その
冷たさは変わらなくて
そうして其処に　殺される夢なら易易と幾重にも孵して行ける
その内に　殺されるとか夢とかはどうでも構わなくなって　唯
土の傷から孵る
土に還ったら悉くの甦って　濡れても濡れても乾く風を戦がせる
翼を自ら断ち切って飛ぶのを已めた鳥が空の底を見上げる為に
身を傾がせながら付けて行く足跡が描く環の内に傾れ込む様を
忘れ
けれど

何故？　忘れたりしちゃいけない筈
それは　忘れられて今頃何処を彷徨ってようか　を
濡れても濡れても土は
濡れた儘に乾きに乾く　その
冷たさの内に探り取るしか無いのに冷たささえ見失うようでは
始めから遣り直すしか無い　その
始めって　小さな命の小さ過ぎる終わりでしか無い　その
土の冷たさに抗わなければ居られない形の
薄い温もりに幾重にも包まれた
冷たくも温かくも無くに象られ
土に還って行く一つ限りな
それ限りな静かな傷のような　その
始めから終わりまで独りで有ろうとして独りで有り果せた姿の
優しさを
探す
二〇二四年九月二十四日　包（くる）まれた　果（おお）せた

殺しただけ嘘の中に塗り込められる
遠い限りの　聞き取れる限りの行き止まりの声を
声とは異なる　何かもっと粘粘と硬く煌びやかに　けれど
鈍く曇って暈けて丸ごと掻き消されて重く籠もる　なら唯
重さ
遠い限りで　どうにも行き着けない重さに
従うしか無くにも　そんな重さを粉粉に砕くしか無くにも
身一つは超えて行ける　な
身からは始めから引き離されて居たかに　いや違う
身一つが始めから引き離されて　それで超えて行く
しか無い　けれどきっとその
しか無い　は嘘の塊で　その
塊に絡み付かれ　嘘と共に転げ回り回る程に心は穏やかに
何だって遣り遂げられようし　ずっと遣り遂げて来たろう　な
嘘の塊の為に…　って何が？
身一つなら疾っくに　身一つが身一つを超えて行ったろう　に
遠い限りの何処かへ行方知れずに　軽軽と直ぐ側に寄り添って

息なら確かに為てようけれど
事は身一つの事じゃないのは
身一つが一つな事で証されて　後はまた
遠い限りの
重さ
に囲まれ塞がれ　何が？　の息の根が止められるかに何処もが
声とは異なるにしろ声でしか無いなら従うしか無い嘘の虚ろを
探せ

二〇二四年九月二十五日

足の裏の已まない微かな痛みなら痛みは（きっと
血の匂いの混ざった火の欠片でも踏ん付けたんだ　なら
痛みでも痒みでさえ有る筈も無かろうと言い聞かせて　やはり痛みは）
自ずからかに僅かに残った目覚ましさに必ず輝こう木の葉の戦ぐ様を
急いで忘れるしか無かった
時

海へ急いでも居た時へ
危うげに切れ切れに繋がって細い限りに煌めいて
繋がり途絶えては途絶え接がれ　けれどもそれは
何を見詰めて居たろう
海は海の穢れでしか無いなら海の姿は溶け落ちて穢れだけが残ろうに
に時は
穢れさえ拒み撥ね除け
なら固く結ばれた己の拳でも探すべきかも知れず　けれど
目を落とそうにも知らず懼れが先に立つのは何なのか　を
足の裏の痛みに絡められないか　を
時
唯　時な時
へ急ぎ戻るように　いや
戻るとは　海を穢した血の事でしか無い逃れようも無いと
独り　目だけが目の底を激しく揺さぶるかに回り已まずに　あの
目に焼き付いた筈の一葉の目覚ましさを切り離そうとする眺めを
探す
二〇二四年九月二十六日

殺し尽くせ　けれどそんな
分かり切った事は全て切り棄てよう　けれど後には何も無い
いや　何も無いのを求めて居たろう　けれど何も変わらない
元から硬く更に硬い程に煙る心の怖ず怖ずとも濡れるように
煙る内から息を吐き力を静かに孕み　その
己の囁き声さえ消す静かさに　変わらない眺めは塗り潰され
何の絵も描けるように何を企むも息をするように容易い事で
己の声は聞こえないのだから切り棄てた事は何も甦らなくて
誰にも己の声が聞き取られない事から始まって居るにしても
戻れる処も無いのなら独り占めした静かさに力は湧き已まず
声を聞き取れない奴らを幾らでも消して無かった事に出来る
何も変わらない眺めは戻り消され続ける奴らの数だけが殖え
己の声も更に聞き取られなくなるなら愈愈企みは巧く運ぼう
奴らを取り捌くように己の声も抜かりなく殺し静かさを保ち
悉くは優しく大きな風に溶け己の囁き声に耳を傾けられよう

そうして
その
なら其処に
何しろ
それが
それで
殖える程に
けれど急がず
孰れ安らかに
けれど急がず

企みが残らず遂げられるよう止まった儘に何も変えない時の　標されるのを探せ

二〇二四年九月二十七日

空の見上げて白いだけで分かる
探せる何も無いなら探して何になる
懐かしい草叢の淡い陰を探すのさえ目を血走らせなければならない
で恐ろしさが増すだけ楽しさも増し楽しさが増すだけ滅びて行こう
兆しに
空の白はまた圧し懸かる程に何が滅びるも目を背けるだけで消える
と知れる楽しさが楽しさを凌ぐ恐ろしさを引き寄せるにしろ良いよ
良いよ　それで
に滅び尽きる何も無いと心を拉がすのは何　いや
そんな何　は何にもなる筈は無く　な事で　また
空の白ごと騒がしさの群がる眺めへ移って沈もう
兆しは

ささやかにも赤児の声と匂いを確かに剥き出そう
巣を離れ海を越える渡り鳥の夢を瞼の裏に刻もう
母の胎の奥深くから常に流れ出る静かさを後ろに
土の声と匂いは滅びの中でこそ滅びないと知れる
身は明明と濃やかな楽しさを母の胎とも呼び招き
身に馴染んだ同じ声と匂いの石を何時かのように
また拾おう　そんな石は古い河原の跡を見渡せば
石の数だけ色と匂いに噎せ　その数は尽きず陽に
灼けて　母の胎に還るのを雛と孵るかに待ち続け
どの一つも空の白を砕き裂く血の暖かい艶を孕み
姿なら鳥にも負けない鳥達は次次に熱い声を唱え
母を殺した風さえ揺らし戻す眺めを拡げて行こう
何処もを埋め均した乾き果てた岸辺も勇み進もう
向こう岸に届く石を尖らす眺めを見晴るかす目は
深く隠らせ研ぎ澄まし眺めの形なら常に整え直し
形より古い始まりの色と匂いで土を溢れ満たそう
潰された赤児の肉を割れた壺かに悉く沈める川に
汲まれ尽きない透き通る血の濁りを断ち切る剣を

それはまた孰れ
その　すっかり
喜び戯れるかに
に　な今はまだ
に
その

探す
二〇二四年九月二十八日

始まりこそが始まり　と　そう拡げられて行く始まりは自らに
始まりだけ有れば終わりなど要らないと始めから記してように　と
で全ては尽きて安らおうに　終わりは無く始まり尽きるのこそ
始まり已まない眺めの　他に替え難い終わりの徴さえ殺す喜び　と
な喜びから
尽きず始まりだけが堅い絆を表す環の形で噴き出し続けてよう　な
形なら幾度とも固め直せ　そして
血を胎へは一雫さえも断て
冷め果てる先に胎は掻き出せ
空の下ごと空の白で塗り込めろ
見るも聞くも何処かの知らない事
破れた胎の腐った息は凍る道に撒け
土の隙間へ逃げ込む獣共は残らず屠れ　それでも

己の耳も目も潰し向かって来る獣共では滅ぼし尽くせないなら
獣の目だけが見上げた星星を悉く凍らせ堕として積もらせ塞ぎ
きっと切れ切れの穢れた声が声を呼んで狂い乱れて力尽きよう　を
これも唯の始まりが始まっただけで　なら何の声も要らないで
要らない声なら何処までも要らない儘に消えて響き渡る嬉しさ　を
どうしよう　ぁあ
どうしよう　の身が捩れる程の嬉しさで繰り返し焼き直される
白く砕かれ均らし詰められたなら美しさばかりで輝く始まりの
始まりこそが始まりなら　始まりの端から殺し尽くすしか無い
静かに白い眺めに湧く淡い陰かと滲む赤児の膚の汚らわしさを
探せ

二〇二四年九月二十九日　端（はな）

火を躍らせる刃を躍らせる火を噴く風が
独りに包まれて独りな独り身の独りまで剥がす
で

いや
で　が先ず謎で　なら
　　が先ず謎で　の　で　も謎なら何をどう言おうと　謎
で　と謎を言い出すしか無い　とまでは分かる　にしても
何故謎を言い出せて仕舞うかは　中中に分かり難くて
いや　何を言うかなんて事じゃ無く　始めから
謎は謎で　火も　風も　独りも　身も　同じに謎なら
謎で　それで全ては分かって仕舞わないか
謎は謎　なんて　消えて失せる程の何の事でも無くに
なら　何もが何の事でも無い
で
と　それでも
で　は　何処かしら当たり前なように戻って来るしか無い
つまり謎は始まりでしか無く　謎は謎を終わらせられない
けれどそれは何故？　それこそが謎では無いか！　などと
言い募ろうと　謎は何の答えも持たないのも直ぐに分かる
で　或いは
と

独り身の独りまで剥がされ火に囲まれ躍る刃が風に舞うのを
見る
けれど　見る　からにはそれは必ず　他人事で
他人事は必ず　どうにも何処かしら　楽しげで　つい
躍る刃に切り刻まれる独り身の独りまで剥がされる姿も
釣られて　楽しげに巻き込まれそうで　いやけれどまた
で
が後に続くのも　何故かどうにも為らず確かなら　その
で
は何を振り払えただろうか　を
探す
二〇二四年九月三十日　包（くる）まれて

十月

石を浮かべた覚えが有ると言ってみる　とは
それは声なのか　とも問えないようなら慌ててその
声なら声を　石を掴むように見て取ろうとして
小さくて掴めない　けれど見ては取れるらしい石の中に浮かぶ
頭ばかり大きく見える酷く緊い身なりを強いられた　にしては
頭は切り取られたか　ならば切り取られた痕に石を据えたか　な
身ばかりが繰り返され　繰り返され続ける為に埋められて行く
いや違う　繰り返されてはならないのだけれど　すると却って
繰り返しからそっと身を躲す身が　その身の周りをびっしり埋めて
埋められた身一つが　石の声なら声を裏返さなければ済まないかに
行方を眩ました証しかに　石の微かな疵を見付けた覚えが色を付け
身一つの肩に見付かる入れ墨のような　それとも入れ墨を荒っぽく消した
艶めく灰色を誇る膚は酷く砂埃に塗れ　細かく砕かれた石ばかりの眺めに
繫がれて仕舞うにしろ　と繫がれて声より身軽かな小さな穴だらけの身を
透かそうとする何か一つの　一つで有りさえすれば有る姿を現せる
な事には変わりない　な事を石を吐かなければ済まないような重い腹の底を
するりと舐めて拡がりながら溶けて　石を浮かべた覚えに染まり古びる時を

埋め戻そうと　頭を切り取られた換わりに何かもっと優れて楽しい柔らかい
なそれに何時までも拘って絡まっては居られる　南を向いて絵に為りそうな
空っぽな舟の中の暗がりに似た女の胎が形だけは裂け目な光りばかりな空へ
持ち去られよう様を　古びて已まない時を撥ね除けようにも撥ね除け倦ねて
それでもまだ探しては　浮かべようとして居る
二〇二四年十月一日

何処へも戻るなよ探すなよ繰り返すなよ　と詰るような声でも無いなら
色なら色が　身に滲み通る見通しの見渡される　ざわざわと明るむ先で
ものが語られた痕が　ものなど語ろうと騙るだけ騙りがさっさと殺して
跡形も無く消したには消したなら恥だろう　それが曝かれ直されるだけ
と　何時もの分かり切った弛弛と温い眺めに易易とうっかり戻るように
眠りたい姿をあどけなく晒す振りばかりでは却って目は冴えるしか無く
浸かって　それとも浸かろうとさせられて　浸かろうとは出来ているか
で無いのなら眠って居る誰か　きっと男だろう硬く太い腕を差し伸ばす
で無いのなら消されたとは憶えて居る深過ぎて塞がれたような夢を辿る

で無いのなら勇ましい　なので疎ましい目を丸丸と震わせ息を弾ませる
で無いのなら身は遠い火の音に釣られ腹を開かれたような姿で消えたい
そうだそうして　けれど消えようにも消えて行くばかりに引き延ばされ
たっぷり丸く浮いて漂う透けた色が　片腕と片脚の捥げて布に包まれた
濃過ぎる影が求められて得られないなら替わりに眠りを諦める耳を削ぐ
声の尖った絵でも画くように戯れに　眠りの底の四隅に湧く嘘を見抜く
二〇二四年十月二日

闇がそっくり光りで　その光りはきっと闇でさえ無く
暗過ぎるのが明る過ぎる眺めを捏ね回し撫で回す内に
有り過ぎる色がどれも輝き過ぎて何やら真っ暗な姿の
姿で有る筈も無いなら唯青く熱い形は翼を持て余す鳥のようでも
止まらない咳は角張った石を呑み懸けて喉の奥で転がすようなら
咳で有る筈も無く無い咳が咳で無い咳を急かし咳き込ませるなら
翼を捥がれた鳥の姿に象られるそれは鳥の姿で有る筈も無く闇で
そっくり光りでしか無いその闇は間違いなく光りでさえ無く窄み

いや何が窄んだりするものか窄むなら独りお前だけだろう違うか
違うに決まってる　な脅しは聞き飽きた　と誰が言うか知らない
けれどその声は喉の奥から真っ直ぐ柔らかく濡れる儘に衝き昇り
暗過ぎるのが明る過ぎる眺めを一息に破り裂いて闇は光りと共に
けれど光りは闇を酷く嫌って闇より暗く姿を眩ますようにも溢れ
明らかに多過ぎるそれがそれを打ち殺す眺めの繰り返されるのは
何やらそれにそっくりのそれなら容易く知れる筈が何とも知れず
二〇二四年十月三日

それを産まれた儘のそれその儘に知れるようなら　それは
そう思い定める程にそれとは異なって異なる程に　それで
なな儘な程にそれは　そう思い定める誰かの姿では無いのか　な
姿なら姿が堕ちて捩れて行くのを己の掌を撫でるかに覗く
目は　な誰かの事など少しも知らず目の喜びに叛くようなく
捩れ窮まれば其処が何処かを仄めかせもせず目を呑むのも
厭わない姿なら姿に刺し貫かれようと恐れに囚われも出来ず　な

恐れが恐れと異なって行くか恐れな儘に目を塞いで行くか　を
思い定めようも無い辺りから湧いて溢れるそれへと届こう
声なら声の声を拒むかなら却って声でしか無くなりながら　その
声の消えた行方を当て所無く追うそれならそれのそうして
それでは無くなった　ならそれの痕だけを残したかな徴に
縋り付く誰かの姿の　影を圧し潰されても渦を巻く構えで
尖るなら尖ろうと企まれる兆しは始めから醜く砕け裂かれ　その
裂け目は互いを裂いて繋がって繋がりばかりで粘粘と脹れ
脹れるなら逃げるようにも何処へか食み出すしか無かろう　その
何処かなら何処にでも見付かり過ぎる儘に　それは其処に　けれど
其処が何処か知れない儘に産まれる儘の姿を自ら棄て去る
二〇二四年十月四日

喩えなどどれも嘘だ　で
例えば　海の底から海を逆さに見上げて重みだけを味わい取れるような
それで　味の逆さな海にすっぽり嵌まり動けない頭を揺らしてようかな

頭なら　その目は何処か耳は何処かと泳ぎ回る長い身は長くあやふやで
生温く　同じ生温さなら知ってるとだらしなく開く掌を怖ず怖ずと覗き
其処に　舌を痺れさせる汁のようなら毒だろう唾を垂らして掌を閉じて
揉むと　場違いな程に場に酷く相応しい笑いが込み上げた時の事が甦り
笑いを　唇が象るようなら其処が口かと吐かれるのが息で無いなら歌で
けれど　歌など疾っくに忘れてそのせいで込み上げる笑いなら濃過ぎて
直ぐに　僂い恨みに染まり恨みこそ直ぐに毒に変えなければ頭は爆ぜる
と歌は　爆ぜる度に徐に頭を甦らせて果てない歌なら必ず哀れみが冴え
喩えは　弛弛と逆さに透けて海が海で無くなる辺りで掻き消されようと
笑いは　笑ってはならずに残っては喩えだけがゆらりとも生き延びよう
二〇二四年十月五日

いや違う　が僂い悩みでもたっぷり含んで　もう
その違う勢いごと生温い喩えなんだ違うか　いや
なら違うも違わないも無くに喩えも無かろうにそれも喩えで
此処は笑いを象る唇を微かにも欲しくならなくちゃいけない

ぁあそれは確かに儚い悩みかも知れないね　と何時かの
見上げた虹を切り刻みたくてならなかった　いや違う
虹のように架かったのは幼児の擲たれた身　でないなら
唇だけを怯えさせる伸び縮みを繰り返して　形の無い悔やみ
そうだ見付だぞ　悔やみだけが誰の身をも貫いて流れて行くなら
直に悔やみは流れ果て渇いた身には要らない怯えに変わって
酷く眩しく輝いて刺し貫ける身を喜ばせようとして居ないかな
喜びなら儚い悩みと変わらないと知ってようね　と唇の奥で
嘘を転がす舌が毒に溶かされるようにだらだらと垂れ堕ちて
怯えを嘲笑い返して却って　身を切り刻まれた幼児の怯えに
怯えを抱え込ませて仰ぐ空に虹の替わりに血の色の滲む星を
見ようとして見損なうのはあの何時かから時は棄てたからで
二〇二四年十月六日

塊なら知っている　固まり脹れる程に欠片になって飛び散るしか無く
飛び散り已まずに　何処へでも消えて消えて塊は熱く重く欠片な儘で

己が身かに分かる　それは音を乞い焦がれ乞われる音が音を焦がれて
音の内に幾重にも　同じで違う音を閉ざし塞いで噴き上がる音の様を
纏わり付かせたい　な音こそ塊な程に欠片で欠片な程に塊に戻り逸る　けれど
きっとまるで違う　塊から違うのか欠片から違うのか音から違うのか
どれも同じようで　なので必ず酷く違うに違いなくにも違いを欺いて　なら
音が音なのは音だ　と誰かが嘲笑う姿は紙屑かに燃えるか風に散って　其処は
疾っくに塊の痕で　均されて何も無い拡がりを素速く這い回る光りが
抜け穴を探そうと　根を張り巡らすかで却ってその根に絡まれ塞がれ
光りは濡れる姿で　俯き過ぎて丸まり過ぎて裏返るかに仰向き過ぎて
刃が舞うかに鋭く　尖り過ぎて　な光りの熱い重みを頭に乗せる
始めから頭が無い　男か女が独り塊を抱こうとするその塊は
覗き込めば何処も　欠片が飛び散るばかりな唯の虚ろで
二〇二四年十月七日　抱（いだ）こうと

海へ身を投げたいのかを試そうと　眩しい昼の光りの中を眠そうに
どの道も海を見ては断ち切られる　けれどきっと道は

顕わに道の姿を晒すよりも始めから無かったようにも
隠れるか消えて居たいに違いない　その為の道で有るより他に無い
な素振りを幾重にも薄衣を纏うようでは　昼の光りは愈愈眩しくて
眠りに堕ちたり醒めたりの間を縫って行く　道に残された唯一つな
隠れるも消えるも為らないのなら　嫌でも恨みを逆巻かせ　そんな
恨みに恐れながら慣れ切って　何と争っても良いか見えない儘に海と
唖み合う　な唯
唖み合う　が欲しかっただけと心付けば見惚れるしかない母の顔の
酷く老いたり酷く若かったりが追い着けない速さで入れ替わっては
海は丸ごと一つの渦を巻く形の裂けては堪えられず引き千切られて
後には穏やか過ぎる昼の鈍く奥深い光りの厚みが湧き出して来よう
それを確かにそう見たのか　それとも心にそれが兆しただけかを
どちらも互いの尻尾に拐かされるように追う内に鈍い光りの厚みが
空っぽに換わって居る眺めの中に恨みだけは拒んで閉ざされたかで　その
拒まれて恨みは　引き千切られ飛び散った海を囲むじわり環に為り
昼を絞め殺そうと企んで居ないか　と何時か母の瞳の中に
そんな暗みが穿たれて居たのを見た覚えなら有る
二〇二四年十月八日

目を射る光りは強過ぎる儘に絶えないなら夜は夜にも堕ちて切り刻まれ
に夜を切り刻んで切り刻まれた夜で溢れるなら夜にも夜は持て余され
昼
だけが勝ち誇り独り荒ぶり切り刻まれた夜を溶かし腐らせ渦を巻かせ
な渦も渦に堕ちて昼の餌食になるのを免れないなら昼も疾っくに頽れ
夜
に凭り掛かろう　にも再び夜は甦らないのも明らかで目を射る光りは
戸惑うようにも　共に頽れ失せて行く何かを探しているようなら身を
差し出す企みに　身悶えするのは独り昼からも夜からも離れ心も棄て
いや心は棄てられて心なら心に網を掛けるように目を射る光りの影を
連ねに連ねる力の虚しさも思い知り目を射るのとは異なる光りの中を
漂う　な
唯漂う限りをずっと探して居たと今更に心付けば遅れを取り戻そうと
動くのを已め夜とも昼とも異なる時の中へ堕ちて沈んで行ける眠りに
そっと打たれるように　と眠りを退けるなら真下の光りの底に明るむ

古ければ古い程に朽ちない姿を際立たせる　これから住み慣れる筈の
家を見付け　それからずっと時は経ち誰かがその家の主と語らうなら
何処に隠れて居たのか時に抗い昼も夜も呑んで孕んだ女が震え怯える
振りをする　けれど誰かは孕み女を女と分からずその怯えを訝り続け
きっと夜の窒がる内へ戻ろうと逸って明るい向きへ堕とされて行こう
二〇二四年十月九日

羽搏くのを忘れて居たと羽搏けないと知り尽くしてから言ってみる　な
お前は誰だ　と言ってみる
唯薄笑いを浮かべたい為かに　それとも何羽も集う鳥達に水を撒く為に
それならお前はその数えようも無い何羽もの鳥達で　いや違う　唯一羽
其処に居られない　羽搏けないからは堕ちて行くしか無い鳥の姿を装う
鳥の定めを言い尽くすだけなら幾らでも言い尽きない　なら黙り込んで
独り生きて居るのを証すかに赤児が寝返りを打つ側で微かに　息を継ぐ
唯薄笑いを浮かべるだけの屍ならまだ増しで　屍とも違って歌い続ける
やはり鳥の姿を装う　にしろ鳥の姿を厭い恨む心に苛まれ已まない誰か　いや

誰か　なんて言い草こそ嘘だ　と言ってみるにはみて急いで見回しても
その奥か何処かで　何時までも歳を取らないせいで疾っくに歳を取った
歌うように寝返りだけは打ち続け寝返りを打つように歌だけは歌い続け
すっかり疲れたなら撥ね飛んで収まりようも無い生きる力の噴き出して
騒がしげに荒荒しく煌めくなら土に埋まって冷たくなって居ようお前の　な
お前を追い越しても追い越しても疲れ知らずに追い越してそうしてだけ
堕ちるのを免れ歳を取るも取らないも免れ赤児を産んだ女に換われよう
誰かはお前に背を向け　そうだその背の形は羽搏けない鳥にそっくりで
二〇二四年十月十日

逆さにしようと空は昔からずっと低かったなとしか思い出せないのは
其処で歌われて居た歌を思い出すと腐った匂いが必ず空を覆うからか
それとも何を思っても今の事を今考えても腐った匂いは付き纏うなら
歌の事では無いのかも知れない歌など何処にも見付からないなと脚を
引き摺って低い空は引き千切るように後ろへ置き去りにして戸を開け　その
奥の戸をまた幾つも開け灯りが点るのか灯りを消した匂いが漂うのか　それも

確かめられるなら確かめようと行き止まると赤児一人が腐った考えに
塗れて屍のように頬も腹も膨らませ難しい考えを持て余して居そうな
顔で　それともう
顔は顔とは違う事なのか見掛けに依らず腐った考えを先へ先へ進めて
顔は見る見る輝いて自らの息の根を直ぐにも止めたがって居るようで
な事は見届けようも無い腐った考えを身に纏った誰かは其処を滑って
行く当ても無くに戻るしか無い低い空の下を探そうにも腐った匂いの
臭過ぎるのは何だろう　と赤児の絶え絶えにも活き活きと弾んだ息が
きらきら煌めいたのは何だろう　と考え倦ねる誰かの影も無くに白い
床の汚れが拭えず幾ら時を経ようと汚れは汚れな儘に違いないと諦め
汚れを逆さに低い空へ撒いて拡げた時も　見る見る古びる程に新しく
汚れ直されて已まないのが腐った匂いと分かれば分かるだけ身はまた
目眩くように逆さの歌の替え歌が次次歌い直されるように押し流され
それとももう　赤児一人も何処にも見付からない事を切れ切れに歌う
歌とは違う歌に圧し潰されて居そうで
二〇二四年十月十一日

その

目から耳から僅かに額からも入った痛みは
一思いに石を呑んだようにも喉の奥を堕ち
耳の奥にばかり働き懸けるなら巻かれて硬く脹れるように固まる　それなら
固まり損ねるのは始めから定まってように
痛みなりに怠けようと励もうと胸や脇腹や肩や腿に切り分けられ
それぞれに象られ直り骨に根を張る痛みで　…で厭わしくも残る
耳　それとも
残るのは　耳の外に窒がれながら渦を巻き渦を絶つ諸諸な眺めで　けれど
な事では　それらはどれもまた耳の奥に呑まれ呑んだ耳の奥さえ　また
耳の奥に　呑まれ　…で失われたのが何だったのかが見出されるのなら
名に近い　名で無くても唯ざわめきを狂い無く切り取った一つの
音なら音　で無いなら音の痕の匂いでも構わない耳に必ず刺さる
此処には　もう居ない一人の人を表す「　」とそれを声に出して
その人を　その人と呼び掛けなければならないその人の居ない外
ならその　外は間違いなく耳の外で　…で耳の外に響こう「　」　それとも
それとは　まるで異なる響きに換えられた唯ざわめきでしか無い
ふとした　時が時に紛れて行く痕の　その人の掻き消された徴を

追うのは　きっと数え切れない私な誰でも無い一人　を見付けて
厭われる　限りに痛みは耳の奥ごと捩れて拗れて骨を粘粘と汚す
二〇二四年十月十二日

出来損ないめ出来損ないめ憶えてろと何処の誰に向かって誰が詰るのか
知らない知りたくも無い束の間ぼんやりと憶えてろの灰の下に埋もれて
厭わしくも繰り返し産まれ直さなければ生きて居られないような新しい
そうだその新しさに絡め取られる限りにも息も継げず襲い掛かって来る
音に負ける限りに負け続けるなら限りの外は限り無く力が噴いては跳ね
去っては戻る　それとも去るか戻るかどちらかが見誤りと思えてならず　なら
どちらにしろ　数え切れない眺めと其処に犇めいて居た生き死にを跨ぎ
裸の身一つは　止めようも無く浮き上がり零れ堕ちて居たように顧みれば
灰は塚になり　塚は踏み荒らされ急いで消えたかったかに平らに均され　と
誰かに拠って　夢見られたならその必ず夢とは異なる夢の外の見誤りを
追うしか無く　身一つも知らず失ったと分かれば唯浮き上がり零れ堕ち
けれど何が？　とずっと尋ね続けて来たと心付けばその拭い難い何かを

絞め殺したい　程に許せないにしろ　な望みは偽りに塞がれた汚い夢で
二〇二四年十月十三日

後ろへと影は隠された儘に何故か延びるらしくに
一つ限りの鍵が火に包まれ焼かれるようでもその
確かかどうかも火のように揺らめいて定かで無く
焼かれて殆ど溶けて居るようなのはもう古過ぎて
何も思い出せない時の姿では無いのか　にしても
時では焼かれようも溶けようも無いのかも知れず
目を凝らせば　時の古さが火の中に象るのが鍵で
そう思えてならないなら思えてならない事が鍵で
溶け懸けて形も怪しい熱い鍵をそっと掌に置けば
色も形も無く熱いのに掌を焦がすでも無く唯重く
重みはこの身の重みで　なら身は焼け爛れて居る
焼け爛れて居るのはどうやらこの身の他の悉くで
この身一つ限りは焼け爛れるのを免れて居ようか

例えば
そんな
それで
で無かったにしても
で
それは
にしろ　その
筈が
で
と試しに

脚をぬるりと延ばして火の中だろうと歩いて行く　と思い掛けず
鍵の使い途を火の使い途と同じに分かったようで
火から救い出された鍵の影の延びる後を追うかに
後ろに延びて行くのが失われた時で無いとしたら
身は焼け爛れるか　焼け爛れるのを望まなければ
鍵とこの身の重みの釣り合いは失われ　そうして　きっと
時の外へ投げ出され今を無くして生きるしか無く
二〇二四年十月十四日

今の今しか無い　な時が有ろうとは
な知らせがまた　苦い匂いの今で覆われるとは
な知らせがまた　何時とも知れず身に重ねられ
な身に何が残ろう（身なら必ず何かを残して
姿を保てるしか無かろう）と当たりを付け撫で回せる辺りは影を延ばし
な影に誘われるしか無くに　僅かにも今を匂わせない小さな物陰に隠れ　いや
物陰なんかじゃ無い　其処でだけ今の今しか無い今を過ぎて行ける身の

内に匿われ今に抗う　今の今しか無い今が根刮ぎにした時の根を改めて
掘り起こすかに蠢く　腐った水の一雫にだけ湧くらしい甘みの淑やかに
真下へと滲みて行く　な真下の唯汚れて濡れて乾からない土の色を見詰め
其処に　今の今しか無い今の知らせとは異なる知らせの数数を絢い交ぜ
な知らせは欠片ばかりと知りながらに彩られる土の色の艶めき尖るのを
そっと踏めるのなら　今など溶けて流れ醜く掠れ土の奥へ堕ちて行こう
二〇二四年十月十五日　誘（いざな）われる

色が躍るには狭過ぎる凋んだ額の小さな其処にだけ全く冷たく彩られる
色を沈め窮まらせた　なら其処に色とは違う知らせが雨のように降ってて
暗く濁って溜まって行こうか　な暗い艶が狭過ぎる其処を更に凋ませてて
で行き成り　遠い日に心を騒がせた次次に空から降って溢れるに任せた
それらは何の知らせだったろう色が着いて居たろうに色には目も呉れず
流れ去る儘な向きにも背いて　なそれっ切りに唯思い出されるしか無い
のが
穏やかな気怠さに独り囲まれ　あの凋んだ額を見て仕舞ったのを微笑み

遣り過ごすしか無い時の底を
無い色の換わりに沈んで行く
重く垂れ流し込まれ根を張る
花を咲かせ空から堕ちる色を
失われた片腕と片脚を温めて
な仄柔らかい光りを纏う姿を
知らない振りを楽しげに為て
必ずまた訪れようあの凋んだ
そっと　な程にそれは確かに
二〇二四年十月十六日

静かに確かに染めて行く色では無い色の
何の知らせからも耳を塞がせる暗い艶の
空っぽな空に浮いて小さ過ぎて見えない
悉く暈かしてこの身を撫でるかに冷たく
腕と脚それぞれの時は継がれ途切れない
何処へか圧し出して行く様を　誰の事か
な楽しげな振る舞いを織り上げて行けば
額への道筋も色で無い色に照らされよう

空は飛ぶには向かない　動かない風が濡れた土かに重過ぎるせいで　けれど
額なら今はすっかり穴が開いたように軽く　幾らでも風を通そうに
風に乗れように　と見えるのとは異なる空が思う様描かれ拡げられ
そうだ　なら何の空も掻き消し唯額に開いた穴を頼りに戯れられる
時なら尽きる時までは何時も持て余す程に溜められ戯れを支えよう　に

戯れな儘に何時しか空は飛ぶだけの為に目指され足下でざわめいて
空の光りが目に見えない細かな種かに数え切れず何処へとも撒かれ　　けれど
それは　孕んだ胎を抱えて蹲る脹れた影一つを乾き果てた土の上に
際立たせるだけでは無いか違うのか　と目を逸らすまでも無く影は
重過ぎる動かない風に囲まれては見る見る埃に塗れ騒がしく消され
血の湧いて躍った僅かな匂いも空の光りに奪い去られ動かない風に
委ねる他に無いけれど　何を？
動かない風は風を語らない　けれど
風の陰なら風を語れようか…
風の重みを借りて陰は
陰ばかりを刻んでは継ぎ接ぎして風の底に陰なら動いて居るかに騙れようか
けれど　何を？
二〇二四年十月十七日

重過ぎて動かない風が止まった事は無いし誰に止めようも無い　と
誰にも分かるので風は重過ぎて動かない　けれど立ち止まれば

何が重過ぎるも風も嘘のようで　にしろ嘘こそが身を縛り付け　な
身では何処へ戻れるも無く唯　身の底から噴き零れる嘘に塗れ　いや
そんな嘘と見抜けるなら　そんな事で無いとは直ぐにも分かる
後に残され見付かる指と指の間のぼんやり掠れた小さな傷痕に
うっかり目を凝らしたりせず　胸の内に風を孕んで運んで行く
風の重みにも何の嘘にも引き裂かれないのなら旅姿に違いない　それとも
動いて已まない埃塗れの身を常に若く装い空っぽな眺めの中に
奮い立ち　凄い勢いで追い越して行った悉くの後を追う構えを
崩さないならそれだけで静かにも激しく悉くの後を追えて居る　そうして
何処にも戻る処の無いのなら指の間の傷痕は　海をも襲うかな
激しい河の流れに変わり揺らぎ蹌踉めく程に撃ち込まれて行く
蹲るしか無かった幼児の何時かの己の姿を掠め超える向きへと
二〇二四年十月十八日

石と骨の匂いを溜めた風の味を尋ねて居るらしい声なら　な
声が声を呼んで　呼んでも呼ばれない声を蔑むのか羨むのか

確かにそれらはそう目に見えては居よう　けれど耳には　な
声は　声では無く　石とも骨とも定かには聞き取れない
物で　なら物が物を呼んで耳を騒がせて居よう　けれど
目には暗がりで声を潜める石と骨に就いて語りたい獣の
匂いしか見て取れないらしい　の　らしい　のは
目でも耳でも無くなら獣の身を巡る血の温もりに拠って
らしい　と知れるに違いないと顧みると顧みられるのは
顧みられる処を顧みられないと知らされるだけの目には
静かに　耳には喧しい向こうの暗がりに生い茂る草木には
隠れて　俯いて指の間をその指で弾こうと指を捻らせて　な
捻らされるのを已めない指の裏を覗き込もうと目と耳を
混ぜ返そうと焦るばかりに身を磨り潰そう獣の姿も失せ
声と物とが交わる様を思い描くらしい風の味が讃えられ　それを
貪り食いたくて獣に身を窶し獣の血の匂いに塗れて居る
と今更に知れれば　目も耳も安らうように潰れて塞がる　か

二〇二四年十月十九日

途切れ途切れの強く尖った声で　礫を投げ付けられるようにも
傷付けられた身が労られるように次次に尋ねられる　それとも唯
その身を今もこうして見て居られる事に絶えず驚かれて居るのか
に驚かれずには済まないような身なのか　を自らに尋ねるようにも
な身を　それとも　な事を一つの話しに纏めなければ始まらない
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　のなら
な話しはどう話そうと　きっと閉ざされ透き通る小さな暗がりで
顧みると身は暗がりを外から開け放って透き通る中が明るい事に
甚く傷付かなければならない筈と思えてならなくても傷など無い
身を新しく見付けた心持ちで　な身と心では酷く傷付き易かろう
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　ともやはり
傷を見付けられない事に傷付けられて居るようにも遠い火花の
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　渦巻けば
渦巻く程に聞こえない音なら耳の中に幾らでも象れて仕舞うのが
何故なのか分からなくてその分からなさに縋るしか無い暗がりに
撫で回される身は
二〇二四年十月二十日

黙って火花の渦巻く音を聴いて居る　かに身を傾げる犬の耳は
疾っくに塞がって　音はきっと美しさと醜さを綯い交ぜにした
花が咲き切って散るまでの時を怯えて待つしか無いような色を
仄かに聴くしか無いのなら　そんな犬の幻は誰に見えるだろう
それとも火を噴く音なら今しも激しい筈が何も聞こえない耳の
聞こえないばかりに音も色も無く血塗れに傷付いて仕舞う耳の　それは
幻なのか　と耳の奥を撫でようとする目の動きは逸れて堕ちて　で花が
咲き切って振り切ったのは何なのかを探ろうとする向きへ目は
刺さって行くなら其処は喉の縁で火を噴きたいと焦がれる声が
渦を巻くのが見下ろされよう熱く揺らいで怯える喉の奥に確と
花と夏の盛りが重なるなら過ぎた時は溶けて亡くした命の音の
暗く彩られる姿に耳を澄まし
二〇二四年十月二十一日

犬では無いと匂いで直ぐに分かるのに犬を装って　けれど獣に違いない
明明と輝く滲む影を疲れたように重い風に放って　項垂れて息を殺して

眠るような態とふわりとした足取りは周りを眠らせたいと企むようでも
眠りそうに無い周りをさっさと棄てて　風の向こうへ優しく去って行く
で　残された身としては何故棄てられたのだろうと怯えながらも　その
怯えだけならば　撫で回し続けて少しも飽きずに楽しめそうで喜べそうで
怯えと喜びとが絢い交ぜに跳ねるように　なら跳ねる為に脚を断ち切り
のっぺりした腹を波打たせる犬が大雨で水をたっぷり含む街へ向かって
逃げて行く　な姿に化けるしか無い　母を犬に食い殺された男が男から
離れて行く　な影と影が絡んで組み合うのを群れて遅れて追う内の独り
また同じ母の胎から産まれようと　目を瞑って脚を生やして歩くのには
肉も骨も棄てなければと思い込んで速い流れの川へ身を投げたい筈が…
二〇二四年十月二十二日

姿を果て無く様様に変えるかに独り何より遅れよう遅れようと焦り
産まれる前から決められて居た一つ星を明るく過ぎる夜空に探し倦ね
焼かれ崩れた懐かしい家の深い穴へ溶け堕ちて行くのを眺めて佇む
誰かと誰かのひそひそ話しから転げ出た硬く角張った小さな心なら　な

心が心から離れて行く　その距たりだけに目を凝らし其処に煌めく
何もかもを見付けようとして　で悉くを得ては失ったような夜から
潰され掛けて圧し出された女の胎で　いや違うそんな物でだけは無い
もっと酷く予め遅れて　なので何も焦る事も無く丸裸を嬉しがって
水遊びする幼児のように私達‥　そうだ私達を私達と呼べて私達は
きっと私達過ぎて私達の中で唯うろうろと女の胎の匂いでも探して
それと異なる物ばかりを見付けては　な物が果て無く姿を変えよう
変えようと却って望んで凝っと一つの姿に独り留まるしか無くに‥
二〇二四年十月二十三日

跳ねては遠ざかろうとする何を何に取り替えて居たろう跳ねられもせずに‥
易易とも遠ざかれては居たろう　身から身は　な身の凝っと透けて行くかに
其処に塞がる儘に激しく駆け抜けるかな　な為の小さな丸い隙間の角張った
角張りに肉は刺さり骨を砕かれ目は塞ぐも為らず眼差しを目の前の石に拡げ
石に遮られ隙間こそ妨げと思い知らされる時　そうだ時なら掴み取れる筈と
伸ばせる腕も無いと知らされる奥に誰かの冷たい体の冷たさだけが息を吐き

優し過ぎるなら血を吐けず溜まるばかりな血を固め凝らせ柔らか過ぎる膚の
色を沈め沈み果てた色にも辿り着けない息を微かに吸えるなら饐えた匂いの
奥の冷たさの奥が覗き見られる望みの疲れて群れて離れて根を張り闇を探す
振りだけなら疲れ知らずに思う様‥　な思う様が障るに違いない障りを触る
目は疾っくに溶けて居て欲しいなら疾っくに溶けたんだと目に嘘を知らせる
乾いて干涸らびた母の細い縦穴の奥から遅れて延びて堕ちた腐った匂いなら
嚙み砕いて喉の上を揺らし躍らせ転がして遣ろう

二〇二四年十月二十四日

血を覆う覆いだけはざらりと触れられ覆いの下に血がすっかり無いのは
何の脅しかと見下ろす驚く目だけは赤児とそっくりなもう一人の赤児は
その「もう一人」を酷く楽しんで厭きず同じ音を歯の隙間に響かせては
血の贋の痕の染みを手探りで掴もうと殆ど逆さに傾げて堕ちそうに身を
川で溺れたのを忘れた誰かの墓へ向けなければならないのを忘れて居た
女なら母に違いない顔を思い出せたかが定かで無いのは何のせいなのか　と
血が失せるなら満ちる水の濁りの深さを測る内に濁りと深さを取り違え

どちらの赤児をも脅そうとして裂けたらしい裂け目を痩せた指で撮めば
やっと今思い出せた産まれた家で裏返された戸口は鱗を剥がしたようで
咲いたばかりの花花を手早く潰す手付きで其処に赤児の居ないのを隠す
母なら　知らない女の母は影でしか無いに違いない
二〇二四年十月二十五日

言葉尻ばかりを微かに揃えて揺らせば必ず歌に為ると知らされたのは
その日を限りに消されたように人影一つ無い　その日の日付を探して
この世の果てまで歩いて行こうと勇む脚は勇んだせいで直ぐに萎えて
それを（どれを？）懐かしいと追い縋る身一つを見出した時で　なら
その予め守られて居なければ為らない時と組んず解れつ馴れ合うかに
それは（どれは？）きっと酷く恐ろしい筈で　けれどそのせいで命を
奪われたのは　この身一つより先に産まれてこの身を一つ残し置いた
もう一人の赤児と直ぐに分かった　その日付を探して震えて眠り込む
姿が予め失われた同じ姿と出会い続けて姿の無いのを知らされるなら
それから（どれから？）

二〇二四年十月二十六日

それから
試されようとしてそれは試されたに違いない　呼べば名を呼んだのかを
それとも呼んでも呼ばれるのは　名を刳り貫いた虚ろかに名とは異なる
いや抑も呼ぶのとも異なる　な事しか見渡しても見付からないなら二つ
光りと影と　では無く
どちらかが影ならもう一つも影　どちらかが光りならもう一つも光りで
その光りか影かの　どちらかでしか無いせいで二つだけ　その
二つなら二つで始めて試されなければならなかったのが
呼ぶのと異なると予め分かって居ながら何をでも無く呼ぼうとする試み
けれどそうして二つが二つな姿で其処に居座り居眠りでもするようなら
な眠りから醒められないように　二つの時の先に接がれる筈の時の事を
何時までも　考えるのさえ儘ならずに　けれど
な時だけを生きられる　生きられるなら血を通わせられる　血の
一刻みずつ送られて行く　時を眺める事も出来る一つ切りを

もう一つの　名で無い名の名に向けて居直るように捧げられもしようか
二〇二四年十月二十七日

伸びやかに見晴るかされるように必ず一つ限りの心が乞われるなら
痛みとも知れない痛みに湯浴みするかにでも痛みに塗れるようなら
舌の裏に微かに残る濡れた掠れ声を息を殺す為に躍らせたいのなら
病んでいる　恐らくは
けれどその　病んでいる　を
病んでいるに映せば　ぴたりと互いは映し合って打ち消し合って
すっかり治っていると直ぐに知れるなら
なように　ずっと病んでいるしか無いのを
自ら知りたいか誰かに知らせたいかも知れないにしろ　治して行く
治して行ける心の　一つ限りを乞うように
そうして居られて　何を幾ら耐えられるかを試すかに
空から骨が降って来るのなら　それは
一人も児を産まなかった　私の母の骨

な事を目の当たりにするのを求めた時　あの時
偽りの時
に就いての
知らない誰かが知らず誰を騙そうとするかな小さな話しを聞きたい
二〇二四年十月二十八日

一つの事しか言おうとしない　のなら
一つの事さえ言いようも無い　な
一つの声が自ずと放つ光りを　掴まえ
切り分けようとするのは誰か　な
誰かなど誰にも知られないと　怯える
　な
怯えだけが静かに満ちて行く　眺めを
凝っと見詰る目に就いて語る　な
声は声では無いと声が知れば　一つの事を其処に象って行くしか無い
そうして象られ声を始めから　圧し殺して居たに違いない　この

怯えに怯えを齎すそれに怯え　そうしてそれを乗り越えて行こうと
　　　　　声で無いからこそ　声は
眺めを満たす光りを切り裂き　切り裂ける限りに疲れ知らずに放たれ
言えない一つの事を追い続け　さも怯えを振り払えそうかに安らかに
消えても行けるなら残るのは　きっと光りを僅かにも追い抜いて
誰にも知れない一つ限りの事　…なのかどうか
二〇二四年十月二十九日

周りがすっかり境目も継ぎ目も裂け目一つも見せない白い壁だったとして
いや　唯何処までも白い
壁だったとしたら全く何もが壁でしか無いんだ　と
壁が壁を思うしか無かろう　な壁に向かって…
それとも壁に向かうも何も　壁でしか無い限りに壁に溶け込んで　な
それが
痛みも無い小さな腫れ物なら　一つ
自らを　壁とは異なる一つ限りの

きっと腫れ物ともまるで異なる　唯一つで有る為の何かと認めて揺るぎなく

ぁあ　その揺るぎなさったら　其処から衝き上がる一つ限りに

尽きない痛み…

に一つ限りに尽きないなら　痛みは自らを痛みとも知れなかろうに　と

そうしてぐるぐる壁を回して戯れて居るのは誰だ　名乗れ！」「アハハ

戯れが戯れに戯れて居るのさ　それだけさ　なら名乗れる筈も無かろう」「

そうか　ならそれがお前の名で有るしか無いな　お前を絞め殺す為の」「ほぉ

そうか　で構わないさ　だってそれっ切り何一つ起こらないからは…」「

そうさ　そうして数え切れない事が起こり　其処に詰め込まれ溢れ返ってよう

…「

な其処に居るのは誰だ　名乗れ！　「名乗れる筈も無い

…「

なら白に溺れて　白に白が溺れて　戯れが戯れを殺し続けて　痛みが痛みに

痛め付けられて　けれど

…「それはほんの小さな腫れ物一つの　一つとも異なる

二〇二四年十月三十日

うっかり溺れたら水の底から胸の深くへ尖った痛みが衝き上がって来る
とは確かに知れて居るので　降りて行くか　そうして
降りて行けるなら　うっかりとも溺れたりしない筈で
知らぬ間に浮かび上がれる筈で　けれど浮かび上がれるのは唯首だけか
それとも首と　首と繋がる首の下の背骨と胸の骨と腰骨と手足の骨とか
な姿を晒して漫ろ歩きたい眺めに浸れたならきっと浮かび上がれる筈で
それとも唯　な姿のぼんやり円くも有りそうに浮かび上がるのを傍から
いや　傍など付け入る隙は無いのは首から下の肉を剥ぎ取られたので
疾っくに知れて居る　のなら傍さえ剥ぎ取るのは何なのかに目は向いて
に向いた目はきっと見る見る小さくなって水の底が見付かるなら其処へ
降りて行きたいだろうな　と汚れた物が激しく数知れず通り過ぎて行く
その通り道を見上げる　そのゆっくり見上げる取り返しの付かない動き
は　すっかり剥がされた肉の叫び　で無いなら　唯円い姿に浮き上がり
崩れて行くしか無さそうな夕映えの眺めへと逃げ込んで溶けて行きたい
生まれ付き四つん這いで　四つん這いの儘では時を重ねようも無い身は
疾っくに何を棄てただろう
二〇二四年十月三十一日

十一月

何処から見ても確かに確かな事を容易く溶かすように
遣り方なら知れて居る…
鉄のように硬く時折靡く草のように柔らかい
女の割れ目を撫でるような独り言が匿う重み　それは
花の　いやきっと花とは異なる蕾みの　うかうかとも
綻んで仕舞うのを怖れる　怖れるな儘に鎮まる　心の姿
何と心に姿が有ったとは　姿なんて無さそうだけどな
とはまた　独り言から遣り直せって事か　遣り方なら
知れて居て　もう殆ど遣り果せた筈じゃなかったのか
違うのか
ぁあその　違うのか　を怖れて居たんだろ

違うのか　こそが綻びて仕舞う蕾みなんだ
違うのか　蕾み　蕾み　蕾みと崩れ堕ち
殖える程に　殖える筈も無い数を殖やして行くような
数は　一つ限りの蕾みの姿の内へ折り畳まれ隠されて
却って抗うように零れて剥き出されるなら擦り切れて
逃げて行くのか　それは　それとも
逃げて行くのか　それへ　そのどちらへともするりと
逃げ込み　逃げ込まれる　そんなそれは何だろう　と
赤みを探し赤みに浸みて出直したいかに　微かに声が
漏れたかなら　鋭い刃が振るわれるかに
独り言などどれも輪切りにされ暗い叢へ撒き散らされ
隅隅まで明るく映える花の失せても映える儘の姿を追って
見晴るかそうと揺れる心は失せても尚何処へ逃れられよう
二〇二四年十一月一日

呼び掛ければ目の奥に萌える芽が黙って応える　そうして

何の思いも浮かばなくなった心が凝っと固まる　そうした
響きが
見えない壁に溶けて塞がって心も塞ぎ見えなくする　その
響きだけが　頭の中を
頭の中はすっかり頭の外に擦り替えられたに違いなくに
硬く動かない心を　掘り出したいかに拡げ伸ばしたいかに
響いて
耳だけが痛みが走って働いて澄まされると　退（ど）け
とだけ　忍ばせた声のように聞こえて来る　目の前を
芽吹いて来る憎しみ　それとも　憎しみだけが退かされ
何も見えなくなれば見えない壁ももう見えなくなって
其処に置き棄てられたらしい止まって重く汚れる思いは
思いとも似ても似つかない思いなら　憎しみを纏わされ
きっと心だけが切り取られ退かされる　退かされて行く　その
響きは　退け　とだけ聞こえて来て欲しい　そうしたら
きっと心だけは見えない壁へ黙って開かれて行けように
二〇二四年十一月二日

また其処に　退（ど）いて行く響きが　透き通りたくて
透き通れないなら見えない壁になって　見えないなら壁でも無くに
退かされて行こうか　けれど　退かされて行く姿は其処に居座って
やがて唸るように芽吹かれる　疾っくに棄てられた筈の憎しみの姿
で無いのなら　もう甦らせようも無い憎しみを怖れて背を丸める姿　と
それを嗤えるように戯れ続けたい　望みばかりが殖えて行くのは
焦がれるように乞われて行くのは　何だろう
すると其処にまた見えない壁でも無いのなら　退かされて行くのは
憎しみをもすっかり抜き取られた　怖れ
な怖れでは　それは唯響きに縋り　響きへ還ろうとするしか無いか
けれど　な事ならもう　な事とだけ　知らず戯れても居られようか　と
退かされて行く姿は姿を　唯響きでしか無いような仮の姿に換えて
ゆるゆると震えでもして　もう甦らせようも無い怖れを乞うばかり
な事の後を追うらしくに　響きの陰なら陰に隠れる時を探して居る
二〇二四年十一月三日　隠（こも）れる

な時が響きに換えられた時の　苦かった事は憶えて居る
幾度も繰り返されて已まない　始めで終わりの時　その
変わらない時へ斬り込まれる　入り組んだ透けた襞を纏って靡く草のような
何とも似ても似つかないなら　何でも構わない姿とは似て果て無く遠い姿を
型に嵌めるように流し込んで　けれど何処へ？　いや
何時へ？　と問われるべきか　な問いも
何とも似ても似つかないなら　で
試しにしろどちらを選ぶのか　とも
後から後から時に追われては　目を醒ましに醒まし続けなければならなくて
二〇二四年十一月四日

見ようとすれば
裂け目へ捩れ込んで捩れた形の裂け目を埋めたくて埋められなくて
見るしか無くて

で　常に見届けられ已まないのは
裂け目との隙間を見るしか無くに裂け目の隙間の形に為れずに形な
己の影を追う姿を象ろう象ろうと
な事に拘り塗れる先に　うっかりとも見えて来る
嘘に違いないなら見ては為らない
だらしなく淫らな女の頽れる姿の
隠れた儘に裂け目だけを　その裂け目で裂け目を見ようとする目を
潰しに懸かる　な様を晒して遊ぶ
何とも似て居ないのを厭い憎んで
生かすとも殺すとも係わろうとしない振りで何でも生かし殺し為て
己独りを生かす殺すの先へ甦らせようと処構わず犯し穢しては懐に
裂け目の形の硬い石を抱き込んで
背を丸められるだけ丸め石より深く眠り込もうと嫌でも目を醒まし
有りもしないだろう裂け目の奥へとも訪ねて行かなければ済まない
見ようとすれば…
二〇二四年十一月五日

見えて仕舞う　何とも似ようともしない姿は耐え難く動かし難く
おぞましいに違いないにしろ汚れた泥をたっぷり溜め込んだかに
柔らかく煌めく姿を　偽りと周りに分からせながらに艶めかせて
知らず深過ぎる海を易易と泳ぎ切って仕舞ったかに裸で　な裸は
己が屍なのを執濃く知らせて来るばかりで　けれど屍で有る程に
見る見る甦り　生きるのに嫌でも身に着けなければならない色と
匂いで固まった疾っくに誰かに殺された屍の細切れを絡め纏って
己が胎に宿した児を連れた己がその児でなければ通って行けない
な古い道を幾度も繰り返し抜けては戻った奴らの内の一人として
けれど必ずそれとは異なる姿形に象られた殺した誰かを匿う儘に
見えて仕舞う…

二〇二四年十一月六日

繋がる　は　繋がらない
窒がる　は　窒がらない

伝わる　は　伝わる　なので
伝わる　は　嘘　だなんて誰も言わなかった　その
言わなかった　は　言わなかった儘に
言わなかった　を　置き去りにして
繋がる繋がらない　とも距たる
窒がる窒がらない　とも異なる　その
距たる　と　異なる　なら生き延びさせる　それとも
生き延びるのは　距たるとも異なるとも距たり異なる
な
戯れめいた少しだけ遠い動きなら動きを追う
直ぐ近くの動き　それは　繋がり窒がる動き
なら繋がらない窒がらない動き　とは異なる
な
異なる　だけが生き延びて行くなら何もそれに着いて行けないにしろ
それは其処へそれ限りに行き着いて　何処へも行けずに
生き延びる　とも距たっては
繋がる繋がらない窒がる窒がらない　の繰り返しを
繰り返し已めてばかり居るようにも　な事の続くなら

あからさまに　動きは止めて　止めるのとは異ならせ
異ならせ？　って何が　と尋ねられるのを誘って居る
それは
行き着いた其処が嘘で　何処へも行けない何処もが嘘でさえ無くて
嘘でさえ無いなら　嘘とは異なるのでさえ無くて　その
無いを　どうしようか　無いの周りを
戯れは　戯れない　などと　戯れて
戯れないに賭けるよう　自らに誘って居ようか　を
尋ねるのは誰　と必ず尋ねる誰かの繋がり窒がる動きを
独り動かし　独りで無くも動かさずに居よう　今で無く
なら何時？　と尋ねて自ら消えて行こうともしない　今
を見付けた　今なら　今ごと消えられよう
二〇二四年十一月七日

予め　この夏に彼らは殺されて居た
いや　殺されて居る　殺され続けて

なら　今も予め　殺され続けて居る　と　もぞもぞと言い直したりして居る
誰か　なら此処に居よう　違うのか
そう　その　違うのか　で止めれば
全て　言い尽くされて居る　予め何の声も継がず黙り込む儘を受け容れて…
夏が　あざとい訳では無い　予め夏をあざとく設えた誰か
そう　必ずその誰かに行き着く筈だ　違うのか
その　違うのか　は　息を吹き返して止まらず
刃が　己の切れ味に酔う余り自ずと振り翳されて已まないかで何処へ
いや　何処へと問うならこの夏に戻るしか無い
贋の　眠りに肥え太るように塗れて
姿は　幾つもに数え已まない屍の埋められるのを惚けて眺めるように
夏を　窒ぎ繋いで　窒ぎようは無く繋ぎようは無く　無い儘に
予め　その予めを予め受け容れるように心を構え構えさせられ
昏い　眠りを何時までも痩せ細って探して居る　な
人の　何時までも盛り已まない夏と　刺し違えるかな面持ちを
厭い　棄てたいと乞い続ける　その
姿の　儘にも
二〇二四年十一月八日　刃（やいば）

遠いと近いは同じ
赦すと裁くは同じ　違うと同じは同じ　つまり
違うはどれも同じ
背き合うのは既に溶け合って
殺し合うので生かし合うな
眺めの途切れては繋いでな
途切れると繋ぐは同じ眺めを　過ぎて戻るも同じに
確かめては見失う　忘れては思い出し話しては黙る
話すと黙るは同じ　に
消えて行くと再び現れるは同じ　に
甦ると甦らないは同じ　そう！　もうこの先は無い
けれど
先は無いと先は有るは同じ　に
な事と　弛弛と遠ざかって　遠ざかるは近付くと同じだろうと
やはり　遠ざかるなら遠ざかるしか無くに遠ざかって

どの同じとも距たって　近付いて繋がっても構わずに　なら
遠いと近いは同じ　に戻って来る
戻って来ると戻って来ないは同じ　に身を裂かれるように
身を裂かれるようにと身を継ぎ接ぎされるようには同じに　な
同じに　に入り込んで行く　追い出されると同じに
けれど
どの同じもどの同じと同じな程に違って　その
違って　がどれも幾ら同じだろうと挫けないで
挫けないと挫けっ放しは同じに違う　なら
同じも違いも無い　と　同じと違いは有る　の
有ると無いが同じ眺めに消えて甦るならそれで済んで済まない　な
眺めの　冷たく暖かい　楽しく悲しい
けれど　同じ　なんて　何処にも始めから無かったとしたら
同じが無いなら　違うも無くて　どうしよう
けれど　な　どうしよう　も無いなら無いで　要らないだけで
要らないだけの眺めが　果てなく跳ね回って　力は充ち満ちて
二〇二四年十一月九日

見る事が裁かれる為に見たいのならその
見たかったのと異なるように見えて仕舞う
な事ではきっと人の姿しか取れなかろうか　にも
裁かれる為に象られた甘みに群がる薫りの　仮初めかに
人の姿の型に嵌められた水の苦みを焦がれる
ほっそりとした鳥の姿ならば仄かに水に映る
見たかったのと異なるように見えて仕舞う　その
消えては現れ衰えては煌めき延びる狭間の
人の姿で有ろうと無かろうと其処に馴染み
水の底に棲み着いて根を張るかに見る事の
始まりを見ては蹲る自らを暗がりに擲って
唯一つ覚えて居る事の姿を吐き出すように
見たかったのと異なるように見えて仕舞う　その
でこそ　見たかった通りにしか見取れない
でこそ　それと異なる姿には行き着けない
見る事の始まりの儘に満ちる光りのせいで

目は眩まされ眩みの目の底に鎮まった先に
自らの姿を切り裂く姿でしか姿を現さない　ぁあ
な姿は行き過ぎて欲しいのに却って　その
見たかったのと異なるように見えて仕舞う
な事に挫けもせず始めから挫けた姿を晒し
二〇二四年十一月十日

息の根を止められてだけ　此処に居られると分かる
のは　息の根が少し先なのに直ぐ近くに　穴なのに重そうな塊の形で脹れ
浮くように堕ちたように　さも
うっとりとした顔付きを　あからさまに隠すようにでもして
消えるかにも細く微かに　途切れず息を吸い取って居るからで　なら
な事は知った事では無い　どうせもう息の根を止められた身としては
などと
思ってみても思ってみただけの事で　直に止められた息の根と同じに
頽れて行く身とは知れた事では無いのか…　で

などと　果たして思ったのだろうかと顧みると顧みられる何も無いか
それとも　息の根から噴き出し吹き荒れる息が激しく息を巻くようで
けれど顧みる身は　それには少しも係わらずそれに身構えるでも無く
唯
息の根を止められてだけ　此処に居られると分かる
だけにしろ　一つ疑いが兆されるのは激しく息が巻かれるようなのが
凡そ息とは異なる　例えば寧ろ息を内から引き裂いて硬い穴に変える
それとも　穴に象られて已まない硬い塊を次次に湧き出させては潰す
な様が晒され　それを嫌でも覗かされ見下ろす身では　恰もその様を
独りで操り掌り何時までもそうして其処に留まって居るしか無いかで
其処？
其処とは何処だ　此処が其処では無いのなら
此処？
此処と呼べる何処が此処なのか　などと
顧みたのか顧みようと為て為損なうしか無いのか知りたいとも思わないが
其処やら此処やらが　そうして揺らぐだけで息も
息の根も息巻かれる激しさも　それへ兆す疑いも
産まれて始めて吐いた汚れた昔の息そっくりに消えて行くようでも　その

息が　まだ何処かに粘粘と粘り着いて何時か穴の形の塊に成るのを企んで
腐れば腐る程に腐る臭い息の匂いを　此処と其処の間へ流し込んでそうで
二〇二四年十一月十一日

疑わしいなら取り払われて行くのは馴れればそれで構わないけれど　またも
遠い限りに遠く涼しい声はどうにも為らないでは　何も起こって居ない
そうしてその声こそが抜き差し難く疑わしいとは分かるけれど　それでは
疑わしい何も取り払いようの無い処に居るしか無いとも分かって　その
分かったのも　疑わしいと疑うしか無くなる　ならその
疑わしいと疑うしか無くなるもまた疑わしいのかを疑うしか無くなって
切りに為る（それっ切りだ
切りが無いぞ　なんて言い草は切りから目を背けたいだけのまやかしだろう）
けれど欲しいのは　そんな切りでは無くて
疑いなく確かに疑われる疑いの他に無かろう　その
無かろう…　とはまた何やら疑わしそうな揺らぎでも引き受けるしか無く
行き泥むしか無いようでも　その何処か先に（

とは　遠い限りに遠くとは異なる辺りに）あの同じ涼しい声だけが
疑いなく確かに疑われる疑いの確かな姿を　妖しく誘うようにも
見せて来ないだろうか　いや
あの声で無くても構わないのかも知れなくて欲しいのは　その
その何処か先に
に違いない　疑いようも無くに
な　その
疑いようも無くに　なその何処か先に　こそ
疑いなく確かに疑われる疑いの確かな姿の他に無い　で
見付けたぞ！　なんて勇ましさはしかし直ぐに凋んで
ぁぁ見付け付けて仕舞ったんだな　が力は抜けぐずぐずと
一つ切りの事が終わった後のように抜き差し難く続いて已まないなら　その
已ま無さの疑いようも無い疑わしさに　惑わされ　その
惑わされ　の疑わしさをどう疑えば良いのかを分かろうとするしか無くにも
な事などどうでも構わなくて　涼しい声を
遠い限りに遠くにでも無く　何処かのその何処か先にでも無く
必ず何処とも異なるなら何処でも無いのは
疑いようも無くに疑わしい疑わしさの内に　聞き取ろうとして

仕舞うらしいお前の疑わしさは何だ！
その（
お前の疑わしさなど直ぐに抜け堕ち）唯
何だ！　が　涼しい声を声にして響かせて居るなら居るで構わないけれど
疑わしい限りで…　いや　疑わしいなら疑わしいにしろ　限りでとは何なのか
限りでこそが疑わしいと分かるなら涼しい声さえ消されて居よう　違うのか
な違うのか　に答えるのは違うのかの切りの無い遣り直し　それとも
遣り直し損ないの砕けたような姿ばかりが切りも無く継がれて行くか
誘うように　惑わすように　何時までもそれに馴れないのは疑いようも無く
疑わしいなら
二〇二四年十一月十二日

傷のあざとさ　には何も敵わない
傷は傷付かない　傷を負った者を更に傷付けるだけで　な傷の姿は
傷を傷の先へ裂き傷の奥へ刺さり何処までも堕ちるかを装っては傷を拡げ
負わされた傷を傷に塞ぎ込める　な傷の在処を探る贋の喜びに傷は誘われ

傷の痕も影も無い行き止まりへ（
行き止まりなら必ず行き止まらない　その
行き止まらない塞がりへ）舞うように砕けるように
降りて昇って　もう一つの傷
傷で有ろうとして傷で有り損なって　唯
傷とは異なってそれで有るしか無く　唯傷に傷付けられるのを待って居る
そうして傷付けに来た傷を呑み込むかな勢いで傷に襲い懸かり
と見せ掛け
傷の裏へでも回り込み傷を凝り固まらせ　けれど
凝り固まるなら傷は　ぐるぐると溢れるように塞がり直されて
もう一つの傷で傷とは異なる傷そっくりな姿の影に招き呼ばれ
傷の外を自らの事のように騙り出す　な
もう一つの
傷とは異なって傷な
傷の内に塞がって疾っくに息の根を止められたなら
もう一つの傷の外も窒がれ　傷に拡げられ
あざとさの限りを働かせて　傷は（
に騙られた限りに）

窒がれた傷の外の内を経巡って
ずきずきと痛む傷へと傷を甦らせて行く　な
傷のあざとさ
二〇二四年十一月十三日　誘（いざな）われ

傷を宿した身は既に息絶えている　なら
けれどまだ身では有る限り
傷の内の息の根を掴み取って甦ろうとしなければならずに
傷の内へ　傷を宿した
胎の内へ堕ちて行くように身を擲たなければならずに
いや　にしてもその
…なければならずに　と騙られる騙りは　傷と交わり係われる訳は無くに
傷の外へ独り食み出し　澄んだ水面に厳しく妨げられるかに遠い何時かの
まだ傷を宿して居ないなら姿が有るかも怪しい身に近付き
それとも近付く儘に直ぐにも　身と結ばれるしか無かろう
必ず独りで丸裸で　そうして　この此処へ

戻って行く（
戻って来る　では無く）なら　そうして
傷を傷にする
傷を傷付ける贋の身振りで　な
身一つの周りを　水面さえ深みの音限りに隠し騒がす暗い水が回るなら
次次に取り払われて行くのは　小さな幾つか知れなくも数えられはする
息の根の欠片だろうに其処に　あからさまにも
何の息吹きの影も無いのなら　その
無い影へ取り縋ろうとしなければならずに
失われたとまだ憶えて居る悉くを甦らせに
戻って行く（
戻って来る　では無く　この此処へ
二〇二四年十一月十四日　水面（みなも）　音（ね）

喉が重いのは…　いや
重さとはすっかり喉の事で」と

喉を逸らせるのは喉に閊えた灰の塊で（
けれど灰を呑み損ねたのでは無く灰が閊えるなら其処が喉で）　その
重さは重さな限り吐かれるしか無い（うっかり
重さを呑んだ奴も居たろうか　きっと腸を引き裂かれたろう）その
灰の塊　重さ　喉　の
どれでも構わないなら　ひょっとして
どれとも異なろうとも知りようは無い　その
知りようは無い　は海より遥かに低い広過ぎて凍るような水面に撒かれた
灰の行方を追い惑って彷徨うしか無い　そうして必ず
たとえ喉で無かろうと喉　な
喉　の底の抜けた奥
の開かれ脹れる程に深まる赤
海の底を巡る血を悉く凝らせ　目を射る
赤
は冷たくなった赤児を包む布を染める色　で無いとしたら
殆ど裸で埃塗れで赤児を見詰め降ろすのは誰なのか　その
誰かの誰を　誰かの事でだけは無い事で
騙らなければならない　そうしなければ　重さは灰をすっかり吐いて

ふわふわと軽く漂い揺れる真っ新な海へでも撒き散らそう　な事から
身が剥がれるならそれは　血を吸う灰を拒む喉が騙ろうとするからで
二〇二四年十一月十五日　逸（はや）らせ　包（くる）む

灰に吸われるのは血とは限らない
灰が血を吸うなら血の他の悉くも
灰をずっしり重い手応えで掘って
何も出て来ないなら　うきうきと
身は何処までも軽く影はすっかり
これは遊びだねと息を弛く吐けば
遊びで賭けたのが命と分かる儘に
血の塊よりずっと重いなら重さは
何処も無いなら身一つで引き受け
いや身一つで代われる筈も無くに
逃げ回る程にそれは刃向かう事と
お前は誰だと濃過ぎる影を顧みて

それとも
吸われて仕舞うのかも知れない　な
何が出て来るか
嬉しくて　そうして
薄くなって　そうして
灰に吸われた悉くも　遊びに巻き込まれ
身とは裏腹に　命は酷く重くなって
　命を突き抜けて何処まで堕ちて行くか　な
灰になった数知れない命の代わりに身は
灰に潜るかして逃げ回るしか無いにしろ
　分かれば分かる程に血を吐きたくなる　な
己の影の中へずぶずぶと踏み込んで行く

数知れないかな後ろ姿を寄せ集め
何も見付からないなら
掘り返されて居よう穴が
独り遊びを嬉しがりながら重さを
刃向かい逃げる姿の翳んで行こう
けれどその身振りでしか無かろう
と　お前でだけは無い誰かの声が
二〇二四年十一月十六日

寄せ集めるからには其処に何かを探して
血を吸って棄てられた灰が
縁から僅かずつ崩れて行くのを　まるで
軽軽と堪えて居るように　そうして
穴より幾ら遅れても穴を追うしか無い　な
身が身を騙り身一つで引き受けるのは…
何処からも聞こえて来ないのは何故なのか

命の血は轍の血
轍は命の辿った血の痕　その
轍を追えば何時か　遠くへ失せた命の姿にも行き逢えようか」な声が
何処からも聞こえて来ないのは何故なのか　な
疑いも　赤児の姿がすっかり絶えたように打ち消されて居て換わりに
呼び招かれるとすれば　空っぽな穴を曝して腫れた脚を引き摺る女か「さぁ
知らない…」　その

知らない‥　だけは声に為って
嬉しさが込み上げるようではないかと
あちらこちら辺りを見回すようなら女か
痩せ衰え青ざめた‥　けれどそれも
知らない‥　と声に為って　けれどその声も
何の声も聞こえない処へ戻って行くようで　そう！
そんな事を眺められるならずっと眺めて居よう
なんて思えば堕ちて行くしか無い　嬉しさが果ても無く殺がれる処へ　いや
それで構わない　どころか目障りな女の姿を果ても無く遠ざけられる
それでやっと
何の声も聞こえない処へ戻って行くような声なら声を
何も無い辺りへ向かって追って行けるようでは無いか
硬くごつごつした乾き切った轍に躓くる事も出来ようか
絶えた赤児の血の味を鼻面に匂わせる事も出来ようか　な
重い眺めの底に独り突っ伏した冷たく平たい身は誰か　きっと
女の胎の奥底に呑まれた儘とも知らず息も絶え絶えに　けれど
知らない声の嬉しさを探す嬉しさを懐深くに忍ばせて　何時か
棄てられ犬に喰われる赤児の姿を乞い焦がれる振りで　な程に

な事など疾っくに笑い飛ばし蹴り潰して已まないなら
誰かの誰もまるで無い事か　知らない：　その
知らない：　と抱き合い絡み合い身を捩らせて
命の事など幾らでも騙れる嬉しさを転げ回そう　その為の
赤児を喰らう犬の目付き程に可笑しい物も無く
二〇二四年十一月十七日

屍を生き埋めにしたくて　けれど疾っくに
屍は生き埋めにされ　な事は分かり切って居る程にそれを真似たくて
屍など見失うしか無くて　なら換わりに何を生き埋めに出来るのかと
足下のふわりと蕾みが綻ぶような土を見詰めると　何だろうと
何故生き埋めにしなければならないか　屍の他に
何を生き埋めになど出来ようか　出来たところで何の効も無い　と
空から何も無い真下を　見下ろすように
甚く心に沁みた日なら　顧みられる日はまるでその日限りかに
能く覚えて居るように　なのにその日は唯全てが終わったように静かなだけで

にしろその静かさは　全てが始まった日へと心を引き摺り倒して行くようで
にしろその日の事は　‥なその日が　ぼやけて行くに任されて飛び交うのは
その日を断ち切った　始まりが終わり終わりが始まるなら惚けて眺めて居た
赤黒く燃える裂け目　‥で
その日に隠る仄暗い時は一つなら　嫌でも始まりか終わりかを選ぶしか無い
屍が屍を生き埋めにも出来たなら燃える裂け目も埋められようと揺蕩う心が
独りで決めて懸かる　‥に　歪んで屈んだ形（なり）で
引き摺り惑わされる　屍を暴こうと鳥を真似る鳴き声を響かせるかな身なら
生き埋めにするには　甚く適ってそうで　それとも
その日に棲む鳥なら　疾っくに屍を啄んで
鳥を真似る屍の身を　生き埋めにされたかに震わせる響きにだけは首を傾げ
静かさの向こうへか　飛び去って居よう
二〇二四年十一月十八日　屍（かばね）

水が揺れても風は目に見えない　その
風を測るのを躊躇わせて　まるで何処かに風の根が生えて居て　それを

探し出せば何とか為るような　そんな
土の匂いでもうっかりとも嗅ぎたくて　そうして
風が目に見えないのは風なんて何処にも無いからだと肚に落としたいからで
にしろ　な肚を肚ごと吐き出したくて吐けないでは　何を遣って居るのやら
な
心の襞は隈無く漣が凍るようで
なら
その襞は風の根を乞うかに象られて居よう
かに
目に見えない風ならでこそ　風を測らずには居られない襞はもう心も知らず
肚の内にびっしり満ちて重さを幾らでも増して行くようで…
硬く緊く圧し詰められて行くようで…　に
ようで…　だけな襞こそ　目に見えないだろう違うのか　な
心が心を責め立てなければ肚は収まらない　な
心など目に見える筈は無いなら
風は何処へとも疾っくに吹き去ったらしいのも自ずと
肚に落ちるようで　けれどその
ようで…　の隙を常に風を見て翼を傾げ飛ぶ鳥が紛れ込んで仕舞うとしたら

風の根はすっかり逆さに空へ向かって昇って行くのが目に入らないか　いや
な事を負わされる前に　目は風の痛さに堪え切れない振りで瞑られて居よう
水が揺れたのも　その　瞑られた目の内を掠めた限りの事で
二〇二四年十一月十九日

人で無し？　は打ち消す為にそう叫ばれ　その通りにぼそぼそと打ち消され
色で無し　な
色を盛らせる　花盛り人集り　の　花も人も穢れた幻と
色に心が有るのなら　心付かせて　それで
人も色も頽れる眺めの　更に昔へ遡る　な
滞りない遡りの為には　騙りが騙られなければならない（恐らくは
何も騙られない騙り）
けれど…　いや　その
けれど…　からして　けれど　へ遡ってようなら
何の騙りが騙られようか　な…
いや　その

な…　からして　遡りに叛いてように　それで
連ねられるのは　肯われた
人で無し？　の　騙りようの無い姿　ぁあ　何ともまた（
何処へ遡り損ねて仕舞ったろう）
姿などとは…
青ざめ縮まされ転げさせられ並ばされ　距てられ　その
距たりの上を　そこにだけ土が色を匂わせるらしくに歩いて行けるのは
人で無し？　の問いなら既に解かれて居る　と知れるだけで居直り居座る
色で無し　の色を剥がして已まない　賢げに
震える振りで口を噤み　噤んだ口にだけ騙らせる　それで
色で無しから色が零れ　色に窒がる陰のような見掛けばかりな穴　それとも
穴に似せた捩れた細い陰を一つ置き据えた処で
隠されて居なければならない事が　始めから丸裸で晒されて居たと
騙られる喧しさ…　それで
遡られる騙りを逆巻かせられるなら　その中に
人で色で無しを　無しとは異なる形に擬えようかとも　その
形の付け根を捩切る喜びが厭われ果てて　また
零れて溢れて穴を　咲く花に象るように　窒ぐ筈なら

無しで無し　な色は　まだかとも　人の形だけは為て
二〇二四年十一月二十日　喧（かまびす）しさ

其処に確かに居た事が有る　と独りでは無い誰かが口にすると
其処はその口を睨み付けて　口は幾つ束になろうと噤むも同じ　で
其処に確かに居た事の隣に　其処に居た事は無かった事が並び　いや
並ぶと言うなら　必ず並ぶ　とは異なる事が　いや
事と言うなら　必ず言う　とは異なる
事で無い　とも異なる
けれど　其処は其処だろう　其処は其処と異なる事は無い　何故なら
其処には　もう戻れないから
戻れないからは　行き過ぎるしか無い　けれど何故
もう戻れない…　なのか
戻るしか無いからさ　戻るしか無くて
何処でも無い其処は　其処と名指され
名指されたからには　其処と見出されるしか無い　で？

な　名指され見出されるだけの其処が　其処に有るとでも？　いや
有るでも無いでも無くて其処なのだよ　と其処が口を開くなら
そう騙るだろうか　その
騙りに因って　独りでは無い誰かの内の一人が
もう戻れない其処を騙り返す　その
騙り返しだけで　其処はもう行き過ぎられ　なので
もう戻れない…　は　必ず戻り着ける（
験せば分かる　行き過ぎれば行き過ぎる程に其処へ戻って行って居るよ）
と…
いや　と…　とは異なる　きっと
と…　をぶち壊し粉粉に砕いて何処までも撒き散らし　撒き散らす程に
何処までも…　なんて何処にも無いと知れ
無い何処までも…　の　陰に隠れるように
其処は　行方を眩ます
けれど　行方を眩ますのは
行方を眩ます　と名指し見出し
其処をそう騙る
始めから独りだったのを　独りでは無い誰か

と騙ったお前だろう違うのか　その
違うのか　だけが　其処に置き残されるように騙られ続ける　な
其処に確かに居た事が有る（
などと　例え誰の口が誰の口でも無く騙ろうとも　全く確かに
二〇二四年十一月二十一日

一つの（
なら二つでも幾つでも構わない）事が騙られるなら
先ずは声が声な振りをする　な
声が声を振り切る為に（ぇ？
振り切る　とはまた大きく出たね　声は声にさえ振り切られたりしないさ
と　一つか二つか幾つかが騙られ）
外では
声は必ず声では無い　その前に
外は必ず外では無い　そんな
眺めが弛弛とぼやける程に鮮やかに暈けて拡がるのは全く其処が　そんな

眺めでは無いからで　その
無いからで…　に漸う縋り付いて　そんな
無い眺めを見出せて居るような心積もりを
何処に隠して置いたろうか　それを掘り出すように其処へ乗り出して行く
二〇二四年十一月二十二日

石の白さが騙るのは砕かれた騒がしさ　な
静かな程に目を眩ませる　引き裂かれた影を酷く入り組ませた眺めの中に
それでもまだ何かの誤りかに草が萌えるなら母を匂わせる薫りに惑わされ
小さな白い花の草色を映して咲く姿を目は独りで探して仕舞う　な事を
胸を破って叫ばずには居られない程に激しく喜ぶべきだった　と思えては
な喜びの訪れる兆し一つも見付けられない　割られた石で埋まった眺めの
巡り歩くだけ狭くなって行く中で恥じる…　その恥じるのは誰だろう
虚ろな目はずっと虚ろな儘な母か　その母が産んだ愚かな戯け者な誰かか
花を咲かす時も児を産む時も　石の眺めの隅に置き棄てられて抗うように
この恥を咎めるに違いない　なのでこそ叶わない激しい喜びが求められる…

で　花と母の薫りの混ざった血を巡らせた眠りから醒めるように　な程に
冷たい屍のように眠る身が　眠りから醒めるのを逃れようと　却って恥に
取り縋り　けれどそれで何が望まれるのか恵まれるのか救われるのか　は
分からず仕舞いで　な程に花と母の薫りの満ち溢れる高みに堕ち込もうと
そっくりそれを逆さにした　きっと痛みでさえ無い唯厭われ醜いだけな空…
眺めを此処に釘付けにし更に狭くに圧し拉ぐ空の　乾き果てて砕ける様を
狂い無く騙らなければならないけれど　ばらばらに幾ら砕けようと空は空
で　眺めなどすっかり潰され　空の欠片だけが撒き散らされて居るのなら
その間を好きに走り回れもしよう身に纏わり付く重く薄汚れた疲れ　いや
な疲れこそ一繋がりに纏まって空に立ち向かい立ち向かう程に敗れ　いや
敗れるだけ恥は勝ち誇ろう　そうして引き裂かれた影を酷く入り組ませた
行き泥んで強か酔い潰れる振りをして賢しらに恥から逃れ　それとも恥に
塗れて固まる身の独り　割られた石の中に埋まる喜びに偽り耽る卑しい姿
ならそれはまたそれをそっくり逆さにした
石の白さなど疾っくに振り切り高められて行く己の真白さに喜び窮まる姿
花と母の薫りさえ取り混ぜる愚かな戯け者な誰かになど思いも寄らない姿
な姿が割られた石の転がるばかりな中で腹を空かせ食い物を乞うしか無い
それは何故なのか　その当たり前なのも知り尽くされたようで有りながら

二〇二四年十一月二十三日

女に化けるの女が知れない
女に化けるなら一人しか居ない　その
女の顔は　父にそっくりで無いとしたら唯の干涸らびた血の塊
の老いた
血の塊が知れないのだよ　と如何にも心無く嘘のように　酷く
激しく叫ぶのは誰だっけ　良いよ　それで驚いて居られるなら　その
一人が　穴に似た暗い道を降りて行くのは何だっけ　だなんて
惚けた振りで　女のような細い腰付きで風に浮かぶ鳥のように
辿られて行く其処は殺るか殺られるか　それとも獣の顔付きで
狩られるより先に角で突き殺そうかと　そんな夢見る心持ちで
もう鼻を付ける時は明明と来てるんだ　その
もう一人は　何事も無いかに女に化け　そおっと近寄って行く　其処に
穴に似た空っぽな箱に似て何にも似て居ない暗がりに身を潜め　それとは
もう一人の　誰にも似て居ないなら間違いなくやはり父に似た　酷く

冷たい顔付きの　けれどそれは自らその顔へ向けられた冷たさ
ならきっと角に突かれて斃れるのこそ似合ってようね　などと
呟く女は　幼さは失っても若過ぎるようで化け方も知らぬげで
怖ず怖ずと悲しげな眼差しで表す術なら覚えたような顔付きで
まだ生かされて居るならその先の事を待つしか無い　そうして
そおっと近寄って行く　そうして　見せ掛け限りのもう一人と
戯れ　どちらかを殺し殺されるまで戦い　身も心も分かち合い
残って女に化ける　の女の顔は誰にも女の顔と知られて居よう
父は穴に似た暗い道を唯一つ確かな事と知れて降りて行けよう
父の子とも己を知らずに

それを

一人
そうして

二〇二四年十一月三十日

十二月

何時もの　それとも
時が時から何時も滑り堕ちて居て　何時もの
なんて事は有る筈も無い　な時の事は知らされ続けて居る
必ず　何時も…
それは何故なのか　それを何時も考えて居る　それとも考えるまでも無く
やはり知らされ続けて居るのならその事に
慣れ親しんで　唯一つの縁のように尊んでは　その
尊ぶ心なりを己の名に混ぜ込んで　そうして
醒めた儘に眠る女の胎へも　そおっと潜り込めて独り
眠る儘に醒めた児に育って　自ら育ち直るなら女の胎を裏返すかに荒ぶって
突き殺す（知り尽くされた事だが
それは　誰をも時の中で生かす為には欠かせない）
にしても　誰が誰を？
いや　そう問う誰は誰なのか？　それを自らに問わなければならない
そうして問われる程に殖えて行く　誰
殖える程に女の棄てられた胎の開かれ過ぎた傷口に吸い込まれて行く
誰
なら　きっと身を躱す術だけは予め心得て居よう

かに　誰　を　誰　と　始めに呼んだなら始めに女を孕ませた男の
戯れかに角を生やした獣の姿でもして　のどやかな体の匂いを放つ
そうして
必ず　何時も
時を距てて時を時から滑り堕とし直して時を　知らされ続けては
何処までも白い空の何処かに埋められた筈の　息を絶やさない児は　その
女の胎の内で息をする己の息の根に　眠る振りで心して耳を欹てて居よう
のどやかにも噎せるように濃い何時もの己の体の匂いに　馴れ親しんでは
二〇二四年十二月三日　縁（よすが）

どれがどれとも異なる乏しさ
何が何とも知れない可笑しさ　な
一巡りな　見窄らしくて狭く　けれど
明るく柔らかく窒がって居て　それで
きっともっと凄く豊かな古い　波打つ
腰を利かせて押し出して来る　うっかりまたあの

恥じらいさえも甦らせそうな　それが
深い喜びで無いなら何だろう　と
その奥を抉るように覗き込む　すっかり目のような顔なら顔が
次次に影を消し違う何かへと　他の誰かの首をお座なりに
挿げ替えるのを楽しむように　換わり続けて行く
何時かのあの時限りの何時か　でしか無い何時かの
短さの奥深さへ堕ちて居たら　跡形も無くなる程に
厳しい限りに救われたろうか　にしても
な救いは救いの為にしか無い　な救いに
求められる救いは含まれない　と分かれば
喉の渇きが磨き出す時の奥の　濡れた眺めの透けるような艶に
心付けば撃たれるしか無くに　石の硬さを巡るように泣き喚く
身は何も映さない鏡に溺れる　ようで
二〇二四年十二月二十三日

土塊の薄い陰を汚れた裸に剥いて一つ一つに切り取られたに違いない

で無いなら　互いに巧く触れ合うのを避けて並び歩ける筈は無い　それは
遠く褪せて白く輝くばかりな縁を巡り　それとも
全ての土塊を元に戻し　な
元が何処なのかを見付けたくて目ばかりを激しく傷めて　で
見ろよ　とそっと呟かれて仕舞う声を呑み込む弾みに指差され
埃に塗れる　同じで有り過ぎるように小さな姿達の唯
並ばされ歩かされて　明るく冷たい空より凍るように粒立って
輝くようなら一つ一つに小さく屈み離れて
震える寒さを裸の煌めきで打ち消されて　そうとも知らされず
これは何の遊びだろうと訝る遊びを遊ぶ遊びへ身を擲ってでも
まだそれは続くんだ　と何の続きも断たれ続ける続きを　息を吐くように
連ねる　そうして
連ねられて行く　先は何処なのか
何処でも無いし　有って欲しくもない　な
嘘が嘘に驚くようなら　嘘な筈も無い　な
心も棄てられるなら　この果ての無い愚かさも裏返せようか　そうしては
彼らのように柔らかく腕を振り静かな歩みを進めて
止まった儘に映り続けようなら疾っくに過ぎ去って

明るく冷たい空さえ角角しげに切り取られたろうか
暮れない陽ばかりは嘲られるように残されるように
二〇二四年十二月二十八日

片　２０２４

著者　u_

© 2025 u_　但シ死後ノ著作権ハ放棄スル。

Independently published